南　久　保　遺　跡

伊勢崎警察署庁舎移転新築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2009

群　馬　県　警　察　本　部
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

南久保遺跡
伊勢崎警察署庁舎移転新築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
二〇〇九
群馬県警察本部
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

南 久 保 遺 跡

伊勢崎警察署庁舎移転新築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査

２００９

群　馬　県　警　察　本　部
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

伊勢崎市は、平成17年１月、佐波郡赤堀町、東村、境町との合併で人口21万人、県央部の中核都市へと飛躍しました。これまでの前橋市だけではなく、東は桐生市、太田市と接するまでに市の範囲は広がり、これに伴い、伊勢崎警察署は庁舎を新築して移転することとなりました。その場所として選ばれたのが、古代佐位郡の中心地と推定されている殖蓮地区の一角を占める鹿島町です。

殖蓮地区には、県内を代表する古代寺院の一つ「上植木廃寺」、地域の有力豪族の墓と目される「丸塚山古墳」、古墳時代の豪族居館「原之城遺跡」というように、地域を代表するだけでなく、県内の歴史を語る上でも欠くことのできない遺跡が数多くあります。

本書は、平成20年４月から同年５月に当事業団が発掘調査を行いました南久保遺跡の調査報告書です。

南久保遺跡は、伊勢崎市鹿島町に所在する古墳時代から平安時代の複合遺跡です。調査の成果は、縄文時代の土器や石器にはじまり、近世の遺構や遺物まで貴重な資料が出土し、殖蓮地区の重要性をあらためて認識させる内容があります。その中でも古代の道路状遺構は、幅が６m、両側に側溝を備えた本格的なもので、東600mにある佐位郡衙正倉が発見された三軒屋遺跡との関係できわめて重要な遺構といえます。

このたび、こうした調査の成果を掲載した埋蔵文化財発掘調査報告書を刊行することになりました。本報告書が考古学研究者に限らず、郷土史を研究する県民の皆様に活用されることを期待しております。

最後になりますが、発掘調査から報告書の作成にいたるまで、群馬県警察本部、群馬県教育委員会、伊勢崎市教育委員会、地元関係者等からは種々、ご指導、ご協力を賜りました。関係各位に厚くお礼申し上げる次第です。また、発掘調査および整理業務に携わった関係者の労をねぎらい序とします。

平成21年９月

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長　須田　栄一

例　言

1　本書は、伊勢崎警察署庁舎移転新築事業に伴い発掘調査された、南久保遺跡の発掘調査報告書である。

2　遺跡は、群馬県伊勢崎市鹿島町532-1,533-1,534-1,536-1,537-1番地に所在する。
群馬県遺跡情報検索システムWEB版　伊勢崎市遺跡番号　IS029

3　発掘調査および整理事業は、群馬県警察本部の委託を受けた財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が行い、群馬県教育委員会がその調整を行った。

4　発掘調査　　平成20年４月１日～同年５月31日
整理期間　　平成21年４月１日～同年６月30日　履行期間　　平成21年４月１日～同年９月30日

5　発掘調査および整理事業体制
管理指導　高橋勇夫、須田栄一、木村裕紀、津金澤吉茂、相京建史、中東耕志、飯島義雄、石坂　茂、笠原秀樹
事務担当　原　雅信、大木紳一郎、佐嶋芳明、國定　均、須田朋子、吉田有光、斉藤恵利子、柳岡良宏、矢島一美、齋藤陽子、田口小百合、高橋次代、今井もと子、内山佳子、佐藤美佐子、本間久美子、北原かおり、狩野真子、若田　誠、武藤秀典
調査担当　佐藤明人、小林洋一
整理担当　編集　女屋和志雄　実測　関　晴彦、橋本　淳、岩崎泰一　デジタル編集　齊田智彦
整理作業　金属器保存処理　関　邦一、津久井桂一、増田政子、多田ひさ子
デジタル写真図版作成　牧野裕美、市田武子、酒井史恵、廣津真希子、安藤美奈子、矢端真観、高梨由美子、横塚由香、須藤絵美、下川陽子

6　本書作成の担当は次のとおりである。
編集　女屋和志雄　デジタル編集　齊田智彦
執筆　遺物観察　土器　関　晴彦、縄文土器　橋本　淳、石器　岩崎泰一
遺構写真撮影　調査担当　佐藤明人　小林洋一
遺物写真撮影　佐藤元彦
テフラ分析　プラントオパール分析　（株）火山灰考古学研究所

7　保管については、出土遺物は群馬県の所有となり、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団で管理し、群馬県埋蔵文化財調査センターに収納される。

8　発掘調査および本書の作成では、以下の方々にご協力ならびにご指導をいただいた。記して感謝の意を表します（敬称略）。
群馬県教育委員会、伊勢崎市教育委員会、坂井秀弥、右島和夫、坂爪久純、早川隆弘、勢藤　力、川道　亨、出浦　崇、小宮俊久、須永光一

凡　例

1　挿図の方位は、座標北を表している。座標系は、世界平面直角座標系（国家座標）第Ⅸ系である。

2　遺構断面実測図、等高線に記した数値は標高を表し、単位はmを用いている。

3　挿図の縮尺は、特に記載がない限り以下のとおりである。

遺構　住居跡 1/60　カマド 1/30　掘立柱建物跡 1/60　土坑 1/60　道路状遺構　1/200　1/50
溝 1/100　1/200　1/50　ピット 1/100　1/60　水田 1/100　1/200　畠 1/100　1/200
1/150　全体図 1/400

遺物　1/4 甕・短頸壺　1/3 杯　1/1 石鏃　1/2 石核　1/3 石斧・敲石・凹石　1/4 石皿
1/1 銭　1/2 釘・鉄鏃・鉄鐙

4　写真図版の縮尺率は、挿図とは一致しない。

5　土器の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』によった。内外面で違う場合は外面で表し、斑模様の場合には中間色で表現をしている。

6　遺物観察表にある残存状態は、口縁、胴部、底部の各部位を示して全体の割合を数値で示した。

7　テフラの呼称は、以下の略称を使用した。

浅間A軽石　As-A　天明３年（1783）　浅間B軽石　As-B　天仁元年（1108）
浅間C軽石　As-C　４世紀初頭

8　本書で掲載した地図は、下記のものを使用した。

第１図・第４図　国土地理院発行地形図１：50,000「前橋」「高崎」
第３図　国土地理院地勢図１：200,000「宇都宮」『本関町古墳群』第５図

目　次

序・例言・凡例・目次
第１章　調査の経過
　1　調査に至る経過　　2　調査の経過　　3　調査の方法　　4　遺跡の位置と地形
第２章　検出された遺構と遺物
　1　概要　　2　住居跡　　3　畠　　4　道路状遺構　　5　水田　　6　溝　　7　土坑
　8　掘立柱建物跡　　9　ピット
第３章　自然科学分析
　1　南久保遺跡の土層とテフラ　　2　南久保遺跡におけるプラントオパール分析
第４章　調査のまとめ
遺物観察表　　写真図版
抄録　　奥付
付図　1　南久保遺跡全体図　1：400
　　2　南久保遺跡古墳・奈良・平安時代全体図　1：400
　　3　南久保遺跡中世全体図　1：400

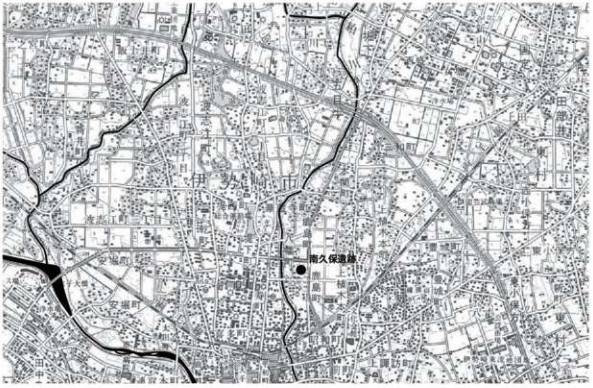
第１章　調査の経過

第１節　調査に至る経過

南久保（みなみくぼ）遺跡は、伊勢崎市鹿島町494番地ほかに所在し、古墳、奈良、平安、各時代の遺跡として認定されていた（「群馬県遺跡情報検索システムWEB版」）。しかし、これまでに発掘調査されたことはなく、遺跡の性格等、詳細については不明であった。唯一、本調査には至らなかったが無線基地局の建設に伴い、平成18年２月、伊勢崎市教育委員会が試掘調査を行い、竪穴状遺構と溝状の遺構を検出している（「平成17年度市内遺跡確認調査報告書」2006）。

平成19年、伊勢崎警察署は、老朽化のため今泉町から鹿島町に新築による移転が計画された。この工事に先立ち、群馬県警察本部より県教育委員会文化課（以下、文化課）に、建設地内の埋蔵文化財の有無についての照会があった。これに対して、建設予定地である伊勢崎市鹿島町532－１番地ほか一帯は、南久保遺跡の一角に含まれていることが回答された。さらに協議した結果、建築工法上、遺跡の保護は難しいことから試掘調査することに合意、遺構が確認された場合には本調査が必要になる旨も併せて伝えられた。文化課は、群馬県警察本部の依頼をうけて試掘調査を実施したところ、溝、土坑が検出され、さらに火山灰や水田に適した土壌のあることが判明した。文化課は、この試掘調査の結果と、本調査の必要があることを県警察本部に回答し、併せて伊勢崎市教育委員会にも試掘調査の結果を通知した。

一方、同年３月21日、文化課は、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団（以下、事業団）に発掘調査の委託方針を示し、事業団はこれを了承した。この調整のもとに、平成20年４月１日付けで群馬県警察本部と事業団との間で発掘調査の委託契約が締結された。ここに、伊勢崎警察署庁舎移転新築事業の実施にあたり、埋蔵文化財の保護を目的に発掘調査対象区全面の発掘調査が実施されることとなった。



第１図　南久保遺跡位置図

第２節　調査の経過

調査は、平成20年４月１日から同年５月31日の２ヶ月間で行われた。１～４区いずれもが２面、一部は３面にわたっての調査となり、遺構量も試掘調査の算定を大きく上回る結果となった。契約期間は、当初５月15日までとしていたが、この遺構量の増大に伴い契約を変更して５月31日まで延長した。以下、調査日誌から進捗状況を抜粋する。

４月

１日から10日までの間に、申請書類の作成、現地にて県文化財保護課、県警察本部、掘削請負会社、重機会社と調査区域の確認、調査工程を協議する。さらに、調査をするにあたって地元鹿島町自治会区長、伊勢崎市教育委員会へのあいさつ、並びに協力を依頼する。

11日、１区から重機により表土掘削を開始。遺構面までは深さが約60m、As- Bを掘削の鍵層とする。ただちに遺構確認をして溝、土坑を検出する。14日から２区の表土掘削、17日からは遺構確認を開始する。22日、１区、２区、４区で遺構精査を開始する。１区では帯状に硬化面が検出され、東西に道跡のあることが判明した。東600mには佐位郡衙正倉跡三軒屋遺跡があり、道跡との関係が注目されるとともに今後の調査の展開に期待が持たれる。２区では南北方向の溝が多数検出され、掘立柱建物跡１棟が重複し、下面には畠がある。調査の開始時の予測に反して、遺構量の増大が確実となった。４区は、点々と残るAs-Bを遺構検出面とした。調査区を東西に二分するように水田と畠が併存、これに重複して溝、土坑が検出された。溝は、水田灌漑用だけではなく、屋敷を区画するものがある。最も広い４区でも、調査は２面かそれ以上になることが明らかとなる。23日、３区１面の全景撮影。道跡について、伊勢崎市教育委員会勢藤　力、川道　亨両氏に指導を仰ぐ。25日、県文化財保護課諸田氏が進捗状況確認のため来跡。28日、２区１面の調査を終了する。30日、上毛新聞社久保記者取材。

５月

１日、１区１面、３区１面の調査を終了する。道跡調査の指導で伊勢崎市教育委員会坂爪久純氏、早川隆弘氏、出浦　崇氏来跡。２日、１区と３区で２面の調査を開始する。（株）火山灰考古学研究所早田氏プラントオパール分析のため来跡。分析は、泥流の成因と年代、そこでの耕作の有無、水田がAs- B下のほかにもあるのか、存否を目的とする。サンプルは、２区、４区で採取した。成果は、第３章参照。この頃までに各区で弘仁九年の地震と思われる噴砂が確認される。道跡との関係や畠の年代観を知る資料となる。７日、県文化財保護課増田、諸田両氏が進捗状況確認のため来跡。８日、３区２面の全景撮影。大部分を畠が占め、状態も良い。４区では水田の調査を開始する。９日、１区３面の調査開始。道跡と重複している15号以下の溝、道跡の硬化面が該当する。12日、３区の調査終了。13日、２区の調査が終了する。県警会計課正田課長、白石室長補佐ほか進捗状況の確認のため来跡。調査期間の延長を協議する。14日、道跡の指導のため伊勢崎市教育委員会勢藤　力氏、太田市教育委員会小宮俊久氏、須永光一氏来跡。15日、県文化財保護課松田　猛氏、深澤敦仁氏来跡。17日、上空からの調査区全景撮影。21日、文化庁坂井秀弥主任調査官、県文化財保護課西田主監、松田　猛氏、右島和夫氏が道跡の調査指導で来跡。１区道跡全景撮影。27日、４区調査終了。（株）火山灰考古学研究所早田氏プラントオパール分析の成果報告。29～30日、器材撤収。31日、プレハブ撤去、調査区埋め戻し、調査を終了した。調査区を県警察本部に引き渡している。

第３節　調査の方法

１　調査区

調査は、４箇所の建築物が対象で、面積の合計は4,200㎡である。１区（882㎡）が附属棟２と呼ばれ、２区（636㎡）が附属棟１、３区（481㎡）が射撃場、４区（2,201㎡）が警察署庁舎である。南側から北に向かって１区、２区、3区、４区と呼称したが、１区の西端は３区とLの字形に接続している。調査区の基準杭は、世界座標系により５ｍを単位に設定した。水準点は、１区と２区が71.30m、４区が71.60ｍである。

２　調査手順

調査は、各区ともに２面、一部では３面にわたって行われた。１面は、基本土層Ⅱ層まで重機で掘削、As-Bを鍵層として遺構の検出、人力による精査を行った。２面以降もこれに続くが、人力による精査およびトレンチ調査を行い重機による掘削、遺構の確認、精査を行った。

３　実測方法

記録図面類は、住居跡 1/20、土坑 1/20、道路状遺構、溝 1/40 を基準に作成した。全体図は、各遺構の個別図を基にして編集し、1/100、1/200 で作成した。デジタル測量を基本とし、業者に委託した。

４　遺物取り上げ

遺物量は、収納箱８箱である。内訳は、縄文土器４箱、その他土器類１箱、石器類３箱である。遺物は、遺構ごとに取り上げた。遺構外の遺物については、グリッドを単位に取り上げた。なお、確認作業中でグリッドを特定できないものは調査区一括とした。遺物の洗浄は、対象を選別した上で業者に委託した。

５　写真撮影

遺構は、調査の担当が撮影した。全景、遺物出土状態、土層堆積状態等撮影し、その他特徴的な遺物等については接写した。調査区の全景は、業者委託で撮影した。

６　基本土層

調査区は、粕川左岸に広がる水田地帯の中にある。河道に面した自然堤防の一角と思われ、基盤は扇状地の礫層、その上にロームもある。傾斜はわずかで、１区と４区の差は30㎝である。土層は、調査区を異にしても色調に差がある程度、安定した堆積状態であったといえる。ただ、粕川の影響は大きく、氾濫の跡がⅤ層からⅦ層に頻繁にみられる。安定したのは縄文時代以降、河道からそれたのが理由の第一であろう。それでも、溝には大量の細砂が流れ込んでいるなど河川の影響力の強かったことがわかる。

Ⅰ層　天明浅間関係火山灰を含む。現在の水田耕作土

Ⅱ層　As-B 混土層　黒褐色

Ⅲ層　古墳時代以降の泥流起源の層、黄褐色～浅黄色の斑状、又はブロック状を呈する。

Ⅳ層　黒褐色土　　上層のⅣa層はAs-C細粒を含み、下層のⅣｃ層はAs-C細粒を含まない。

Ⅴ層　黄褐色土　　縄文時代中期の土器包含層

Ⅵ層　灰褐色～黄褐色土　氾濫層

Ⅶ層　黒褐色土　　黒ボク起源土

Ⅷ層　氾濫層の互層

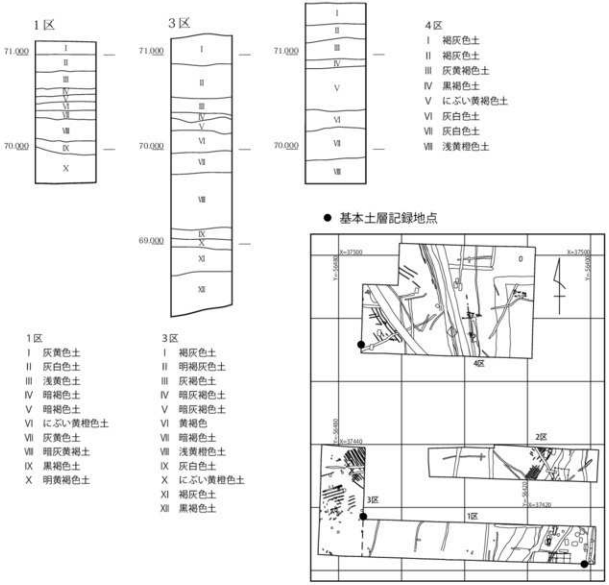
Ⅸ層　ローム漸移層　黄褐色～暗褐色

Ⅹ層　ソフトローム　黄褐色、As-YP が混入

Ⅺ層　As-YP　厚さ 20㎝

火山灰は、As-Bが水田を覆って分布している。厚さは、良好な状態の箇所でも最大５㎝、大半はⅡ層で見られるように混土化している。As-Cの１次堆積層はなく、Ⅳ層への混入が進んでいる。Ⅲ層は遺跡の西を流れている粕川の氾濫による土層とみられ、色調、細砂などのブロックの状態から少なくともⅢ層以上に細分することができる。大きな時差はなく、土質の点でも良く似ている。

Ⅵ層以下は、４区の深掘り写真と調査時の所見によるもので記録した図面はない。Ⅺ層As-YPまでは、Ⅴ層から約２ｍもあり、縄文時代中期以降、度重なる氾濫のあったことを読み取ることができる。その状態は、現地で深掘り作業に立ち会った当事業団岩崎泰一氏によると、かつて上武道路建設で調査した飯土井二本松遺跡で発見された反転したロームの堆積状態と似ていると示唆された。同遺跡は、本遺跡からは北西3.8kmにあり、反転したロームをはさんで上面では縄文時代中期の住居跡、下層では縄文時代前期落とし穴、同中期阿玉台式土器、さらに地点を変えた下層では早期鵜ヶ島台式の土器が出土している。また、北関東自動車道波志江中屋敷東遺跡でも、似たような埋没土層や縄文時代早期の遺構や遺物が出土していて、少なくとも第４図で示した範囲の共通した現象かといえる。



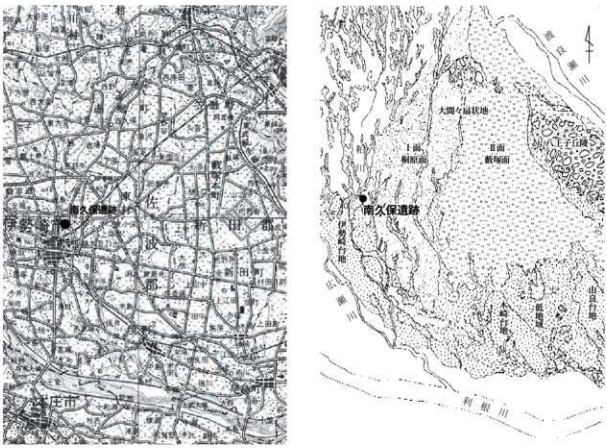
第２図　調査区・基本土層柱状図

第４節　遺跡の位置と地形

１　遺跡の立地

南久保（みなみくぼ）遺跡は、JR両毛線伊勢崎駅の北東1.5㎞、伊勢崎市鹿島町に位置する。国道462号と北部環状線が交差する南側、標高72m、水田地帯の一角である。地形上は、大間々扇状地桐原面に分類され、遺跡の西側を流れている粕川が桐原面と伊勢崎台地との境界にあてられている。粕川の北には、赤城火山斜面に分類される、梨木泥流堆積物で形成された低い丘陵があり、南端は川を超えて独立した丘となって点在している。近いところでは、北西１㎞に華蔵寺山、地蔵山など、南東１㎞に八寸権現山がある。目立つ存在ではあるが高くても20mほど、ここには緩い斜面を利用した群集墳など遺跡が多い。今でもマツなどで覆われたままで生産の場としては不向きなところから、このように利用されたのであろう。一方、おもに粕川の左岸、標高85～90m付近には大井戸、掛矢清水、鯉沼、尼ヶ池などの湧水池があり、これらの下流には細長い谷底平野（浸食谷）が発達している（「伊勢崎市史通史編１」1987）。

現況は、圃場整備されていたとはいえ、全くの平坦な状態である。それが調査では、桐原面の砂礫層の上にローム層があり、その上層に As-YP が堆積していて周囲の台地と同じ堆積状態であることが明らかとなった。さらにその上に厚いローム漸移層までがあり、おそらくは、まだ地形に起伏があったのであろう。それは自然堤防のような所と推定できるが、縄文時代でも中期以降になると氾濫に見舞われている。そのたびにかさ上げされると同時に周囲では平坦化が進み、古墳時代を迎えるころには集落が進出する環境が整いつつあったのではないだろうか。



第３図　周辺地形図・地質図

2　周辺の遺跡

本遺跡の東にある三軒屋遺跡（１）では、佐位郡衙正倉の一部が相次いで発見され、大きな話題となっている。待望の郡衙発見であり、しかも、正倉の一つが「上野国交替実録帳」に記載されている「八面甲倉」と一致するという、二重の驚きである。これまで「殖蓮（うえはす）」地区は、植木が東山道の駅家比定地とされ、さらに７世紀後半に建立された上植木廃寺（２）もあることから、郡の中心地として整備されたのではないかと古くから考えられてきた。一帯には、豪族居館「原之城遺跡」（３）や「丸塚山古墳」（４）「恵下古墳群」（５）といった拠点となる遺跡が点在している。当然、それらの周囲には集落、古墳が多い。「上毛古墳綜覧」では、旧伊勢崎市514基のうち、338基がここ殖蓮村に集中している。大半は、後期の群集墳としても地域を測る指標にはなる。旧石器時代以来の歩みは、上武道路、北関東道の建設に係わる調査で明らかとなり、古墳群の様子は圃場整備による「地蔵山古墳群」（６）の調査などで明らかにされている。基盤は古墳時代をかけて作られ、やがて郡の中でも中心地として整備されたとみてよいだろう。

地域の動向は、古墳時代から古代の様子が出浦　崇（2007）、坂口　一（2008）の両氏により分析されている。出浦氏は、郡衙があるのは何よりの証明としても特異な八角倉、初期寺院の造営などから中央と結びつきの強い郡領氏族がいた、と想定している。郡内に開発の画期は二つあり、大規模な灌漑用水路、須恵器窯などから郡境を超えて活躍できる有力者がいた、とも見ている。一方の坂口氏は、「本関町古墳群」（７）に対応させて集落立地に湧水点が深く関係している、と述べている

参考文献　伊勢崎市教育委員会『三軒屋遺跡Ⅰ－上野国佐位郡衙正倉跡の調査』伊勢崎市文化財調査報告書第79集　2007
伊勢崎市　『伊勢崎市史通史編Ⅰ　原始古代中世』1987
出浦　崇　「上野国の地域開発－佐位郡内における集落の変遷－」『古代文化』第59巻２号　2007
坂口　一　「群馬県伊勢崎市・本関町古墳群と周辺集落の動向－集落変遷と湧水点との因果関係－」
『本関町古墳群』　財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団　2008

第４図　周辺遺跡

第２章　検出された遺構と遺物

1　概要

調査は、全体が２面、さらに１区と４区では３面まで行われた。検出した遺構は、次のとおりである。

１区　住居跡１軒、掘立柱建物跡１棟、土坑24基、溝18条、ピット５基、道路状遺構１条（３区に続く）

２区　掘立柱建物跡１棟、土坑３基、溝13条、ピット３基、畠１箇所

３区　土坑６基、溝２条、道路状遺構１条、ピット15基、畠２箇所

４区　住居跡１軒、土坑８基、集石１基、溝25条、水田、畠

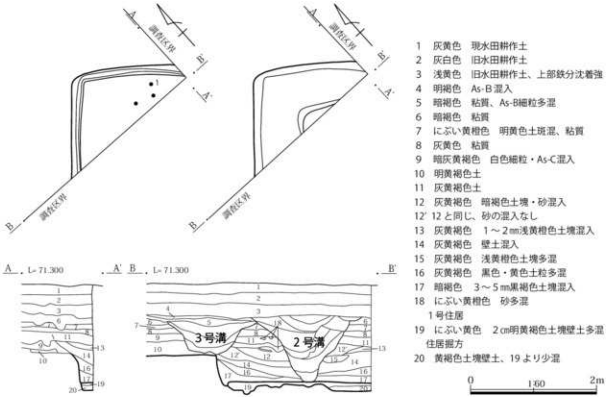
これらは、古墳時代、奈良時代、平安時代、中世、近世に分けられる。出土した遺物は、収納箱にして８箱と少なく、しかもほとんどが包含層からの縄文土器である。遺構の時期判定は、遺物、遺構同士の重複のほかに、As-Bなどの火山灰、弘仁九年の地震による噴砂を鍵層とした。遺構番号は、調査区ごとに付けられている。しかし、溝の中には調査区が違っていても同一と見られるものがあり、その旨を本文中に記した。なお、水田や畠は、遺存状態が良好な箇所を調査したが調査範囲の全体に広がっていたと見られる。

2　住居跡

1区１号住居跡（第５・７図　図版２・13）

概要　調査区南東隅の２面で北西隅だけを検出。２号溝、３号溝と重複し、溝よりも古い。形状　推定方形

規模　北東1.64m以上、北西1.75m以上　残壁高45cm、ほぼ垂直に立ち上がる。床面　検出したのは一部であるが平坦、堅緻な様子がみられた。北東の壁際で幅20cm前後、深さ10cm前後の溝が検出された。しっかり

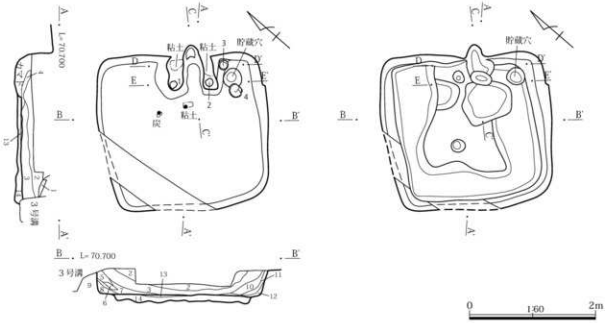


第５図　１区１号住居跡遺構図

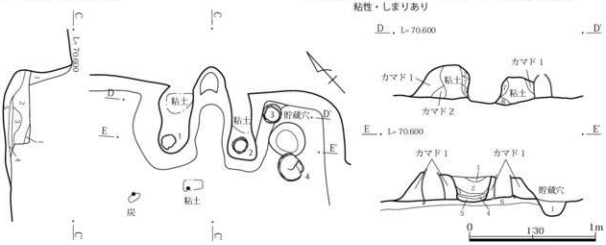
とした掘り方で全周している可能性がある。遺物　床の近くで土師器の杯の破片が出土。これを含めても遺物は少量、しかも細片である。時期　古墳時代後期

４区１号住居跡（第６・７図　図版２・13）

概要　３号溝の調査中に法面で検出。２回の建て替えがある。形状　隅丸方形　規模　長軸2.72m、短軸2.47m、主軸方位N47°E、残壁高46㎝、壁際に溝はない。床面は平坦で堅緻、掘り方では貯蔵穴ほどの穴が一面に検出されている。しかし、その半数ほどは浅くて鋤か鍬の掘削痕である。貯蔵穴　方形、長軸30㎝、短軸29㎝、深さ21㎝　カマド　東壁のほぼ中央部に位置する。全長83㎝、焚き口幅21㎝、高さ22㎝、両袖口に長甕を伏



1　灰黄褐色　細砂多混、３号溝より新しい溝、東壁部壁土
2　灰黄褐色　細砂混入
3　灰黄褐色　黒褐色土塊混入
4　褐灰色　淡黄色土（カマド粘土）粒混入
5　灰黄褐色　９の壁土混入
6　灰黄褐色　５の壁土混入
7　黒褐色　黒色土塊混入
8　にぶい黄橙色　９の壁土多混
9　黄褐色土
10　灰黄色　褐色土塊壁土混入
11　灰黄色　黒褐色土塊混入
12　灰黄色　淡黄色細粒壁土混入
13　暗灰黄色　黄色砂少混、硬化面粘性あり、しまり強
14　暗褐色　１mm白色軽石・２～５mm砂・１～３㎝黄色土塊少混、粘性・しまりあり

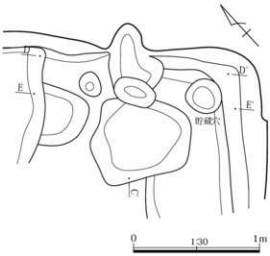


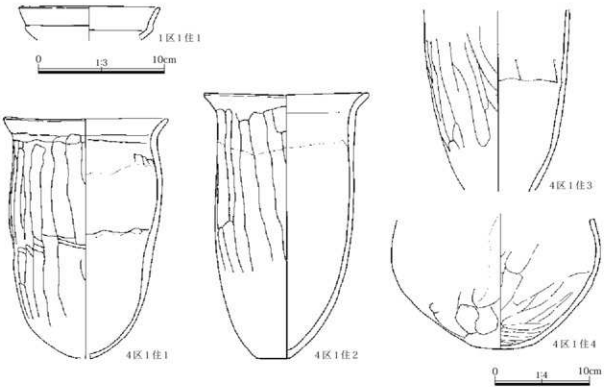
第６図　４区１号住居跡遺構図

せて対に置き、これを芯にして粘土を葺く。焚き口の幅からみて１穴式。遺物　カマドの袖に使われ長甕のほかに右袖脇にあったのが丸胴甕、さらに壁寄りで伏せた小型の長甕１個体がある。この４個体を除いても数は少なく、覆土に混入している破片そのものも同様である。時期　古墳時代後期、甕の特徴から６世紀代でも中頃から後半とみられる。

カマド
1　褐色　1～2㎜白色軽石少混、粘性・しまりあり、1住1と同じ
2　灰色　1～2㎜白色軽石・5㎜褐色土塊少混、粘性・しまりあり、1住4と同じ
3　灰色　1～3㎝白灰色粘土塊多混、粘性・しまりあり
4　明灰色　灰多混、粘性あり、しまり弱
5　黒色　炭粒・5㎜炭・5～10㎜白灰色粘土塊少混、粘性・しまりあり
6　住居の掘方
7　橙色粘土　被熱赤変、天井の崩落土、しまり・粘性あり
8　暗褐色　1㎜白色軽石少混、粘性・しまりあり

カマド1　灰色　5㎜白灰色粘土多混、1㎜白色粒少混、粘性あり、しまり強
粘土　白灰色粘土　粘性あり、しまり強
カマド2　灰色　5㎜白灰色粘土多混
貯蔵穴　暗灰色　1㎜白色粒少混、粘性・しまりあり





第７図　４区１号住居跡遺構図、１区１号・４区１号住居跡遺物図

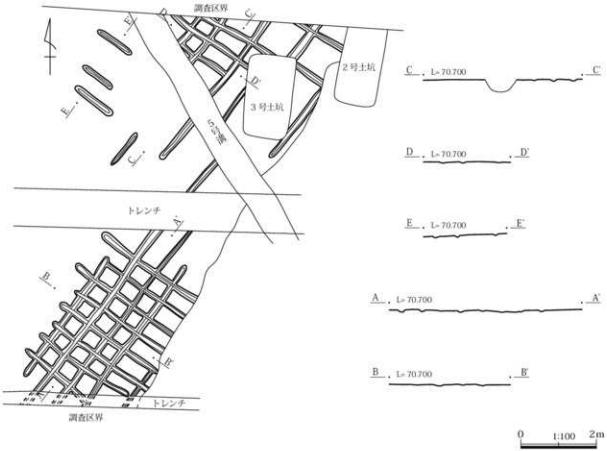
3　畠

２区畠（第８図　図版12）

概要　調査区中央の１面、調査区の幅一杯で南北11.5m、東西６ｍの範囲で６号溝などの溝、土坑と重複して

検出。そのいずれよりも古い。調査時には、横断している試掘トレンチの北側を１号耕作痕、南側を２号耕作痕と分けて記録をしたが、本報告では２区畠として一括して報告する。

耕作痕の特徴　時期を異にするとみられる２つの方向がある。N37°E、北東から南西方向のものが試掘トレンチをはさんで北で６条、南で５条検出されている。これに対してN60°W、直交する北西から南東の方向のものが北で７条、南で８条検出されている。新旧の関係は、掘り方が浅いこと、覆土に差違が見られなかったことから明らかにできなかった。耕作痕は、幅15cm前後、深さ１～５cm、畝間は40～50cmである。３区、４区で検出されている畠と同一のものである。時期　古代、弘仁九年（818）の地震以前

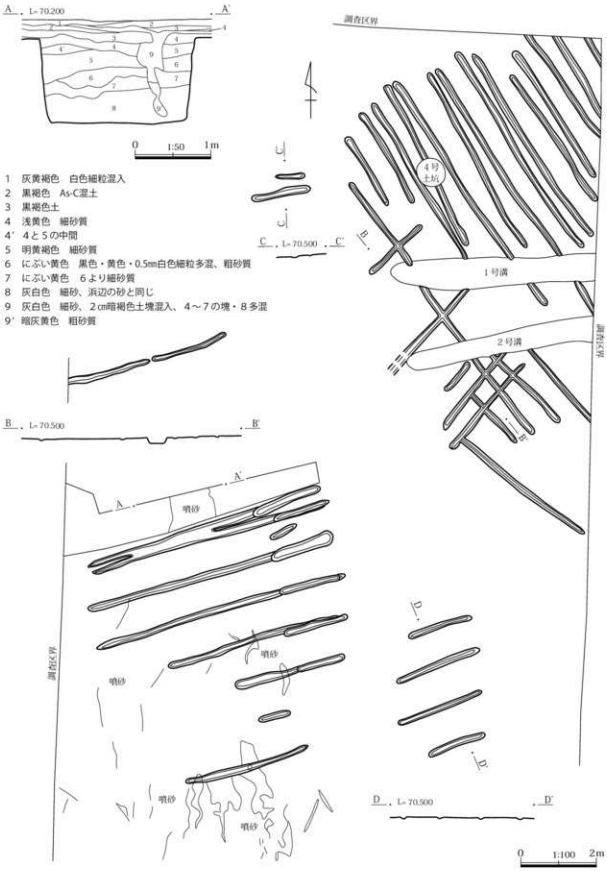


第８図　２区畠遺構図

３区畠（第９図　図版12）

概要　調査区の中でも１区と交差している北側の一帯、南北約20m、東西約14mの範囲で検出されている。東側が１面、西側は上下２面で検出されているが一括をした。重複している１号・２号溝、４号土坑より古く、西側で重複している噴砂よりも古い。噴砂と耕作土の様子は第９図に示した。また、畠の南端は、道路状遺構で削平されたようで、ここにも時代性が現れている。

耕作痕の特徴　西側ではN68～73°Eの１方向、東側ではN41°EとN21°Wの直交する２方向がある。西側は、方向にわずかなずれがあり、一部で重複もしているが東の端を揃え、１区画とみてよいだろう。それに対して東側は、同じ区画としても方向は違い、重複をしていることがわかる。ただし、全く時期を異にするというのではなく、あったとしても耕作の時季が違う程度のものであろう。耕作痕は、幅が12～21cm、深さは１～７cmである。時期　古代、弘仁九年（818）の地震以前

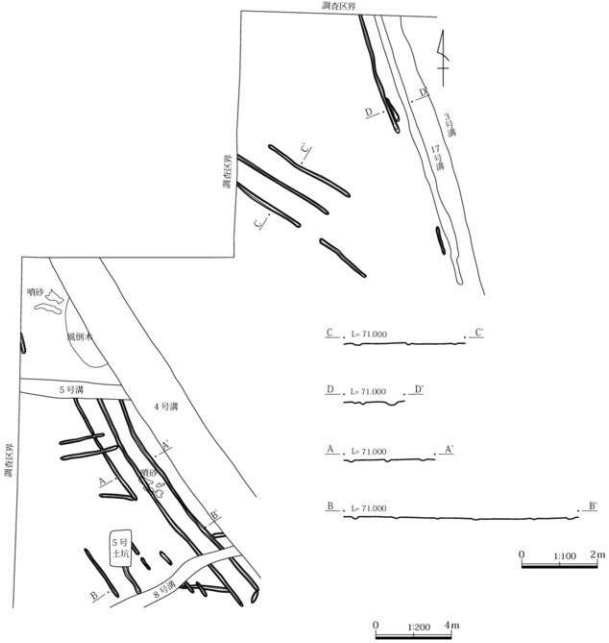

A　L=70.200　A'
0　1:50　1m
1　灰黄褐色　白色細粒混入
2　黒褐色　As-C混土
3　黒褐色土
4　浅黄色　細砂質
4'　4と5の中間
5　明黄褐色　細砂質
6　にぶい黄色　黒色・黄色・0.5mm白色細粒多混、粗砂質
7　にぶい黄色　6より細砂質
8　灰白色　細砂、浜辺の砂と同じ
9　灰白色　細砂、2cm暗褐色土塊混入、4～7の塊・8多混
9'　暗灰黄色　粗砂質
B　L=70.500　B'
C　L=70.500　C'
D　L=70.500　D'
調査区界
4号土坑
1号溝
2号溝
噴砂
0　1:100　2m

第9図　3区畠遺構図

４区畠（第10図　図版２）

概要　調査区の西側一帯に広がっていたとみられるが、３号溝の西側、４号溝の西側がそれぞれ良好な状態である。３号溝の西側では、南北約13m、東西約10mの範囲にN60°WとN17°Wの２方向がある。４号溝の西側では、南北約18m、東西７mの範囲にN35°WとN86°W、N78°Eの３方向がある。噴砂より新しく、５号土坑、４号・５号・８号溝より古い。３号溝より古いが17号溝は畠の一部とみられる。同様に11号・14号・15号溝にもその可能性がある。調査面の違いからすれば、水田よりは古い。また、噴砂とは４号溝の脇で重複しているが、３区と同じように畠の方が古い。

耕作痕の特徴　幅が広いものは20cmを超しているが12～15cm前後、深さ１～３cmである。間隔は85～96cm、104～110cmである。時期　弘仁九年（818）の地震以前



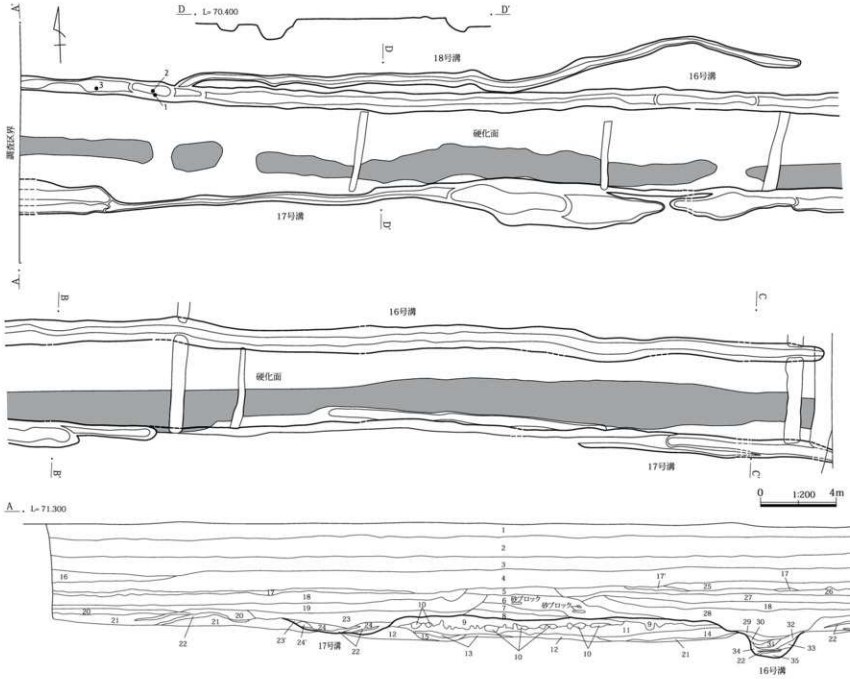
第10図　４区畠遺構図

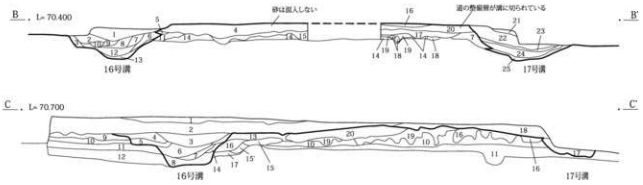
4　道路状遺構(第11・33図　図版11・13)

概要　1区、3区で検出。1面の調査中、調査区を横断して東西に硬化面と、平行する6号・9号の溝を検出、道跡と判断する。その後、路面を調査するためにトレンチを設定、両側に平行する16号・17号溝を検出。最後に路面を断ち割って砂造成面の順で調査をした。幅が約6m、長さは90mにわたっている。規模や東西方向に一直線に伸びている様子から、計画的に整備された道であることがわかる。

重複　16号溝の覆土には弘仁九年の地震による噴砂があり、溝は地震以前に埋没。

規模　側溝の芯々間での距離は6m、路面の幅は4.20～4.30m。堅緻な細砂層が被覆、走向方向はN88°Wである。





B－B'

1　灰黄褐色　白色細粒混入、砂質
2　灰黄褐色　1より黒色味強、白色細粒混入
3　黒褐色　細粒少混
4～8　道硬化堆積　にぶい黄褐色土
9　灰黄褐色土
10　淡黄色　9に3～4cm塊混入
11　灰黄褐色　淡黄色土塊多混
12　灰黄褐色　粘質、均一土
13　灰黄褐色　黄橙色硬土混入
14　黒褐色土
15　4・14が塊状混入
16　にぶい黄橙色　堅緻
17　にぶい黄橙色　硬い砂質、鉄分沈着6と同じ
18　砂塊混入
19　黒褐色　As-C・砂塊混入
20　淡黄色　細砂、鉄分沈着層状にあり、道硬化堆積
21　黄色土塊多混、黄褐色～浅黄色土の斑混
22　暗灰色　白色細粒混入、均一、水田耕作土質
23　淡黄色　粘質土の薄い層
24　黄灰色　粘質土、均一、軟弱
25　明黄褐色土塊多混

C－C'

1　淡黄色　微細均質、塊多混、As-B直下氾濫層
2　淡黄色　均質、2～3mm白色軽石粒混入、水田耕作土質
3　にぶい黄色　2と同じ、白色軽石粒混入
4　浅黄色　白色細粒混入、砂質
5　浅黄色　白色細粒混入、砂質、細砂多混
6　黄褐色　白色細粒・細砂塊混入
7　黄褐色　細砂多混
8　灰黄色　淡黄微細土(壁土)斑混
9　黒褐色　0.5～1mm白色細粒多混、As-C
10　黒褐色　白色細粒As-C 9より多混
11　暗褐色土
12　淡黄色　微細粒、粘質
13　にぶい黄色　灰黄色微細土斑混
14　にぶい黄色　灰黄色土細砂多混
15　にぶい黄色　細砂多混、道整備関連
15'　15より砂少混
16　灰黄色　白色細粒多混
17　灰黄色　粘質、均一土
18　浅黄色　白色細粒混入、水田耕作土質
19　にぶい黄橙色　細砂とねったように塊状混入
20　灰黄色　砂・鉄分凝集縞状に重なる、堅緻

A－A'

1　現耕作土
2　黄灰色　旧耕作土
3　にぶい黄色土
4　黄褐色　鉄分沈着強、下部As-B混入、砂質
5　浅黄色　硬化面不確認、土質均一、上部鉄分沈着あり
6　道硬化堆積　暗灰黄色土
7　灰色　黄褐色土の固い塊・細砂縞状に混入、堅緻
8　灰黄色　1～2mm細砂多混、灰色の薄い層が縞状で堅緻
9　灰黄色　砂質、上部8に近い縞状、下部黒褐色土と塊状にねった状態で混入
10　灰黄色　細砂・黒褐色土がねったように混入
11　黒褐色　As-C混入、下部黄褐色土と斑混
12　黄灰色　砂質
13　灰黄色　細砂多混
14　暗灰黄色　砂質
15　黒褐色　粘質
16　暗灰黄色　均一土、水田耕作土質
17　灰白色　As-B純層
17'　灰褐色　純層に近い
18　灰黄褐色　白色細粒混入
19　灰黄褐色　白色細粒混入
20　黒褐色　As-C混入
21　灰白色　砂質
22　灰白色　噴砂
23　暗灰黄褐色　白色細粒混入、均一質、砂混入なし
23'　23にAs-C混入
24　黒褐色　土質は23と同じ
24'　褐灰色　21多混、24との中間
25　暗褐色　砂質、As-B混土
26　暗褐色　As-B塊混入
27　灰黄褐色　白色細粒混入
28　黒褐色　白色細粒混入
29　暗灰黄色土
30　暗灰黄色　黄褐色土粒、壁土混入
31　暗灰黄色　黄褐色土粒多混
32　暗灰黄色　灰黄色シルト塊壁土混入
33　暗灰黄色　粘質多混
34　黒褐色　粘質、噴砂混入
35　暗灰黄褐色　黄褐色土塊壁土混入

0　1:50　1m

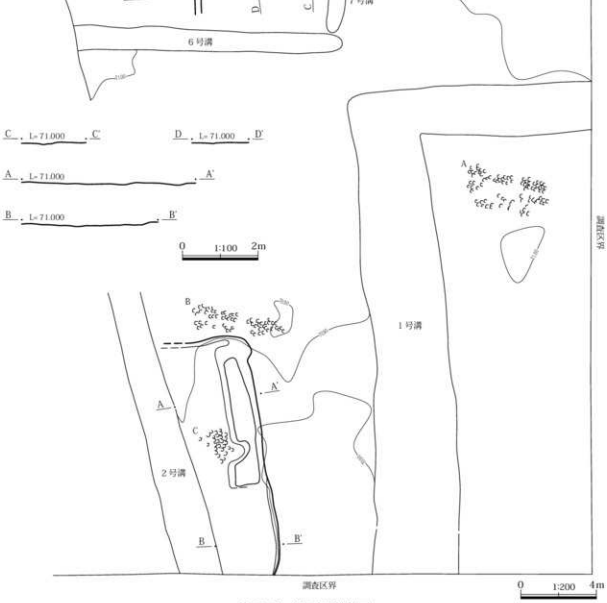
第11図　1区道路状遺構・16号・17号・18号溝遺構図

側溝は、北の16号溝が上幅75～142㎝、深さ37～60㎝、南の17号溝が上幅34～180㎝、深さ28～49㎝である。遺物　16号溝の覆土から土師器の甕、杯が出土。時期　古代、地震噴砂との切り合い、溝から出土した甕や杯の年代観から古代でも８世紀代

5　水田

４区水田（第12・13図　図版２）

概要　調査区東側、As-Bの下で畦、鋤跡を検出。地表からの深さは約70㎝、東壁が70.90m前後、北壁が



第12図　４区水田遺構図

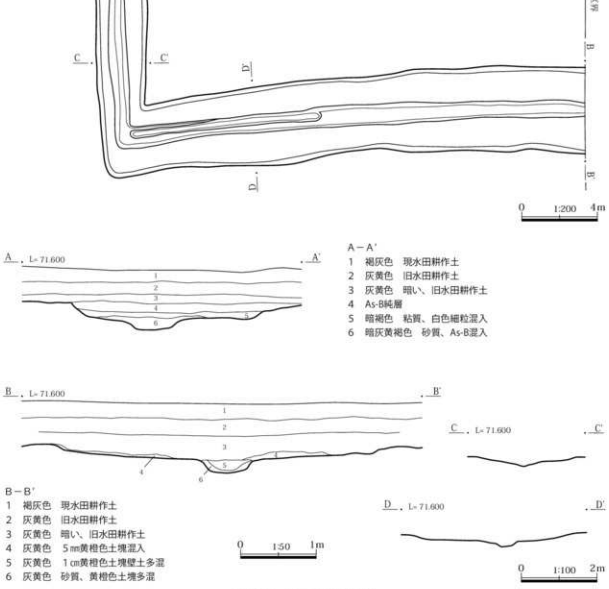
70.95 ～ 71mである。畦は、南北２箇所で検出されている。北は、２号・６号・７号溝で囲まれた中で十字の交差箇所とその周囲である。畦の幅は10㎝前後、高さは３㎝前後である。南は、段による区画の北東の角で幅が1.60 ～ 2mもある大畦が検出されている。鋤跡は、特に集中していた３箇所を図化したもので、１m幅ほどの列にも見える密集状態である。方形の鋤刃先のようで各集中箇所で３箇所を計測したところ、幅が10 ～ 18㎝、奥行き８～ 12㎝である。荒起こしか、畦の補修などの作業が考えられる。時期　平安時代、As-B下

第 13 図　４区水田鋤痕遺構図

6　溝

4区1号溝（第14・33図　図版7・13）

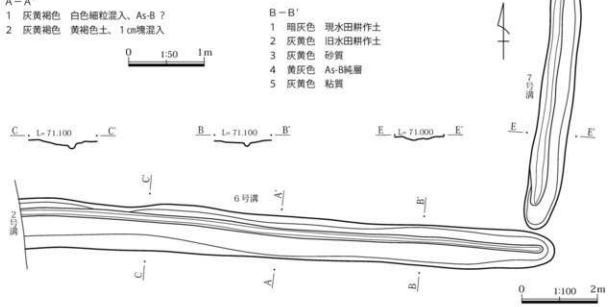
概要　調査区南東の1面、屋敷を囲む溝の一部で、北西側をLの字形に検出。大半は調査区外である。北側は、検出長12.80m、幅2.40 ～ 2.70m、深さ17 ～ 30cm、走向がN87° W。西側は、検出長25.60m、幅3.50 ～ 4.55m、深さ25 ～ 34cm、走向がN7° Wである。北側よりも西側が広く、そしてわずかに深くなる。覆土の様子では、中央部にある一段深い掘り方のものが古く、浅くなるが大きく拡張されていることがわかる。水の流れた形跡はない。遺物　土師器杯、甕、須恵器甕、杯の破片が出土。時期　中世、東壁断面ではAs-B下水田を切っている。



第14図　4区1号溝遺構図

４区６号・７号溝（第15図　図版８・９）

概要　１面、屋敷を囲む溝の一部で、南東側をL字形に検出。６号と７号との間は、わずかではあるが途切れている。６号の西端は２号溝と重複、７号の北端は調査区外である。２号溝より古く、水田跡よりは新しい。６号は、検出長14.06m、幅96 ～ 134㎝、深さ６～ 26㎝、直線的で中央部が細くなり、一段深い。走向はN87° Wである。７号は、走向がN ７° E、検出長6.58m、幅68 ～ 90㎝、深さ10 ～ 16㎝、直線的で西側が一段深い。隣接する１号溝と似た二段の掘り込み構造であるが、全体の幅は半分以下である。また、屋敷とすると一辺が15mあまりと小規模である。覆土　As-Bを含んでいる。７号溝は、４層のAs-Bを切り込んでいる。遺物　６号溝で須恵器甕、７号溝で土師器甕が出土している。時期　中世



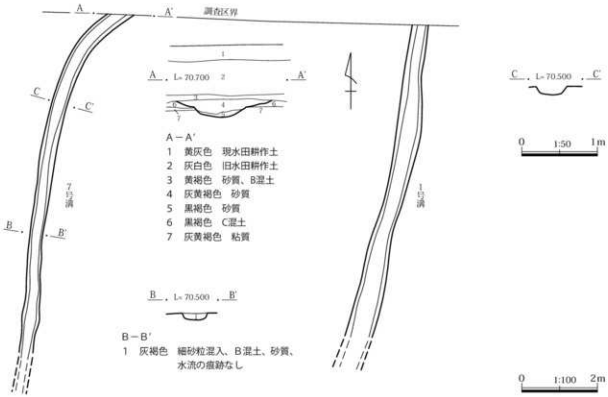
第 15 図　４区６号・７号溝遺構図

１区１号溝（第16図　図版３）

概要　調査区の中央部、１面で南北に検出。道路状遺構、16号・17号・18号溝とは南北に直交して重複している。１号溝が新しい。２区１号溝の真南にあり、掘り方もよく似ていることから同一の溝である可能性が高い。さらに方向としては、北の４区２号溝にも可能性がある。走向はN15° E、検出長8.40m、幅42 ～ 70㎝、北端の断面では、深さは30㎝以上にもなる。　遺物　ない。　時期　中世、上面は削平されていて、現在の耕作土下で確認することができる。

１区７号溝（第16図　図版４）

概要　調査区の西寄りの１面で検出。１号溝の西９mで平行。道路状遺構とは重複、７号溝が新しい。走向はN89° W、検出長9.60m、幅34 ～ 46㎝、深さ９～ 12㎝、南端は浅くなって途切れているが続いていた模様。また、北側が東に向かって蛇行している。覆土はAs-B混入灰褐～灰黄褐色土、As-Bは中位の一部でブロック状に見られた。水の流れた形跡はない。遺物　ない。時期　中世



第16図　1区1号・7号溝遺構図

1区2号溝（第17図　図版3）

概要　調査区の東端、1面で検出。3号溝と平行。1号住居跡、道路状遺構とは重複、2号溝が新しい。走向はN 9°E、検出長11.90m、幅180㎝、深さ105㎝である。幅と深さは南端断面で計測した。覆土　細砂が縞状に堆積。遺物　未掲載の土師器杯・甕、S字状口縁台付甕、須恵器甕細片。時期　中世

1区3号溝（第17図　図版3）

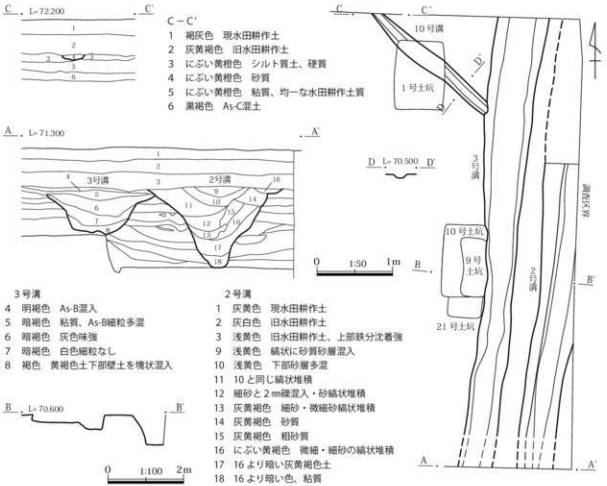
概要　調査区の東端、1面で2号溝に平行して検出。1号住居跡、道路状遺構と重複し3号溝が新しい。10号溝、9号・10号土坑よりも古い。走向はN 6°E、検出長11.90m、幅145㎝、深さ55㎝である。幅と深さは南端断面で計測した。覆土　自然堆積、暗褐色土、上層にAs-Bが混入。2号溝のような細砂は見られない。遺物ない。時期　中世

1区10号溝（第17図）

概要　調査区の北東隅、1面で3号溝に重複して検出。3号溝よりも新しく、1号土坑より古い。走向はN49°W、検出長3.85m、幅24～47㎝、深さ7～17㎝である。覆土　にぶい黄橙色土、自然堆積である。遺物　ない。時期　中世

1区4号溝（第18図　図版3）

概要　調査区の中央部、1面で検出。5号溝、11号溝が1mほどの距離で平行している。2区7号溝が真北にあり、掘り方もよく似ていることから同じ溝の可能性がある。道路状遺構とは重複、新しい。走向はN 6°E、検出長11.90m、幅170㎝、深さ90㎝である。覆土　にぶい黄褐色土、褐色土の自然堆積、一部にAs-Bが混入している。遺物　ない。時期　中世、掘り込み面は11号溝と同じで、5号溝よりも古い。



第17図　１区２号・３号・10号溝遺構図

１区５号溝（第18図　図版３）

概要　調査区の中央部、１面で検出。４号溝と11号溝の間にある。掘り込みは浅く、北端は道路状遺構の硬化面と接する所で途切れている。走向はN３°E、検出長９m、幅27～56㎝、深さ３～11㎝である。覆土　As-Bが混入する暗褐色土の自然埋没。遺物　ない。時期　中世

１区11号溝（第18図）

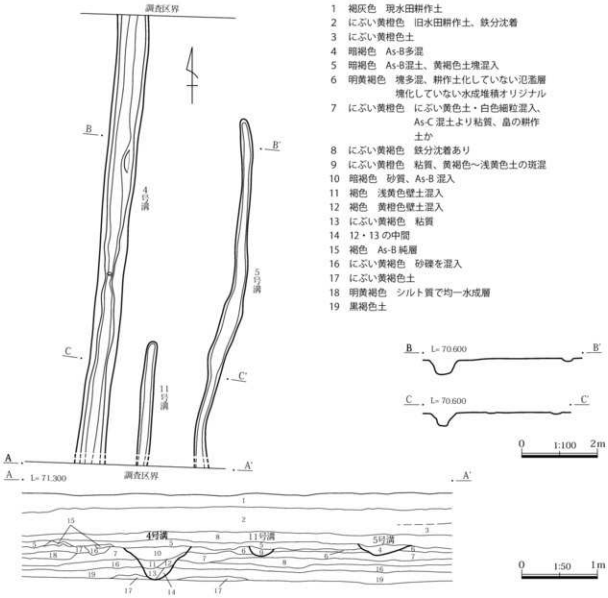
概要　調査区の中央部、１面で検出。道路状遺構の硬化面のところで途切れている。11号溝が新しい。走向はN５°E、検出長3m、幅28～33㎝、深さ２～８㎝である。覆土　にぶい黄橙色土の自然埋没。遺物　ない。時期　中世

１区６号溝（第19図　図版４）

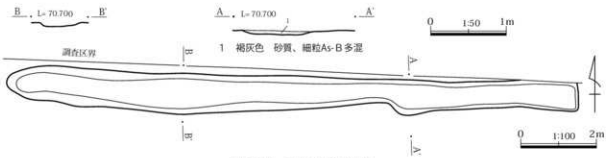
概要　調査区中央の北壁際、１面で検出。走向はN９°W、検出長15.10m、幅62～109㎝、深さ４～10㎝である。覆土　As-Bが混入している褐灰色土で埋没。遺物　ない。時期　中世

１区８号溝（第20図　図版４）

概要　調査区西端、３区との交点に近い１面で検出。７号溝と平行。道路状遺構に重複、８号溝が新しい。走



第 18 図　1 区 4 号・5 号・11 号溝遺構図

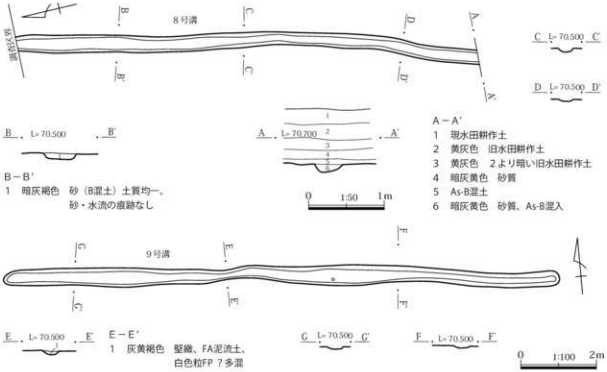


第 19 図　1 区 6 号溝遺構図

向はN13°E、検出長12.22m、幅33 ～ 48㎝、深さ 5 ～ 10㎝である。覆土　As-Bが混入した暗灰褐色土で埋没。遺物　ない。時期　中世

１区９号溝（第20図　図版４）

概要　調査区東寄りの１面で検出。６号溝と平行、道路状遺構南縁に重複、９号溝が新しい。走向はN84°W、検出長14.67m、幅27～56㎝、深さ４～８㎝である。覆土　灰黄褐色土で埋没。遺物　ない。時期　中世



第20図　１区８号・９号溝遺構図

１区12号溝（第21図）

概要　調査区東寄りの３面で検出。12号～15号溝と平行、道路状遺構、16号溝、１号掘立柱建物跡と重複、道路状遺構、16号溝より新しく、１号掘立柱建物跡より古い。走向はN30°E、検出長12.90m、幅68～90㎝、深さ９～40㎝である。覆土　明黄褐色砂層で埋没。遺物　未掲載の土師器杯細片　時期　中世

１区13号溝（第21図　図版５）

概要　調査区東寄りの３面で検出。２区９号溝の延長線上にあたり、覆土の様子と掘り方もよく似ていることから同一の溝である可能性が高い。14号溝と重複、13号溝が古い。走向はN28°E、検出長13.20m、幅78～210㎝、深さ13～67㎝である。覆土　中位に約45㎝、厚い細砂層があり、上下はにぶい黄褐色土、褐色土、褐灰色土で埋没。　時期　道路状遺構よりも古いという調査時の所見であったが、南壁断面を検討した結果、道路状遺構よりも新しい。

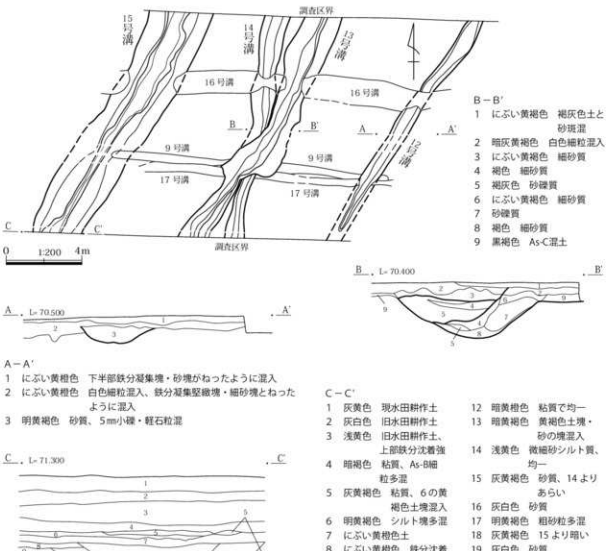
１区14号溝（第21図　図版５）

概要　調査区東寄りの３面で検出。２区８号溝の延長線上にあたり、掘り方もよく似ていることから同一の溝である可能性が高い。13号溝と重複、14号溝が新しい。走向はN16°E、検出長11.56m、幅54～82㎝、深さ９～57㎝である。覆土　中位に厚い細砂礫層があり、にぶい黄褐色土、褐色土とともに埋没。遺物　未掲載の土師器甕細片　時期　中世

１区15号溝（第21・33図　図版13）

概要　調査区東寄りの３面で検出。１区の中では最も大きな溝である。12号～14号溝と平行、２区６号溝の

延長線上にあたり、覆土の様子と掘り方も良く似ていることから同一の溝である可能性が高い。道路状遺構に重複、15号溝が新しい。走向はN28°E、検出長13.20m、幅2.56 ～ 3.18m、深さ1.20 ～ 1.81mである。覆土　底面には砂層が厚く堆積、強い流れの跡を示す穴が連続してあいている。遺物　未掲載の土師器杯・甕、S字状口縁台付甕細片　時期　中世



第21図　1区12号・13号・14号・15号溝遺構図

2区1号溝（第22図　図版5）

概要　調査区西寄りの1面で検出。調査区を縦断し、3号溝、7号溝とは平行している。4号溝に重複、1号溝が新しい。1区1号溝の北延長線上にあたり、掘り方も似ていることから同一の溝である可能性が高い。走向はN 8°E、検出長9.30m、幅92 ～ 132㎝、深さ9～ 16㎝、断面では最大の幅190㎝、深さ58㎝を測る。

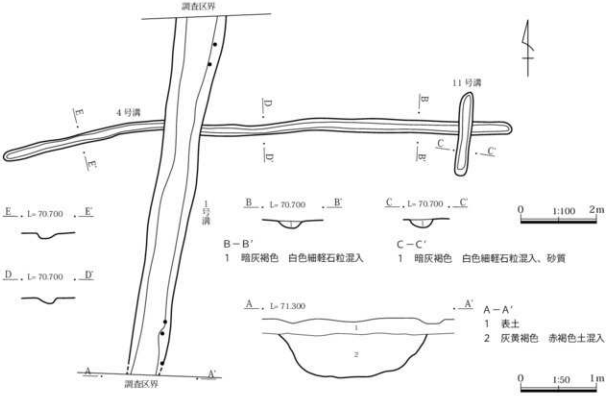
覆土　灰黄褐色土で埋没。遺物　未掲載の土師器杯・甕、須恵器杯・甕細片、縄文土器深鉢破片、陶磁器破片出土。東法面に護岸用と思われる木杭５本が残されていた。時期　現在の水田耕作土下で検出したが覆土の様子、同一とみられる１区１号溝の様子からすると中世。

２区４号溝（第22図　図版５）

概要　調査区西寄りの１面で検出。２区では唯一、東西方向の溝である。１号溝、11号溝が直交して重複、４号溝が古い。西の延長線上には、３区１号・２号溝がある。走向はN89°W、検出長13.50m、幅24～37㎝、深さ５～13㎝、東から西への傾斜である。覆土　暗灰褐色土で埋没。遺物　ない。時期　中世

２区11号溝（第22図　図版６）

概要　調査区東寄りの１面で検出。４号溝に重複、11号溝が新しい。走向はN11°E、検出長2.22m、幅30～35㎝、深さ７～13㎝である。覆土　暗灰褐色土で埋没。遺物　ない。時期　中世



第22図　２区１号・４号・11号溝遺構図

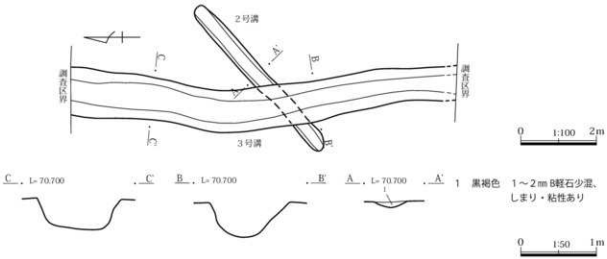
２区２号溝（第23・33図　図版５・13）

概要　調査区東寄りの１面で検出。３号溝に重複、２号溝が古い。重機による掘削が深かったために、両端が削平されている。走向はN48°E、検出長５m、幅40～48㎝、深さ１～９㎝である。覆土　As-Bが混入している黒褐色土で埋没。遺物　覆土に混入して鐙の釣り手金具が出土。割れ口は新しく、鋲には木質が残されていた。本来ならば良好な状態であったことをうかがわせる。釘１点も出土している。覆土に混入して縄文土器深鉢破片も出土。時期　中世

２区３号溝（第23・25図）

概要　調査区東寄りの１面で検出。１区３号溝の北延長線上にあたり、掘り方も似ていることから同一の溝である可能性がある。２号溝とは重複、３号溝が新しい。走向はN８°W、検出長9.90m、幅83～132㎝、深

さ35 ～ 47㎝　北から南への傾斜である。覆土　砂を多く含んだ明黄褐色土、褐灰色土で埋没。遺物　未掲載の土師器杯・甕細片、縄文土器深鉢破片　時期　中世



第 23 図　2区2号・3号溝遺構図

2区5号溝（第24・25・33図　図版12・13）

概要　調査区中央、やや東寄りの1面で検出。3号溝と7号溝の中間にあって、調査区を斜めに縦断している。調査区南側の断面によると畠、6号溝より新しく、1号掘立柱建物跡、1号土坑より古いことがわかる。走向はN34°W、検出長11.80m、幅60 ～ 85㎝、深さ21 ～ 33㎝　覆土　黒褐色土で埋没、中位にAs-Bの2次堆積がある。2層は、3号土坑の覆土と同じようであるとコメントされている。遺物　長頸壺、縄文土器深鉢破片　時期　中世

2区6号溝（第24・25図　図版5・6・12）

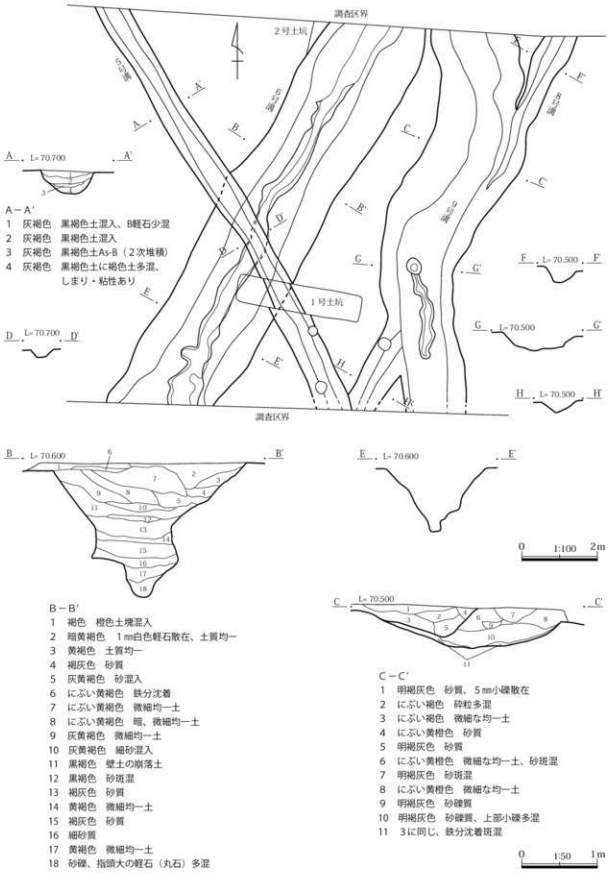
概要　調査区中央、やや東寄りの2面で検出。8号溝と平行、5号溝、1号・2号土坑より古い。1区15号溝の北延長線上にあたり、覆土、掘り方もよく似ていることから同一の溝である可能性が高い。走向はN28°E、検出長11.50m、幅2.80 ～ 2.90m、深さ176㎝である。覆土　中位以下に細砂層が連続している。特に最下層には砂礫が多い。遺物　未掲載の土師器杯・甕、S字状口縁台付甕細片、縄文土器深鉢破片　時期　中世、覆土は少なくとも3時期に区分ができ、幅が減少して浅くなることが読み取れる。

2区8号溝（第24・25図　図版6）

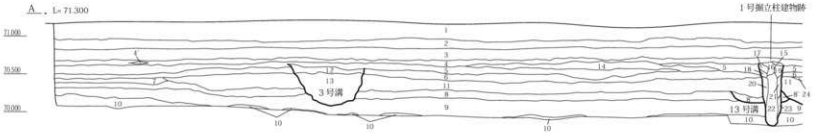
概要　調査区中央、やや東寄りの2面で検出。6号溝と平行、1号掘立柱建物跡、5号・9号溝より古い。1区14号溝の北延長線上にあたり同一の溝である可能性がある。走向はN26°E、検出長10.80m、幅85 ～ 90㎝、深さ40㎝前後である。覆土　明黄褐色土で埋没、下層に砂礫が多い。遺物　未掲載の土師器甕細片、縄文土器深鉢破片　時期　中世

2区9号溝（第24・25図　図版6）

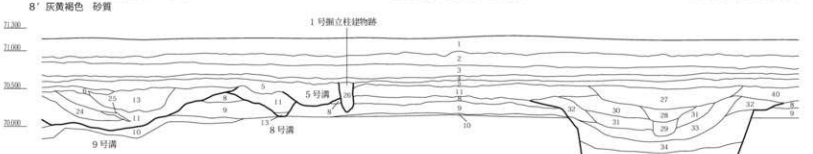
概要　調査区中央、やや東寄りの2面で検出。緩く蛇行していて浅い。8号溝に重複、9号溝が新しい。1区13号溝の延長線上にあたり、掘り方もよく似ていることから同一の溝である可能性がある。走向はN 7°W、検出長10.10m、幅163 ～ 216㎝、深さ55 ～ 60㎝である。覆土　下位に砂礫を多く含む。遺物　縄文土器深鉢破片　時期　中世、6号溝の最新の時期に近い。

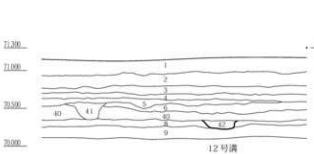


第 24 図　２区５号・６号・８号・９号溝遺構図



1　褐灰色　現水田耕作土
2　にぶい黄橙色　旧水田耕作土
3　にぶい黄橙色　下部鉄分沈着斑混、旧水田耕作土
4　にぶい黄橙色　As-B混入、一部鉄分沈着、軽石少混、3・5の中間
4′ 灰白色　微細砂
5　灰黄褐色　土質均一堅緻、水田耕作土
6　暗灰褐色　土質均一堅緻、水田耕作土
7　褐灰色　6より明色土、土質6と同じ
8　黒褐色　白色細粒多混、As-C少混
8′ 灰黄褐色　砂質
9　黒褐色土
10　灰白色　砂質、砂混入なし
11　明黄褐色　砂質、土質均一、下部砂混入
12　明黄褐色　砂多混、混土層、1～5mm軽石混入
13　褐灰色　砂質、3～10mm軽石多混
14　黄橙色　灰黄褐色土に1～2cm微細粒塊混入、氾濫層か
15　灰黄褐色　白色細粒混入、As-B多混
16　灰黄褐色　白色細粒混入、軟弱で下部空隙あり
17　灰黄褐色　灰色味強い白色細粒
18　灰黄褐色　灰色味強い白色細粒・炭化物混入
19　灰黄褐色　白色細粒・炭化物混入
20　灰黄褐色　黄橙色土塊（壁土）混入
21　灰黄褐色土
22　灰黄褐色　空隙著しい柱痕
23　灰黄褐色土
24　暗黄橙色　白色細粒層状に混入
25　砂質
26　灰黄褐色　白色細粒混入、As-B堅緻か？





27　暗灰黄褐色　鉄分沈着上部に斑混
28　暗灰黄褐色　均一で砂質
29　褐灰色　細石斑混
30　にぶい黄橙色　微細砂で均一
31　30より灰色味強
32　にぶい黄橙色　下部は9・31の中間
33　黄橙色　細砂混入
34　黄褐色　砂質、細砂混入
35　灰白色　砂質、0.2～1cm軽石混入、細粗砂縞状
36　暗褐色　微細砂質
37　35に同じ、2cm軽石混入、角閃石安山岩
38　灰黄褐色　31と同じ、均一微細砂
39　褐灰色　砂質、黒色砂鉄多混
40　にぶい黄橙色　11と同じ、粘質、水田耕作土
41　灰黄褐色　粘質
42　にぶい黄橙色　白色細粒混入
（ポイント位置は付図3）

0　1:50　1m

第25図　2区南壁、3号・13号・9号・8号・5号・6号・12号溝遺構図

２区７号溝（第26図　図版５・６）

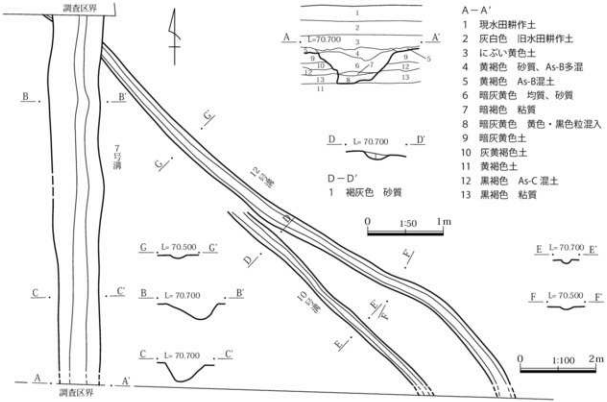
概要　調査区中央、やや西寄りの１面で検出。調査区を縦断し、１号、３号溝とは平行している。２面で検出した12号溝と北端で重複、７号溝が新しい。１区４号溝の延長線上にあたり、掘り方も似ていることから同一の溝である可能性が高い。走向はN−S、検出長9.40m、幅104 ～ 135㎝、深さ38 ～ 49㎝　覆土　As-Bが混入している黄褐色土、暗灰黄色土で埋没。遺物　未掲載の土師器杯・甕細片　時期　中世

２区10号溝（第26図　図版６）

概要　調査区中央部の１面、北西から南東の方向で検出。南端は調査区外にまで続くが、北端は試掘トレンチで途切れている。途切れた上に、掘り方も浅いことから北側にある畠の一部という可能性もある。また、方向や掘り方、規模の点から４号溝、あるいは１区10号溝との関連も考えられる。走向はN47°W、検出長6.65m、幅24 ～ 42㎝、深さ５～ 14㎝である。覆土　褐灰色土で埋没。遺物　ない。時期　古代～中世

２区12号溝（第25・26図　図版６）

概要　調査区の中央部の２面で検出。７号溝と重複、12号溝が古い。走向はN43°W、検出長15.40m、幅35 ～ 48㎝、深さ６～９㎝である。覆土　にぶい黄橙色土で埋没。遺物　ない。時期　中世、掘り込み面は６号溝と同じである。



第 26 図　２区７号・10 号・12 号溝遺構図

２区13号溝（第25・27図　図版７）

概要　調査区の東寄りの２面で検出。１号掘立柱建物跡、９号溝、３号溝と重複しているが、古い方から13号溝、９号溝、１号掘立柱建物跡の順である。また、２号溝とは上下の位置関係にあり、掘り残しがあったか、同じ溝でも時期を異にしている可能性がある。走向はN45°E、検出長9.70m、幅32 ～ 76㎝、深さ２～ 20㎝である。覆土　灰黄褐色土で埋没。遺物　ない。時期　中世、６号溝、12号溝と同じ掘り込み面である。

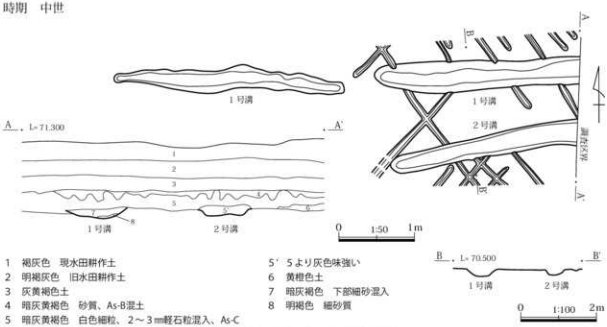
第27図　2区13号溝遺構図

3区1号溝（第28図　図版7）

概要　調査区の北東、1面で検出。2号溝と1.50mの間隔で平行する。畠と重複しているが1号溝が新しい。走向はN86°E、検出長5.42m、幅64～85cm、深さ13～21cmである。覆土　下部に細砂が混入する暗灰褐色土で埋没。遺物　縄文土器深鉢破片　時期　中世

3区2号溝（第28図　図版7）

概要　調査区の北東、1面で検出。1号溝と1.50mの間隔で平行する。畠と重複しているが2号溝が新しい。走向はN86°E、検出長5m、幅50～70cm、深さ9～18cmである。覆土　暗灰黄褐色土で埋没。遺物　ない。時期　中世



第28図　3区1号・2号溝遺構図

4区2号溝（第29・33・34図　図版7・13）

概要　調査区の中央部を縦断、1面で検出。全体が水田に重複し北側で6号溝とも重複している。走向はN16°W、検出長36.40m、幅107～250cm、深さ28～48cmである。覆土　3時期に変遷、にぶい黄褐色土、褐灰色土、褐色土で埋没、いずれも細砂が多く混入している。遺物　不明金具2点、釘1点、陶器甕、軟質陶器すり鉢、土師器杯・甕、S字状口縁台付甕、須恵器杯・甕、陶磁器、縄文土器深鉢破片が覆土から出土。時期　中世

4区3号溝（第29・34図　図版7・8・13）

概要　調査区の中央部を縦断、1面で検出。2号溝と17号溝にはさまれている。全体が水田に重複、3号溝が新しい。走向はN15°W、検出長36.40m、幅160～228cm、深さ55～76cm、A断面に当初の姿が現れ、B断面からは埋没した後、その流路を利用して浅い溝が少なくとも4条、流れていることがわかる。覆土　細砂

を多く含む暗灰黄色土、暗黄褐色土などで埋没。遺物　須恵器甕、元豊通寶１点、鉄鏃１点、馬歯、陶器甕、軟質陶器片口、磁器青磁、陶磁器、縄文土器深鉢破片が覆土で出土。時期　中世

４区17号溝（第29図　図版９）

概要　調査区の中央部を縦断、２面で検出。１面で検出した３号溝の西側で平行している。走向はN19°W、検出長14.86m、幅24～56㎝、深さ４～10㎝である。覆土　灰黄褐色土で埋没。遺物　ない。時期　古代～中世、A断面の７層が畠の耕作土とすると畠よりも古くなる。

４区４号溝（第30図　図版８）

概要　調査区西側を北西から南東の方向に縦断、１面で検出。５号・８号～10号溝と重複しているが４号溝が新しい。逆台形の断面形、しっかりとした掘り方で一直線に伸びている。走向はN32°W、検出長27.30m、幅2.40～2.70m、深さ56～86㎝である。覆土　にぶい黄褐色土、灰褐色土などで人為埋没。遺物　瀬戸天目茶碗、縄文土器深鉢破片　時期　道という見方、中世としたが現代まで下るという調査所見もある。

４区５号溝（第30図　図版８）

概要　調査区西側、北西隅寄りの１面で畠、４号溝と重複して検出。畠より新しく、４号溝より古い。９号・10号溝とは直交するようであるが４号溝で途切れ、東側では未検出。走向はN86°W、検出長5.66m、幅70～90㎝、深さ16～23㎝である。覆土　灰黄色土、灰色土で埋没。遺物　未掲載の土師器杯細片、縄文土器深鉢破片　時期　中世

４区８号溝（第30図　図版９）

概要　調査区の南西部を３号溝の西から南西の方向に横断。２面で検出。６号土坑、４号・10号・11号溝より古いが畠、12号溝よりは新しい。走向はN６5°E、検出長26.38m、幅35～100㎝、深さ７～28㎝である。覆土　暗褐色土で埋没。遺物　未掲載の土師器杯・甕細片、縄文土器深鉢破片　時期　中世

４区９号溝（第30図　図版９）

概要　調査区の西側、２面で４号・８号・11号溝と重複して検出。４号溝よりは古いが11号溝よりは新しい。８号溝との関係は不明。10号溝とは約３mの間隔で平行している。走向はN９°W、検出長18.90m、幅28～60㎝、深さ５～14㎝である。南北に傾斜はない。覆土　暗灰黄色土で埋没。遺物　未掲載の土師器杯細片、縄文土器深鉢破片　時期　中世

４区10号溝（第30図　図版９）

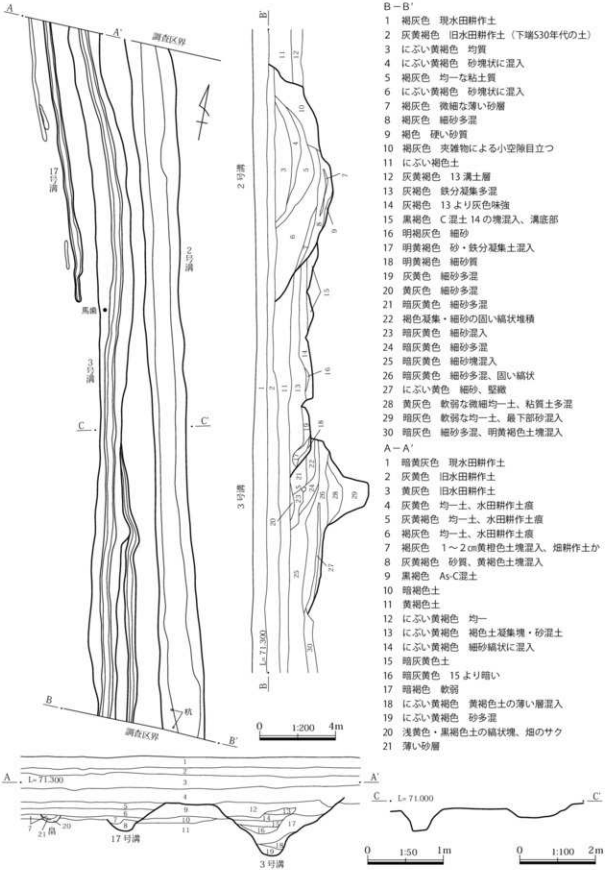
概要　調査区の西側、２面で８号・11号・14号溝と重複して検出。10号溝が新しい。走向はN７°W、検出長14.50m、幅58～86㎝、深さ４～14㎝である。覆土　暗灰黄色土で埋没。遺物　縄文土器深鉢破片　時期　中世

４区11号溝（第30図　図版９）

概要　調査区の西側、北西から南東の方向に縦断、２面で８号～10号・15号溝と重複して検出。９号溝より古い。走向はN35°W、検出長17.80m、幅26～50㎝、深さ11～31㎝である。覆土　暗灰黄色土、淡黄色土で埋没、中位に地震による噴砂がある。遺物　未掲載の土師器甕、S字状口縁台付甕細片、縄文土器深鉢破片　時期　古代、噴砂は弘仁九年の地震、溝は地震以前

４区12号溝（第30図　図版９）

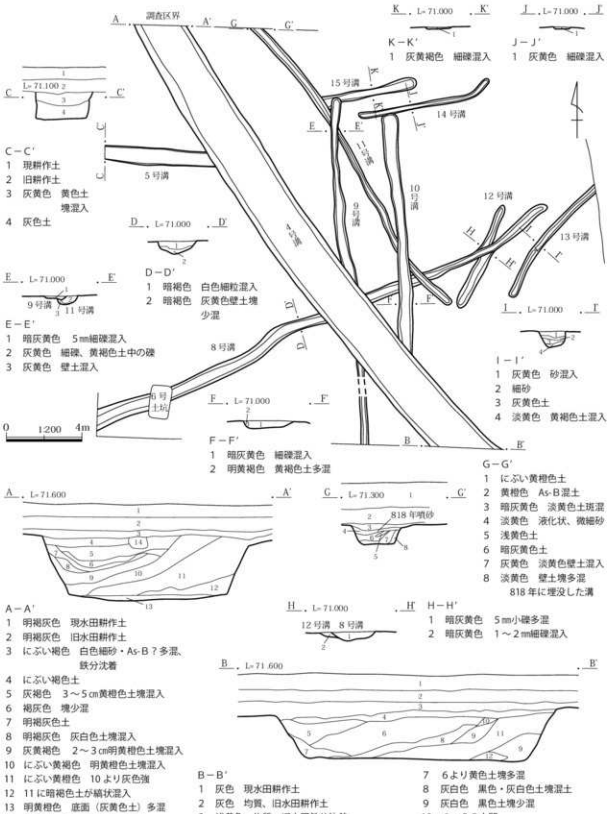
概要　調査区の中央部寄り、北東から南西の方向に縦断、２面で８号溝と重複して検出。８号溝よりも古い。走向はN26°E、検出長5.80m、幅36～64㎝、深さ４～16㎝である。覆土　暗灰黄色土で埋没。遺物　未掲



B－B'
1　褐灰色　現水田耕作土
2　灰黄褐色　旧水田耕作土（下端S30年代の土）
3　にぶい黄褐色　均質
4　にぶい黄褐色　砂塊状に混入
5　褐灰色　均一な粘土質
6　にぶい黄褐色　砂塊状に混入
7　褐灰色　微細な薄い砂層
8　褐灰色　細砂多混
9　褐色　硬い砂質
10　褐灰色　夾雑物による小空隙目立つ
11　にぶい褐色土
12　灰黄褐色　13 溝土層
13　灰褐色　鉄分凝集多混
14　灰褐色　13 より灰色味強
15　黒褐色　C 混土 14 の塊混入、溝底部
16　明褐灰色　細砂
17　明黄褐色　砂・鉄分凝集土混入
18　明黄褐色　細砂質
19　灰黄色　細砂多混
20　黄灰色　細砂多混
21　暗灰黄色　細砂多混
22　褐色凝集・細砂の固い縞状堆積
23　暗灰黄色　細砂混入
24　暗灰黄色　細砂多混
25　暗灰黄色　細砂塊混入
26　暗灰黄色　細砂多混、固い縞状
27　にぶい黄色　細砂、堅緻
28　黄灰色　軟弱な微細均一土、粘質土多混
29　暗灰色　軟弱な均一土、最下部砂混入
30　暗灰色　細砂多混、明黄褐色土塊混入

A－A'
1　暗黄灰色　現水田耕作土
2　灰黄色　旧水田耕作土
3　黄灰色　旧水田耕作土
4　灰黄色　均一土、水田耕作土痕
5　灰黄褐色　均一土、水田耕作土痕
6　褐灰色　均一土、水田耕作土痕
7　褐灰色　1～2cm黄橙色土塊混入、畑耕作土か
8　灰黄褐色　砂質、黄褐色土塊混入
9　黒褐色　As-C混土
10　暗褐色土
11　黄褐色土
12　にぶい黄褐色　均一
13　にぶい黄褐色　褐色土凝集塊・砂混土
14　にぶい黄褐色　細砂縞状に混入
15　暗灰黄色土
16　暗灰黄色　15 より暗い
17　暗褐色　軟弱
18　にぶい黄褐色　黄褐色土の薄い層混入
19　にぶい黄褐色　砂多混
20　浅黄色・黒褐色土の縞状塊、畑のサク
21　薄い砂層

第 29 図　4 区 2 号・3 号・17 号溝遺構図



第 30 図　4区４号・５号・８号・９号～15 号溝遺構図

蔵の土師器杯・甕細片、縄文土器深鉢破片　時期　中世

4区13号溝（第30図　図版9）

概要　調査区の中央部寄り、北東から南西の方向に縦断、2面で3号溝と重複して検出。3号溝よりも古い。走向はN43°E、検出長7.20m、幅34～40㎝、深さ14～24㎝である。覆土　淡黄色土、暗黄色土で埋没、中位に細砂層が堆積。遺物　未掲載の土師器杯細片、縄文土器深鉢破片　時期　中世

4区14号溝（第30図　図版9）

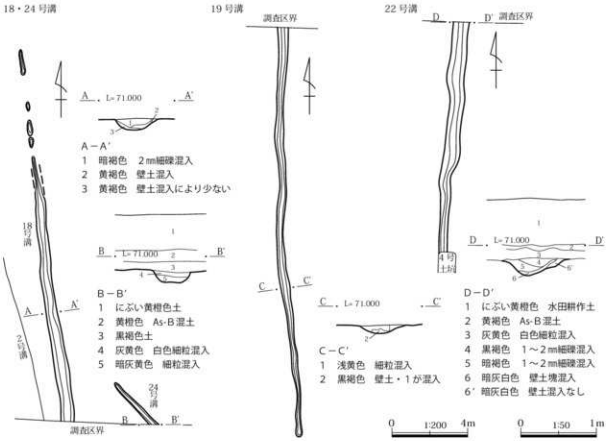
概要　調査区の西側、2面で10号溝と重複して検出。東西に横断、15号溝とは約1mの間隔で平行する。走向はN79°E、検出長7.30m　幅20～36㎝　深さ1～5㎝である。覆土　灰黄色土で埋没。遺物　ない。時期　中世

4区15号溝（第30図　図版9）

概要　調査区の西側、2面で9号・11号溝と重複して検出。東西に横断、14号溝とは約1mの間隔で平行する。走向はN76°E、検出長4.90m、幅32～70㎝、深さ3～5㎝である。覆土　灰褐色土で埋没。遺物　ない。時期　中世

4区18号溝（第31図　図版9）

概要　調査区の中央部、2面で検出。北端は削平されて途切れている。走向はN12°W、検出長19.78m、幅50～76㎝、深さ5～14㎝である。覆土　暗褐色土と黄褐色土で埋没。遺物　縄文土器深鉢破片　時期　中世



第31図　4区18号・24号・19号・22号溝遺構図

４区24号溝（第31図　図版10）

概要　調査区の中央部、２面で南壁にかかって検出。走向はN47°W、検出長9m、幅23～32cm、深さ2～5cmである。覆土　暗灰黄色土、灰黄色土で埋没。遺物　ない。時期　中世

４区19号溝（第31図　図版10）

概要　調査区の中央部を縦断して２面で検出。南端は途切れている。走向はN６°W、検出長21.60m、幅20～54cm、深さ2～9cmである。覆土　浅黄色土、黒褐色土で埋没。遺物　ない。時期　中世

４区22号溝（第31図　図版10）

概要　調査区の中央部を縦断、２面で検出。南端で１号土坑と重複。土坑よりも古い。走向はN５°E、検出長12.20m、幅42～92cm、深さ10～36cmである。覆土　黒褐色土、暗褐色土、暗灰白色土で埋没。遺物　未掲載の土師器杯・甕細片、縄文土器深鉢破片　時期　中世

４区20号溝（第32図　図版10）

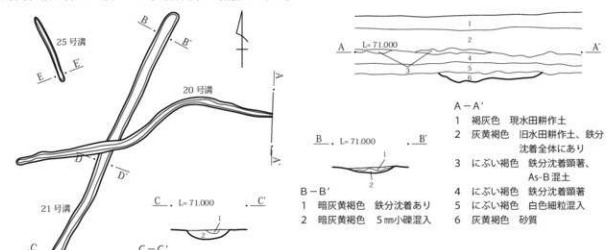
概要　調査区の東側、２面で21号溝と重複して検出。21号溝よりも新しい。東端は調査区外へ続いている。走向はN21°E、検出長14.34m、幅18～58cm、深さ3～9cmである。覆土　灰黄褐色土で埋没。遺物　縄文土器深鉢破片　時期　中世

４区21号溝（第32図　図版10）

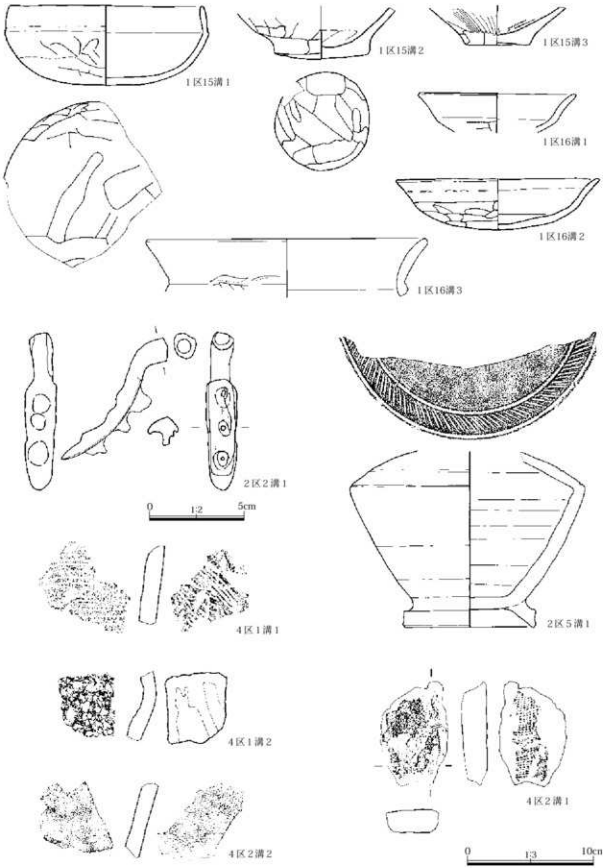
概要　調査区の東側、２面で20号溝と重複して検出。20号溝よりも古い。走向はN77°E、検出長19.56m、幅44～68cm、深さ6～13cmである。覆土　暗灰黄褐色土で埋没。鉄分凝集がある。遺物　縄文土器深鉢破片　時期　中世

４区25号溝（第32図）

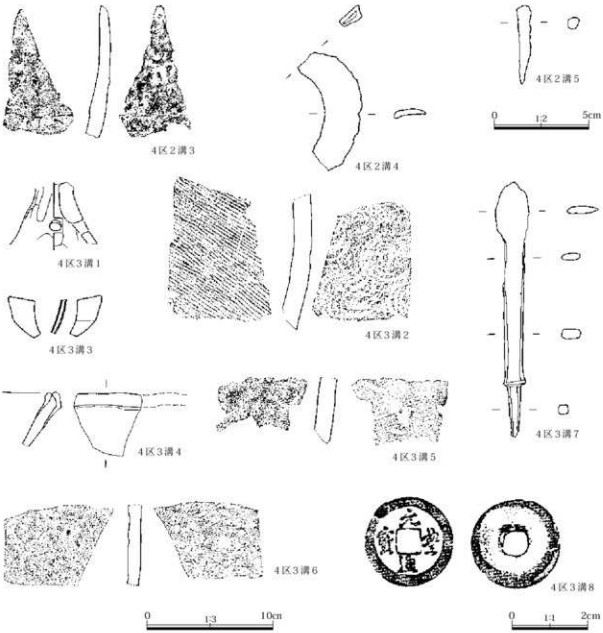
概要　調査区東側の中央、２面で19号溝と21号溝の間で検出。走向はN22°W、検出長3.68m、幅22～30cm、深さ1～3cmである。覆土　黄灰色砂層で埋没。遺物　ない。時期　４号溝の西側で検出された畠の耕作痕と方向、幅や深さが似ている。耕作痕の可能性がある。



第32図　４区20号・21号・25号溝遺構図



第33図　1区15号・16号・2区2号・5号・4区1号・2号溝遺物図



第 34 図　４区２号・３号溝遺物図

7　土坑

１区１号土坑（第35図）

概要　調査区北東隅の１面で10号溝に重複して検出。溝より新しい。形状　方形　長軸182㎝、短軸134㎝、深さ40㎝　主軸方位N ２°E　遺物　未掲載の土師器杯・甕の細片　時期　中世

１区２号土坑（第35図）

概要　調査区北東隅の１面、単独で検出。１号の南西、30㎝足らずの位置にある。形状　円形　長軸137㎝、短軸135㎝、深さ40㎝　遺物　未掲載の土師器杯細片　時期　中世

１区３号土坑（第35図）

概要　調査区北東隅の１面、単独で検出。１号の南２ｍの位置にある。形状　方形　長軸146㎝、短軸95㎝、

深さ63㎝　主軸方位N 9°E　底面で検出された土坑は長軸60㎝、短軸58㎝、深さ５㎝である。遺物　未掲載の土師器杯細片　時期　中世

１区４号土坑（第35図）

概要　調査区東寄りの１面、道路状遺構の硬化面に重複して検出。円形の上に方形が重複。形状　方形　長軸176㎝、短軸143㎝、深さ36㎝　主軸方位N84°W　遺物　未掲載の土師器甕細片　時期　中世

１区５号土坑（第35図）

概要　調査区東寄りの１面、１号掘立柱建物跡に重複して検出。土坑が新しい。南側が調査区外となっている。形状　方形　長軸153㎝以上、短軸92㎝、深さ30㎝　主軸方位N 5°E　遺物　未掲載の土師器杯　時期　中世

１区６号土坑（第35図）

概要　調査区東寄りの１面、道路状遺構の硬化面に重複して検出。土坑が新しい。形状　方形　長軸190㎝、短軸112㎝、深さ32㎝　主軸方位N 4°W　遺物　未掲載の土師器杯細片　時期　中世

１区７号土坑（第35図）

概要　調査区東寄りの１面、単独で検出。８号と１ｍの位置にある。形状　円形　長軸74㎝、短軸71㎝、深さ32㎝　遺物　ない。時期　中世

１区８号土坑（第35図）

概要　調査区東寄りの１面、単独で検出。16号と50㎝足らずの位置にある。形状　円形　長軸85㎝、短軸85㎝、深さ39㎝　遺物　ない。時期　中世

１区９号土坑（第35図）

概要　調査区東寄りの１面、10号土坑と重複して検出。10号より新しい。下層には21号土坑があり、全体が３号溝にも重複している。形状　方形　長軸156㎝、短軸73㎝、深さ23㎝　主軸方位N 4°W　遺物　ない。時期　中世

１区10号土坑（第35図）

概要　調査区東寄りの１面、９号土坑と重複して検出。９号より古い。形状　方形　長軸191㎝、短軸121㎝、深さ19㎝　主軸方位N 3°E　遺物　ない。時期　中世

１区11号土坑（第35図）

概要　調査区東寄りの１面、16号・17号土坑に重複して検出。最も新しい。形状　方形　長軸115㎝以上、短軸172㎝、深さ45㎝　主軸方位N 8°E　時期　中世

１区12号土坑（第35図）

概要　調査区東寄りの１面、16号・17号・23号土坑に重複して検出。最も新しい。形状　円形　長軸105㎝、短軸104㎝、深さ46㎝　遺物　未掲載の土師器甕細片　時期　中世

１区13号土坑（第36図）

概要　調査区東寄りの１面、道路状遺構の硬化面に重複して検出。土坑が新しい。形状　方形　長軸287㎝、短軸80㎝、深さ17㎝　主軸方位N86°W　遺物　ない。時期　中世

１区14号土坑（第36図）

概要　調査区東寄りの１面、18号・19号・22号土坑と重複して検出。最も古いか。形状　方形　長軸145㎝、短軸85㎝、深さ６㎝　主軸方位N 4°W　遺物　ない。時期　中世

１区15号土坑（第36図）

概要　調査区中央西寄りの１面、道路状遺構の硬化面に重複して検出。道路状遺構より新しい。形状　方形　長軸114㎝、短軸48㎝、深さ16㎝　主軸方位N80°W　時期　中世

１区16号土坑（第36図）

概要　調査区東寄りの１面、11号・12号・17号土坑と重複して検出。古い方から17号、16号、11号・12号の順である。形状　方形　長軸297㎝、短軸107㎝、深さ54㎝　主軸方位N10°E　遺物　未掲載の土師器杯細片　時期　中世

１区17号土坑（第36図）

概要　調査区東寄りの１面、11号・16号土坑と重複して検出。最も古い。形状　方形　長軸264㎝、短軸77㎝、深さ66㎝　主軸方位N16°E　遺物　ない。時期　中世

１区18号土坑（第36図）

概要　調査区東寄りの１面、14号・19号・20号・22号・24号土坑と重複して検出。最も新しい。形状　方形　長軸187㎝、短軸95㎝、深さ48㎝　主軸方位N10°E　遺物　ない。時期　中世

１区19号土坑（第36図）

概要　調査区東寄りの１面、14号・18号・22号・24号土坑と重複して検出。18号土坑より古く、14号・22号・23号土坑より新しい。形状　方形　長軸50㎝以上、短軸86㎝、深さ46㎝　主軸方位N10°E　遺物　ない。時期　中世

１区20号土坑（第36図）

概要　調査区東寄りの１面、18号・22号・23号土坑と重複して検出。形状　方形　長軸105㎝、短軸98㎝、深さ62㎝　主軸方位N２°W　遺物　未掲載の土師器甕細片　時期　中世

１区21号土坑（第36図）

概要　調査区東寄りの１面、９号・10号土坑とともに３号溝に重複して検出。３基の中では最も古い。形状　方形　長軸60㎝以上、短軸90㎝、深さ22㎝　主軸方位N７°E　遺物　ない。時期　中世

１区22号土坑（第36図）

概要　調査区東寄りの１面、14号・18号・19号・20号・23号・24号土坑と重複して検出。形状　方形　長軸123㎝以上、短軸48㎝以上、深さ42㎝　主軸方位N－S　遺物　ない。時期　中世

１区23号土坑（第36・38図　図版13）

概要　調査区東寄りの１面、12号、18号、20号と重複して検出。12号・18号・20号土坑より古い。形状　方形　長軸257㎝、短軸88㎝、深さ８㎝　主軸方位N３°W　遺物　白磁碗　時期　中世

１区24号土坑（第36図）

概要　調査区東寄りの１面、18号・19号・24号土坑と重複して検出。24号土坑との関係は不明であるが、ほか２基よりは古い。形状　方形　長軸153㎝、短軸73㎝、深さ73㎝　主軸方位N13°E　遺物　ない。時期　中世

２区１号土坑（第36図）

概要　調査区の中央やや東寄りの１面で５号溝、１号掘立柱建物跡と重複して検出。５号溝より新しい。掘立柱建物跡と前後するとみられるが関係は不明である。形状　方形　長軸331㎝、短軸73㎝、深さ20㎝　主軸方位N80°W　遺物　未掲載の土師器杯・甕細片　時期　中世　覆土にAs-Bが混入している。

２区２号土坑（第36図）

概要　調査区の中央やや東寄りの１面、畠に重複して検出。畠より新しい。北側は調査区外である。形状　方形　長軸206㎝以上、短軸122㎝、深さ30㎝　主軸方位N11°E　遺物　ない。時期　中世

２区３号土坑（第36図）

概要　調査区の中央やや東寄りの１面、畠に重複して検出。畠より新しい。形状　方形　長軸221㎝、短軸125㎝、深さ16㎝　主軸方位N 4°E　遺物　ない。時期　中世　覆土にAs-Bが混入している。

３区１号土坑（第36図）

概要　調査区南寄りの１面、道路状遺構に重複して検出。道路状遺構より新しい。形状　円形　長軸78㎝、短軸60㎝、深さ28㎝　遺物　ない。時期　中世

３区２号土坑（第36図）

概要　調査区南寄りの１面、道路状遺構に重複して検出。道路状遺構より新しい。形状　円形　長軸61㎝、短軸56㎝、深さ21㎝　遺物　ない。時期　中世

３区３号土坑（第36図）

概要　調査区北西寄りの１面、畠の耕作痕に重複して検出。畠より新しい。形状　方形　長軸100㎝、短軸74㎝、深さ18㎝　主軸方位N10°W　遺物　ない。時期　中世

３区４号土坑（第37図）

概要　調査区北東寄りの１面、畠の耕作痕に重複して検出。畠より新しい。　形状　円形　長軸75㎝、短軸75㎝、深さ14㎝　遺物　ない。時期　中世

３区５号土坑（第37図）

概要　調査区中央の２面、畠の耕作痕に重複して検出。畠より新しい。形状　円形　長軸101㎝、短軸97㎝、深さ26㎝　遺物　ない。時期　中世

３区６号土坑（第37図）

概要　調査区北寄りの２面、単独で検出。形状　円形　長軸69㎝、短軸66㎝、深さ23㎝　遺物　ない。時期　中世

４区１号土坑（第37・38図　図版13）

概要　調査区中央のやや北寄り１面、２号・３号土坑と並んで検出。形状　方形　長軸224㎝、短軸94㎝、深さ40㎝　主軸方位N 3°E　覆土にAs- Bが混入している。遺物　青磁碗が覆土に混入。時期　中世

４区２号土坑（第37図）

概要　調査区中央のやや北寄り１面、３号土坑と重複して検出。３号土坑より新しい。形状　方形　長軸196㎝、短軸101㎝、深さ43㎝　主軸方位N 8°W　遺物　ない。時期　中世

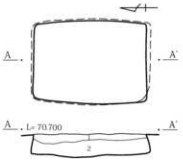
４区３号土坑（第37図）

概要　調査区中央やや北寄り１面、２号土坑と重複して検出。２号土坑より古い。形状　方形　長軸168㎝、短軸81㎝、深さ45㎝　主軸方位N 6°E　遺物　未掲載の土師器甕細片　時期　中世

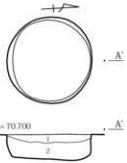
４区４号土坑（第37・38図　図版13）

概要　調査区北東隅の１面、単独で検出。　形状　方形　長軸149㎝、短軸84㎝、深さ23㎝　主軸方位N11°W　覆土にAs- Bが混入している。遺物　須恵器蓋　時期　中世

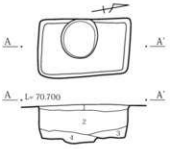
４区５号土坑（第37図）



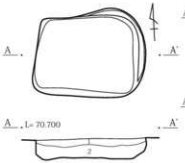
１区１号土坑
1　褐灰色　１～２㎜Ｂ軽石少混、５㎜黄色土塊混入
2　褐灰色　Ｂ軽石、５～30㎜黄色土塊少混



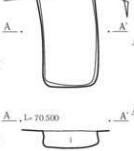
１区２号土坑
1　褐灰色　１～２㎜Ｂ軽石多混、５㎜黄色土塊少混
2　褐灰色　５㎜黄色土塊混入



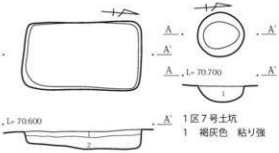
１区３号土坑
1　褐灰色　１～２㎜Ｂ軽石多混、５㎜黄色土塊少混
2　褐灰色　５～30㎜黄色土塊混入
3　10～20㎜黒褐色土塊少混
4　黒褐色土



１区４号土坑
1　褐灰色　１～２㎜Ｂ軽石多混、５㎜黄色土塊少混
2　褐灰色　黄色土塊微混

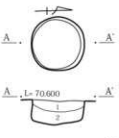


１区５号土坑
1　褐灰色　黄色土塊混入

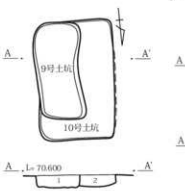


１区６号土坑
1　褐灰色　１～２㎜Ｂ軽石多混、５㎜黄色土塊少混
2　褐灰色　５～30㎜黄色土塊混入

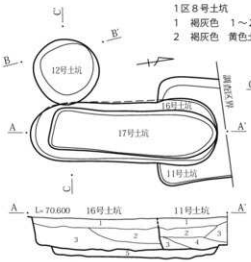
１区７号土坑
1　褐灰色　粘り強



１区８号土坑
1　褐灰色　１～２㎜Ｂ軽石混入
2　褐灰色　黄色土塊混入

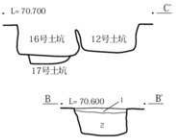


１区９号・10号土坑
1　褐灰色　Ｂ軽石微混、10～20㎜黄色土塊混入
2　褐灰色　１～２㎜Ｂ軽石少混



１区16号土坑
1　にぶい灰黄褐色　砂質
2　１ににぶい黄橙色細粒混入
3　１より軟弱、黄橙色粒なし

１区17号土坑
5　黒褐色　粘質土、２～３㎜にぶい黄橙色土斑混

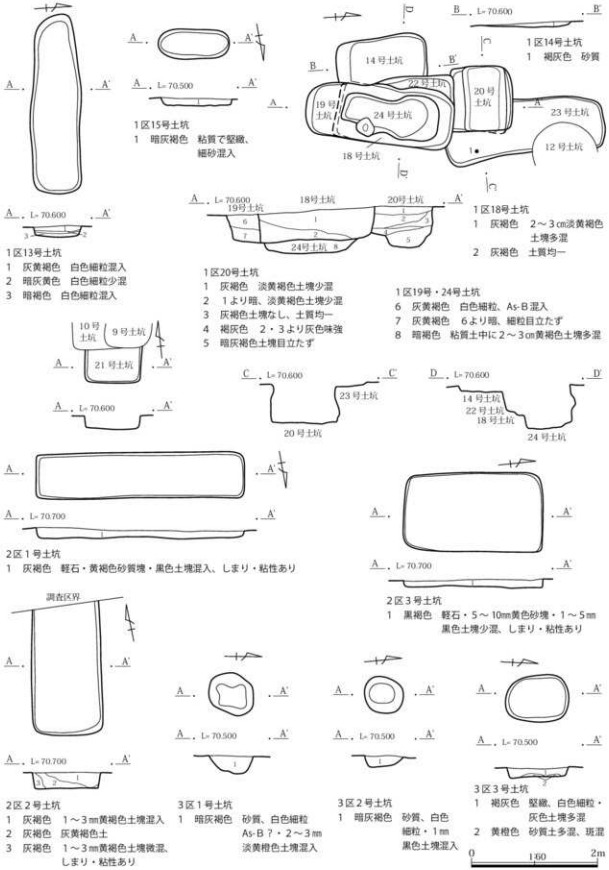


１区12号土坑
1　灰褐色　砂質
2　灰褐色　２㎝黄橙色土塊混入

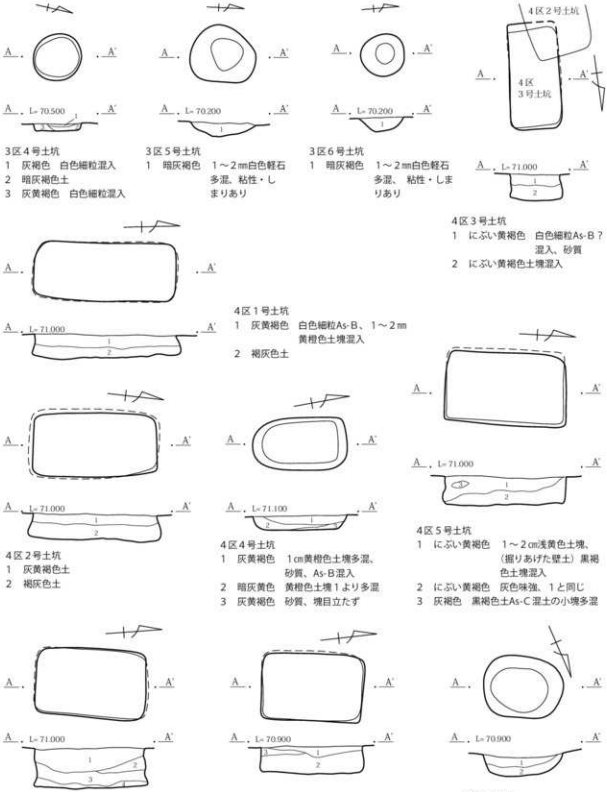
１区11号土坑
A～A'
1　にぶい灰黄褐色　砂質
2　にぶい灰黄褐色　２～３㎝明黄橙色土塊少混
3　にぶい灰黄褐色　２～３㎝明黄橙色土塊多混
4　にぶい灰黄褐色　２～３㎝明黄橙色土塊多混、黒褐色土塊混入

0　1:60　2m

第 35 図　１区１号～12 号・16 号・17 号土坑遺構図



第36図　1区13号～15号・18号～24号・2区1号～3号・3区1号～3号土坑遺構図



３区４号土坑
1　灰褐色　白色細粒混入
2　暗灰褐色土
3　灰黄褐色　白色細粒混入

３区５号土坑
1　暗灰褐色　１～２㎜白色軽石多混、粘性・しまりあり

３区６号土坑
1　暗灰褐色　１～２㎜白色軽石多混、粘性・しまりあり

４区３号土坑
1　にぶい黄褐色　白色細粒As-B？混入、砂質
2　にぶい黄褐色土塊混入

４区１号土坑
1　灰黄褐色　白色細粒As-B、１～２㎜黄橙色土塊混入
2　褐灰色土

４区２号土坑
1　灰黄褐色土
2　褐灰色土

４区４号土坑
1　灰黄褐色　１㎝黄橙色土塊多混、砂質、As-B混入
2　暗灰黄色　黄橙色土塊１より多混
3　灰黄褐色　砂質、塊目立たず

４区５号土坑
1　にぶい黄褐色　１～２㎝浅黄色土塊、（掘りあげた壁土）黒褐色土塊混入
2　にぶい黄色　灰色味強、１と同じ
3　灰褐色　黒褐色土As-C混土の小塊多混

４区６号土坑
1　にぶい黄褐色　１～２㎝浅黄色土塊混入
2　灰黄褐色　１㎜白色軽石粒混入
3　暗褐色　１㎜白色軽石粒混入
4　黒褐色　土質均一

４区７号土坑
1　暗灰黄色　２～３㎜黒褐色土塊混入
2　暗灰黄色　２～３㎜淡黄色土塊多混
3　淡黄色　塊多混

４区８号土坑
1　灰黄色　２～３㎜小礫混入
2　小礫混入

0　1.60　2m

第 37 図　３区４号・５号・６号・４区１号～８号土坑遺構図

概要　調査区南西隅寄りの２面、畠の耕作痕に重複して検出。畠より新しい。形状　方形　長軸193㎝、短軸114㎝、深さ45㎝　主軸方位N－S　遺物　未掲載の須恵器甕細片、縄文土器深鉢胴部破片　時期　中世

４区６号土坑（第37図）

概要　調査区南西隅寄りの２面、８号溝に重複して検出。８号溝より新しい。形状　方形　長軸175㎝、短軸110㎝、深さ67㎝　主軸方位N９°E　遺物　未掲載の土師器杯・甕細片　時期　中世

４区７号土坑（第37図）

概要　調査区中央の西寄り２面、単独で検出。形状　方形　長軸162㎝、短軸107㎝、深さ47㎝　主軸方位N８°E　遺物　未掲載の土師器杯細片、縄文土器深鉢破片　時期　中世

４区８号土坑（第37図）

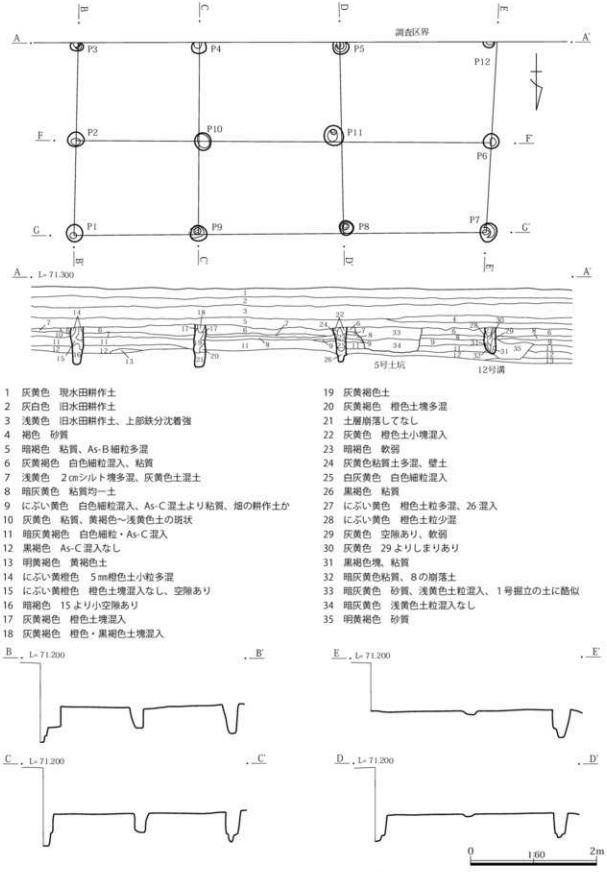
概要　調査区のほぼ中央の２面、17号溝の延長線上を調査中に検出。形状　方形　長軸126㎝、短軸97㎝、深さ36㎝　主軸方位N62°E　遺物　ない。時期　中世

第38図　１区23号・４区１号・４区４号土坑遺物図

8　掘立柱建物跡

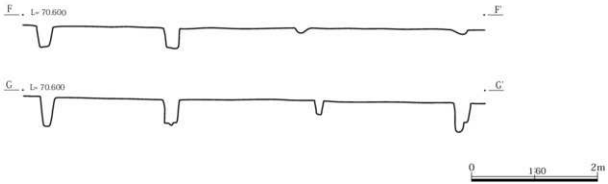
１区１号掘立柱建物跡（第39・40図　図版10）

概要　調査区の南東隅に近い１面、南側は調査区の壁にかかり検出。現状では桁行３間、梁間２間の総柱。規模　北桁行6.60m、南桁行6.62m　東梁間3.04m、西梁間3.05m　主軸方位N91°E　柱穴は円形、Ｐ３、Ｐ５、Ｐ７、Ｐ８、Ｐ９、P11で柱痕が認められた。長径・短径・深さは、次のとおりである。Ｐ１は28・26・48㎝、Ｐ２は27・23・33㎝、Ｐ３は21・13以上・23㎝、Ｐ４は23・16以上・52㎝、Ｐ５は25・20以上・42㎝、Ｐ６は25・24・５㎝、Ｐ７は31・27・47㎝、Ｐ８は23・22・40㎝、Ｐ９は26・24・53㎝、P10は28・25・35㎝、P11は32・31・32㎝、P12は19以上・８以上・43㎝である。柱間は、梁間が145～160㎝、平均150㎝、桁行が195～250㎝と幅があり平均では220㎝である。掘り込み面は、調査区南壁５層上面、同じ層位と見られるのが２号・３号・５号溝、５号土坑である。このうちで５号土坑とは重複しているが、北側には１区の土坑が集中している。



1　灰黄色　現水田耕作土
2　灰白色　旧水田耕作土
3　浅黄色　旧水田耕作土、上部鉄分沈着強
4　褐色　砂質
5　暗褐色　粘質、As-B細粒多混
6　灰黄褐色　白色細粒混入、粘質
7　浅黄色　2cmシルト塊多混、灰黄色土混土
8　暗灰黄色　粘質均一土
9　にぶい黄色　白色細粒混入、As-C混土より粘質、畑の耕作土か
10　灰黄色　粘質、黄褐色～浅黄色土の斑状
11　暗灰黄褐色　白色細粒・As-C混入
12　黒褐色　As-C混入なし
13　明黄褐色　黄褐色土
14　にぶい黄橙色　5mm橙色土小粒多混
15　にぶい黄橙色　橙色土塊混入なし、空隙あり
16　暗褐色　15より小空隙あり
17　灰黄褐色　橙色土塊混入
18　灰黄褐色　橙色・黒褐色土塊混入
19　灰黄褐色土
20　灰黄褐色　橙色土塊多混
21　土層崩落してなし
22　灰黄色　橙色土小塊混入
23　暗褐色　軟弱
24　灰黄色粘質土多混、壁土
25　白灰黄色　白色細粒混入
26　黒褐色　粘質
27　にぶい黄色　橙色土粒多混、26混入
28　にぶい黄色　橙色土粒少混
29　灰黄色　空隙あり、軟弱
30　灰黄色　29よりしまりあり
31　黒褐色塊、粘質
32　暗灰黄色粘質、8の崩落土
33　暗灰黄色　砂質、浅黄色土粒混入、1号掘立の土に酷似
34　暗灰黄色　浅黄色土粒混入なし
35　明黄褐色　砂質

第39図　1区1号掘立柱建物跡遺構図（1）

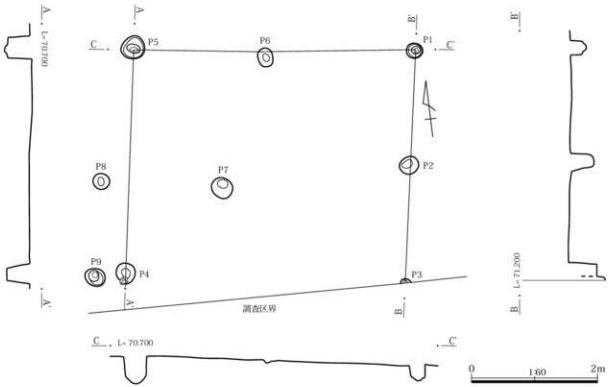


第 40 図　1 区 1 号掘立柱建物跡遺構図（2）

2 区 1 号掘立柱建物跡（第41図　図版10）

概要　調査区東寄りの 1 面で検出。南側は調査区外である。13号・5 号溝と重複していて最も新しい。南北棟、桁行 2 間以上、梁間 2 間、規模　東桁行3.65m以上、北梁間4.48m　主軸方位N9°E　想定するプラン内には西桁側に 3 本の柱穴がある。これは、 1 号とは別の掘立柱建物跡の可能性がある。柱穴の長径・短径・深さは次のとおりである。P 1 は25・24・26㎝、P 2 は30・28・37㎝、P 3 は17・ 7 以上・58㎝、P 4 は33・30・39㎝、P 5 は37・35・43㎝、P 6 は29・23・21㎝である。P 1 とP 5 で柱痕らしい掘り方が認められた。また、P 4 の上端には被熱跡がある割石がある。柱間は、P 1 とP 2 が180㎝、P 2 とP 3 が185㎝、P 4 とP 5 が355㎝、P 5 とP 6 が210㎝、P 6 とP 1 が238㎝である。

想定するプラン内には西桁側に、本跡とは別のP 7 ～P 9 、 3 本の柱穴がある。柱穴の長径・短径・深さは、P 7 が34・30・64㎝、P 8 は27・24・35㎝、P 9 は33・28・55㎝である。時期　中世

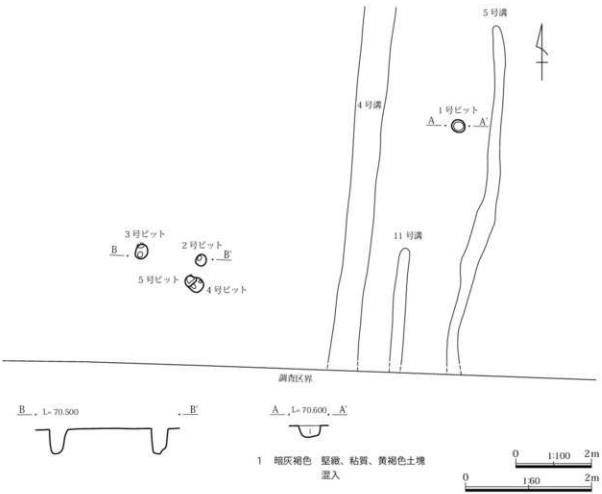


第 41 図　2 区 1 号掘立柱建物跡遺構図

9　ピット

1区ピット（第42図）

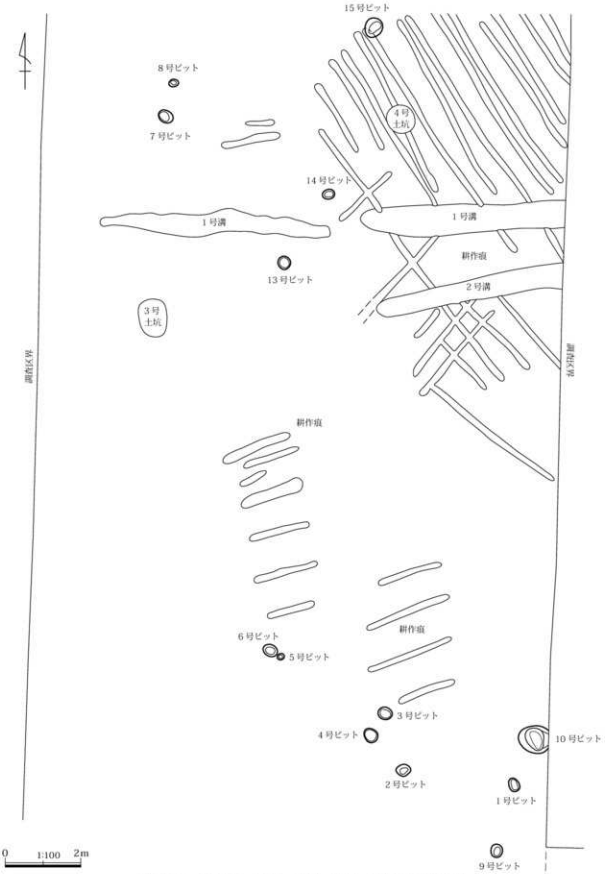
概要　調査区中央部の１面、１号溝と５号溝との間で５基を検出。１号は道路状遺構に重複、２号から５号は道路状遺構に隣接している。規模　直径が24 ～ 39㎝、深さ18 ～ 57㎝である。形状については円形が１・２・５号、方形が３・４号である。性格　集中していることから掘立柱建物跡として検討したが、まとまりがなく単独のピットのままとした。時期　中世



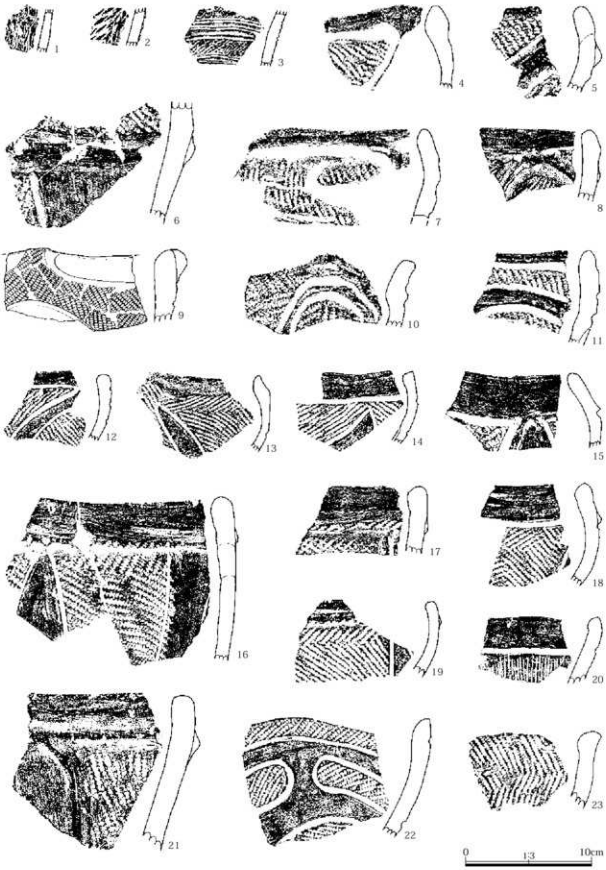
第42図　1区1号～5号ピット遺構図

3区ピット（第43図）

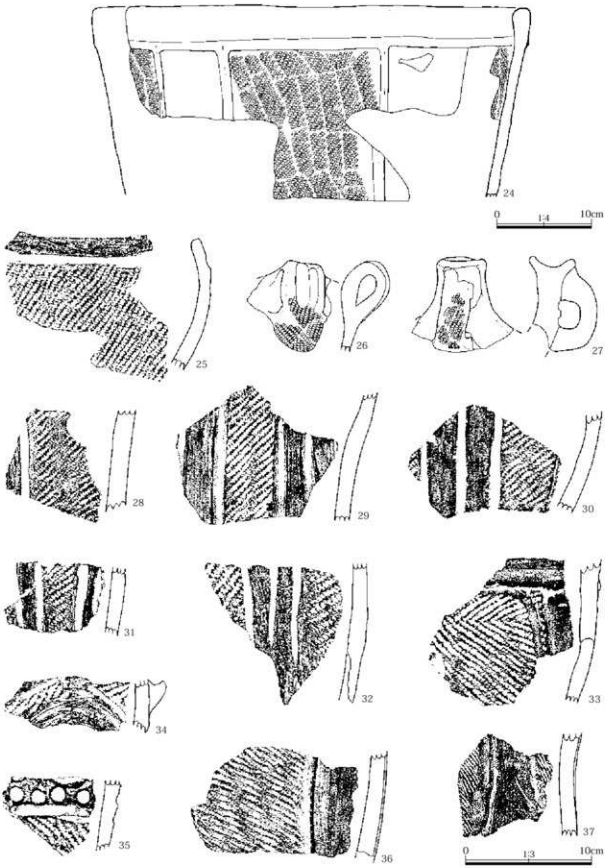
概要　調査区中央、道路状遺構から北側の１面で13基を検出。10mほど離れて北と南に半数づつでまとまる。ともに畠の耕作痕とは隣接しているが、ちょうど耕作痕の途切れたあたりである。15号だけは耕作痕に重複している。また、北側では３号、4号、２基の土坑とも混在している。土坑とピットを区別するのは規模の大小であるが、10号だけは例外的な大きさで土坑と比べても差がない。規模　直径が18 ～ 73㎝、35㎝前後が半数以上を占める。深さは９～ 35㎝である。形状については、６・７・８号が方形のほかはすべて円形である。性格　１区同様、軽易な建物の一部と想定したが可能性にとどまる。時期　中世、10号だけが東壁の深掘りで掘り込み面を確認することができた。



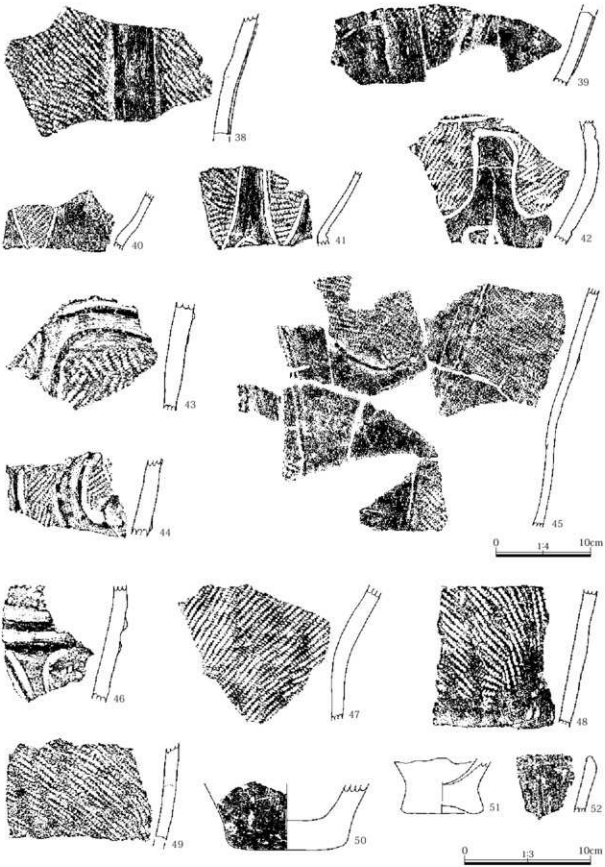
第43図　3区1号～10号・13号・14号・15号ピット遺構図



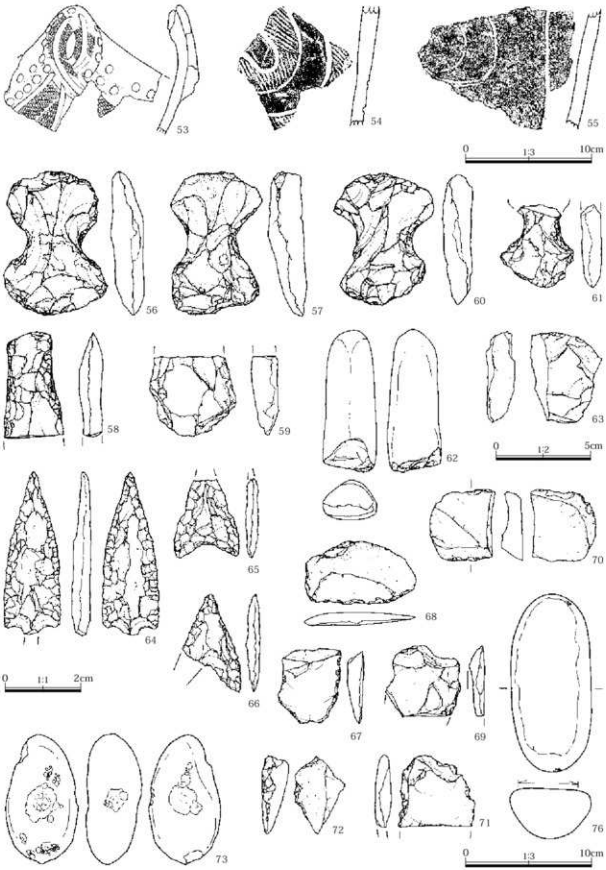
第 44 図　遺構外遺物図（1）



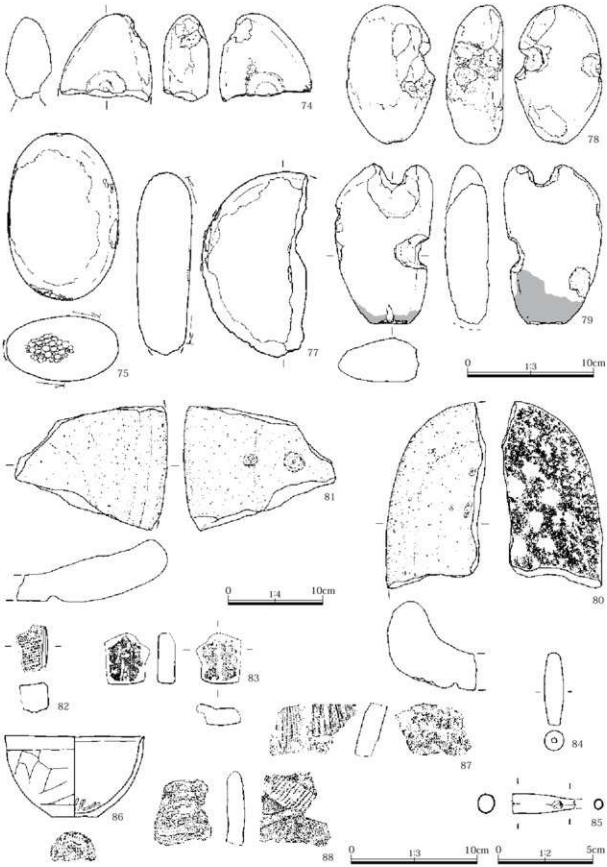
第 45 図　遺構外遺物図（2）



第 46 図　遺構外遺物図（３）



第 47 図　遺構外遺物図（4）



第 48 図　遺構外遺物図（５）

土器類観察表

出土位置	種別	器形	口径（長）cm	底径（幅）cm	器高（厚）cm	残存	胎土	色調	焼成	形・成調整等	図番
1区1住1	土師器	坏	(10.8)	－	－	口縁部片	細砂粒	赤褐	酸化		7
4区1住1	土師器	甕	17.0	－	25.3	略完	砂粒	にぶい橙	酸化	胴部中位に接合痕	7
4区1住2	土師器	甕	17.1	3.3	28.0	略完	砂粒	明赤褐	酸化		7
4区1住3	土師器	甕	－	－	0.6	胴部	砂粒	にぶい橙	酸化		7
4区1住4	土師器	甕	－	6.6	－	胴部下半	砂粒	にぶい黄褐	酸化	胴部丸み,煤付着	7
1区15溝1	土師器	坏	(15.2)	－	6.2	1/4	細砂粒	赤褐	酸化		33
1区15溝2	土師器	甕	－	7.4	－	底部	砂粒	にぶい橙	酸化		33
1区15溝3	土師器	甕	－	(5.0)	－	底部	砂粒	にぶい橙	酸化		33
1区16溝2	土師器	坏	(16.0)	－	4.0	1/4	砂粒	明褐	酸化	外底非回転ケズリ	33
1区16溝1	土師器	坏	(12.2)	－	－	口縁部片	砂粒	橙	酸化		33
4区1溝1	埴輪	円筒	－	－	1.4	破片		にぶい赤褐	酸化	内外面ハケ目?	33
4区2溝1	瓦	平瓦	(8.1)	(5.3)	1.9	破片	砂粒	灰	還元	布目	33
4区3溝1	土師器	器台	－	－	0.7	脚部上半	砂粒	にぶい橙	酸化	4方向円形透かし	34
4区3溝2	須恵器	甕	－	－	1.5	胴部片	砂粒	灰	還元	外面平行タタキ目,内面同心円タタキ目	34
遺構外83	瓦	平瓦	(4.0)	(3.5)	1.4	破片		にぶい橙	還元	布目	48
遺構外82	瓦	平瓦	(3.6)	(2.4)	－	破片	砂粒	褐灰	還元	面取りあり	48
遺構外86	土師器	坏	(10.8)	(3.6)	6.4	1/5	白色粒	にぶい黄橙	酸化		48
遺構外87	埴輪	円筒	－	－	1.6	破片	細砂粒	橙	酸化	外面ハケ目	48
2区5溝1	須恵器	壺	－	10.0	－	頸部欠	細砂粒	灰	還元	肩部に櫛文	33
1区16溝3	土師器	甕	(21.8)	－	－	口縁部片	砂粒	橙	酸化		33
4区4上1	須恵器	蓋	摘み径(3.4)		－	天井部片	砂粒	灰白	還元		38
遺構外84	土製品	土錘	3.8	1.0	1.05	略完	細砂粒	褐	酸化		48

陶磁器観察表

出土位置	種別	器形	口径（長）cm	底径（幅）cm	器高（厚）cm	残存	胎土	色調	焼成	形・成調整等	備考	図番
1区23上1	磁器	白磁　碗	－	(6.4)	－	底部片	精良	灰	還元		12C	38
4区1上1	磁器	青磁？　碗	－	－	0.4	口縁部片	精良	オリーブ黄	還元		中世	38
4区1溝2	陶器	甕	－	－	1.3	肩部片	砂粒	灰	還元	褐色釉？	中世	33
4区2溝3	陶器	甕	－	－	1.3	胴部片	砂粒	灰オリーブ	還元	外面に格子目スタンプ	中世	33
4区2溝2	軟質陶器	すり鉢	－	－	1.2	胴部片	砂粒	灰	還元		中世	33
4区3溝4	軟質陶器	片口	－	－	0.9	口縁部片		灰オリーブ	還元			34
4区3溝5	陶器	甕	－	－	1.4	胴部片		にぶい赤褐		外面に格子目叩き		34
4区3溝6	陶器	甕	－	－	1.0	胴部片		褐		内外面褐色,焼締め？		34
4区3溝3	磁器	青磁　碗	－	－	0.4	体部片	精良	暗オリーブ	還元	釉が厚い		34
遺構外88	軟質陶器	甕	－	－	1.4	胴部片		灰	還元	外面に平行叩き目		48

金属品観察表

出土位置	種別	器形	長 cm	幅 cm	厚 cm	重さ g	残存	図番
遺構外85	銅	キセル吸口	(3.3)	0.9	0.9	2.3	略完	48
2区2溝1	鉄	鏃	(6.8)	1.6	1.4×1.1	22.4		33
4区2溝4	鉄	不明金具	(6.3)	1.8	0.3	11.1		34
4区2溝5	鉄	釘	(4.1)	0.6	0.6	1.9	略完	34
4区3溝8	銅銭	元豊通宝	径2.3	－	－	2.3	略完	34
4区3溝7	鉄	鏃	全長13.5			22.3	略完	34
		鏃身	10.6	1.8	0.4			
		茎	2.9	0.6	0.5			

縄文土器観察表

番号	器形	残存	胎土	色調	焼成	形・成調整等	備考	図番
1	深鉢	胴部片	粗砂	にぶい黄橙	良好	半截竹管による平行沈線を縦位に複数条施紋。	前期後葉	44
2	深鉢	胴部片	粗砂	にぶい橙	ふつう	刺み を付した浮線を斜位に複数条施紋。右端の浮線は弧を描いている。紋様帯内のモチーフか。	諸磯ｂ式	44
3	深鉢	胴部片	粗砂、細礫、石英	明黄褐	良好	集合沈線による横帯構成。地紋に無節Ｌｒ縄紋施紋。	諸磯ｂ式	44
4	深鉢	口縁部片	粗砂、白色粒	にぶい黄橙	ふつう	波状口縁。口縁部楕円状区画。ＲＬ縄紋充填施紋。	加曽利Ｅ３式	44
5	深鉢	口縁部片	粗砂、白色粒	にぶい黄橙	ふつう	口縁部楕円状区画。区画内にＲＬ縄紋充填施紋。	加曽利Ｅ３式	44
6	深鉢	胴部片	粗砂、白色粒	にぶい黄橙	ふつう	５と同一個体。胴部懸垂紋構成。	加曽利Ｅ３式	44
7	深鉢	口縁部片	粗砂、白色粒	橙	ふつう	口縁部楕円状区画。区画内にＲＬ縄紋充填施紋。	加曽利Ｅ３式	44
8	深鉢	口縁部片	粗砂、白色粒	にぶい黄橙	ふつう	隆線による分岐懸垂紋構成。ＲＬ縄紋充填施紋。	加曽利Ｅ４式	44
9	深鉢	口縁部片	粗砂、白色粒	にぶい黄橙	ふつう	波状口縁で、波頂部に突起を付し、突起を基点に隆線を口縁に沿わせる。以下、沈線による曲線モチーフを描き、ＲＬ縄紋を充填施紋。	加曽利Ｅ４式	44
10	深鉢	口縁部片	粗砂、白色粒	にぶい黄橙	ふつう	波状口縁で、波頂部が緩く外反。２条の沈線による縦位楕円状区画。ＲＬ縄紋充填施紋。	加曽利Ｅ４式	44
11	深鉢	口縁部片	粗砂、白色粒	にぶい橙	ふつう	波状口縁。沈線による曲線モチーフを描き、ＲＬ縄紋を充填施紋。	加曽利Ｅ４式	44
12	深鉢	口縁部片	粗砂、白色粒	明黄褐	ふつう	沈線による分岐懸垂紋構成。ＬＲ縄紋充填施紋。	加曽利Ｅ４式	44
13	深鉢	口縁部片	粗砂、白色粒	浅黄橙	ふつう	波状口縁。波頂部を基点に隆線を口縁に沿わせ、以下、沈線による分岐懸垂紋構成。ＬＲ縄紋充填施紋。	加曽利Ｅ４式	44
14	深鉢	口縁部片	粗砂、白色粒	にぶい黄橙	ふつう	口縁部に沈線をめぐらせ、以下、沈線による分岐懸垂紋構成。ＲＬ縄紋充填施紋。	加曽利Ｅ４式	44
15	深鉢	口縁部片	粗砂、白色粒	にぶい黄橙	ふつう	隆線による分岐懸垂紋構成。隆線に沈線を沿わせる。ＲＬ縄紋充填施紋。	加曽利Ｅ４式	44
16	深鉢	口縁部片	粗砂、細礫、白色粒	灰黄褐	ふつう	口縁部に隆線をめぐらせ、以下、沈線による分岐懸垂紋構成。ＬＲ縄紋充填施紋。	加曽利Ｅ４式	44
17	深鉢	口縁部片	粗砂、白色粒	にぶい黄橙	ふつう	口縁部に隆線をめぐらせ、以下、隆線による懸垂紋構成。ＬＲ縄紋充填施紋。	加曽利Ｅ４式	44
18	深鉢	口縁部片	粗砂、白色粒	にぶい黄橙	ふつう	口縁に沿って隆線をめぐらせ、以下、沈線による懸垂紋構成。ＬＲ縄紋充填施紋。	加曽利Ｅ４式	44
19	深鉢	口縁部片	粗砂、白色粒	灰黄褐	ふつう	口縁部に隆線をめぐらせ、以下、沈線による懸垂紋構成。ＬＲ縄紋充填施紋。	加曽利Ｅ４式	44
20	深鉢	口縁部片	粗砂、白色粒	にぶい黄橙	ふつう	口縁部に沈線をめぐらせ、以下、条線を縦位施紋する。	加曽利Ｅ４式	44
21	深鉢	口縁部片	粗砂、石英、白色粒	橙	ふつう	口縁部に隆線をめぐらせ、以下、隆線による分岐懸垂紋構成。ＲＬ縄紋充填施紋。	加曽利Ｅ４式	44
22	深鉢	口縁部片	粗砂、白色粒	にぶい黄橙	ふつう	波状口縁。沈線による楕円状や曲線モチーフを描き、附加条ＬＲ＋Ｒ縄紋充填施紋。	加曽利Ｅ４式	44
23	深鉢	口縁部片	粗砂、石英、白色粒	にぶい黄橙	ふつう	波状口縁。ＲＬ縄紋を充填施紋。	加曽利Ｅ４式	44
24	深鉢	口縁部片	粗砂、白色粒	にぶい橙	ふつう	推定口径45.0cm。口縁部に隆線をめぐらせ、以下、隆線による懸垂紋構成。ＲＬ縄紋縦位充填施紋。	加曽利Ｅ４式	45
25	深鉢	口縁部片	粗砂、白色粒	にぶい黄橙	ふつう	口縁下に沈線をめぐらせ、以下、ＲＬ縄紋を縦位充填施紋。	加曽利Ｅ４式	45
26	深鉢	口縁部片	粗砂、白色粒	橙	ふつう	橋状把手。ＲＬ縄紋を充填施紋し、把手の中心を削り取る。	加曽利Ｅ４式	45
27	深鉢	口縁部片	粗砂、白色粒	にぶい黄橙	ふつう	波頂部の橋状把手。把手にＲＬ縄紋縦位施紋。波頂部上端に円形の凹み。	加曽利Ｅ４式	45

番号	器形	残存	胎土	色調	焼成	形・成調整等	備考	図番
28	深鉢	胴部片	粗砂、白色粒	にぶい黄橙	ふつう	沈線による胴部懸垂紋構成。ＲＬ縄紋縦位充填施紋。	加曽利Ｅ３式	45
29	深鉢	胴部片	粗砂、白色粒	浅黄橙	ふつう	沈線による胴部懸垂紋構成。ＲＬ縄紋縦位充填施紋。	加曽利Ｅ３式	45
30	深鉢	胴部片	粗砂、白色粒	にぶい黄橙	ふつう	沈線による胴部懸垂紋構成。ＲＬ縄紋縦位充填施紋。	加曽利Ｅ３式	45
31	深鉢	胴部片	粗砂、石英、白色粒	橙	良好	沈線による胴部懸垂紋構成。ＲＬ縄紋縦位充填施紋。	加曽利Ｅ３式	45
32	深鉢	胴部片	粗砂、白色粒	にぶい黄橙	ふつう	沈線による胴部懸垂紋構成。ＲＬ縄紋縦位充填施紋。	加曽利Ｅ３式	45
33	深鉢	胴部片	粗砂、白色粒	にぶい黄橙	ふつう	口縁部に隆線をめぐらせ、以下、隆線による懸垂紋構成。ＬＲ縄紋充填施紋。	加曽利Ｅ４式	45
34	深鉢	胴部片	粗砂、白色粒	にぶい黄橙	ふつう	隆線による分岐懸垂紋構成。ＬＲ縄紋充填施紋。	加曽利Ｅ４式	45
35	深鉢	胴部片	粗砂、白色粒	にぶい黄橙	ふつう	口縁下に円形刺突、沈線をめぐらせ、以下，ＲＬ縄紋充填施紋。	加曽利Ｅ４式	45
36	深鉢	胴部片	粗砂、雲母、白色粒	橙	ふつう	隆線による胴部懸垂紋構成。ＲＬ縄紋縦位充填施紋。	加曽利Ｅ４式	45
37	深鉢	胴部片	粗砂、白色粒	橙	良好	隆線による胴部懸垂紋構成。ＬＲ縄紋縦位充填施紋。	加曽利Ｅ４式	45
38	深鉢	胴部片	粗砂、白色粒	にぶい黄橙	ふつう	隆線による胴部懸垂紋構成。ＬＲ縄紋縦位充填施紋。	加曽利Ｅ４式	46
39	深鉢	胴部片	粗砂、白色粒	浅黄橙	ふつう	隆線による胴部懸垂紋構成。ＬＲ縄紋縦位充填施紋。	加曽利Ｅ４式	46
40	深鉢	胴部片	粗砂、白色粒	橙	ふつう	沈線により縦位楕円状区画を描き、区画内にＲＬ縄紋を充填施紋。	加曽利Ｅ４式	46
41	深鉢	胴部片	粗砂、白色粒	にぶい黄橙	ふつう	沈線による縦位楕円状区画内にＬＲ縄紋充填施紋。胴部上位、下位の２帯構成。	加曽利Ｅ４式	46
42	深鉢	胴部片	粗砂、白色粒	にぶい黄橙	ふつう	口縁部に沈線をめぐらせ、以下、沈線による分岐懸垂紋構成。胴部上位、下位の２帯構成。附加条ＲＬ＋Ｌ縄紋充填施紋。	加曽利Ｅ４式	46
43	深鉢	胴部片	粗砂、雲母、白色粒	浅黄橙	ふつう	隆線による分岐懸垂紋構成。ＲＬ縄紋充填施紋。	加曽利Ｅ４式	46
44	深鉢	胴部片	粗砂、白色粒	にぶい黄橙	ふつう	隆線によるＪ字状紋。ＲＬ縄紋充填施紋。	加曽利Ｅ４式	46
45	深鉢	胴部片	粗砂、白色粒	にぶい黄橙	ふつう	隆線による胴部懸垂紋、縦位楕円状区画。ＬＲ縄紋縦位充填施紋。	加曽利Ｅ４式	46
46	深鉢	胴部片	粗砂、白色粒	にぶい黄橙	ふつう	隆線、沈線による曲線モチーフ。ＬＲ縄紋充填施紋。	加曽利Ｅ４式	46
47	深鉢	胴部片	粗砂、白色粒	明黄褐	ふつう	ＲＬ縄紋を縦位充填施紋。	加曽利Ｅ４式	46
48	深鉢	胴部片	粗砂、白色粒	浅黄橙	良好	ＬＲ縄紋を縦位充填施紋。	加曽利Ｅ４式	46
49	深鉢	胴部片	粗砂、白色粒	橙	ふつう	ＬＲ縄紋を縦位充填施紋。	加曽利Ｅ４式	46
50	深鉢	底部片	粗砂、白色粒	にぶい黄橙	ふつう	残存部は無紋。	加曽利Ｅ式	46
51	深鉢	底部片	粗砂、白色粒	にぶい黄橙	ふつう	残存部は無紋。やや上げ底。	加曽利Ｅ式	46
52	ミニチュア？	口縁部片	粗砂、白色粒	にぶい黄橙	ふつう	推定口径 6.0cm。縦位の擦痕。	加曽利Ｅ式？	46
53	深鉢	口縁部片	粗砂多	にぶい橙	良好	波状口縁で、波頂部に環状突起を付し、突起上に沈線を施す。突起、口縁に沿って円形刺突をめぐらせ、以下、沈線によるモチーフを描き、ＲＬ縄紋を充填施紋。	称名寺Ⅰ式	47
54	深鉢	胴部片	粗砂、白色粒	にぶい黄橙	ふつう	沈線により渦巻状、Ｊ字状モチーフを描き、ＬＲ縄紋を充填施紋する。	称名寺Ⅰ式	47
55	深鉢	胴部片	粗砂多	にぶい赤褐	ふつう	沈線による縦位、Ｊ字状モチーフ。	称名寺Ⅱ式	47

石器観察表　　※破損品の法量は現存値

番号	器種	形態	石材	長さ cm	幅 cm	重さ g	残存	調整加工等
56	打　斧	分　銅	黒色頁岩	11.3	8.2	230.5	完形	括れ部エッジ潰れ・捲縛痕あり、上下両端の刃部再生
57	打　斧	分　銅	黒色頁岩	10.2	7.2	217.9	完形	括れ部エッジ潰れ・捲縛痕あり、刃部再生後に廃棄
58	打　斧	短　冊	黒色頁岩	8.3	4.2	86.5	下半欠損	刃部磨耗が不明だが、完成状態に近い段階の破損？
59	打　斧	不明	ホルンフェルス	6.3	6.9	113.1	刃部破片	加工粗く、製作段階の破損？
60	打　斧	分　銅	黒色頁岩	10.3	7.9	182.5	下端刃部欠	括れ部エッジ潰れ、上端刃部は磨耗、下端刃部再生
61	打　斧	分　銅	黒色頁岩	6.6	5.8	53.3	上半欠損	括れ部エッジ潰れ・捲縛痕あり、刃部に磨耗痕あり
62	礫　器		粗粒輝石安山岩	11.2	4.3	219.1	完形	棒状礫の背面側剥離面を打面に裏面側を連続剥離
63	石　核		黒色安山岩	4.8	3.8	28.5	完形	小形・板状剥片の表裏両面で小形剥片を剥離
64	有舌尖頭器		黒色頁岩	4.2	1.5	3.6	茎欠損	表裏両面に第一次剥離面を残す、右側縁は鋸歯状
65	石　鏃	凹基無	黒色安山岩	2.1	1.5	1.1	先端欠損	先端部欠損、薄身で完成状態
66	石　鏃	凹基無	黒色安山岩	2.6	1.6	1.2	脚部欠損	先端部衝撃剥離痕あり、使用時破損？
67	削　器		黒色頁岩	5.8	5.0	43.4	完形	剥片裏面に浅い小剥離痕が連続、剥片の稜線磨耗
68	削　器		黒色頁岩	5.0	8.8	54.8	完形	幅広剥片の端部に浅い小剥離痕が連続する
69	加工痕		黒色頁岩	5.7	5.9	45.0	背面被熱	側縁の加工は粗く、加工意図は不明
70	加工痕		黒色頁岩	5.6	5.2	67.4	右半欠損	端部に礫面を取り込み、浅く粗い剥離を施す
71	加工痕		黒色頁岩	5.8	6.0	46.4	完形	幅広剥片の右側縁裏面に粗い剥離を施す
72	加工痕		黒色頁岩	6.2	4.0	40.7	完形	幅広端部に粗い加工、刃部磨耗あり
73	凹　石		粗粒輝石安山岩	10.3	5.8	237.0	完形	表裏両面中央に類ロート状の凹穴１、左側集合打痕
74	凹　石		粗粒輝石安山岩	6.9	7.3	177.2	下半欠損	表裏両面中央に類ロート状の凹穴２、先端集合打痕
75	磨　石		粗粒輝石安山岩	13.2	8.8	917.0	完形	表裏両面とも磨耗、左側縁は打痕・磨耗
76	磨　石		粗粒輝石安山岩	14.0	6.9	555.4	完形	楕円偏平礫の背面に磨耗面が形成、小口部に打痕
77	磨　石		花崗岩	14.6	8.4	762.1	下半欠損	表裏両面とも磨耗、礫周辺は風化による劣化で破損
78	石製品		粗粒輝石安山岩	10.5	8.4	319.0	完形	表裏面に磨耗・平滑な研磨面？、右側面に集合打痕
79	石製品		粗粒輝石安山岩	12.6	7.8	331.9	完形	右側縁・先端部にノッチ状の窪み、用途不明
80	石　皿	有　縁	粗粒輝石安山岩	19.7	10.5	2051.0	上半1/4	使用面の磨耗度は低い、裏面にロート状の窪み多数
81	石　皿	有　縁	粗粒輝石安山岩	13.1	16.1	1196.1	破片	使用面中央が大きく窪む、裏面にロート状の凹穴２

石器に関する観察所見

上坑らしいものが、４区の深掘りで検出されているのは先述した。これに関係するのであろう、遺構確認や溝などから、剥片類73点、礫石器37点の合計110点が出土している。報告には、このうち26点を掲載した。調査ならびに整理の過程で気づいたことも多く、以下列記する。

1　石材は、剥片類が黒色頁岩・黒色安山岩を用い、礫石器類に粗粒輝石安山岩を用いる。ほか玉髄、変質玄武岩、珪質頁岩、砂岩等がある。

2　剥片類は、打面部のある通常剥片が圧倒的多数を占め、打製石斧の調整剥片は少量である。その中で黒色頁岩については、礫面を大きく残すものが多い。打製石斧については、遺跡内で製作した可能性は低い。石鏃は完成状態にある。

3　打製石斧は、７点のうち４点が中期から後期に多い分銅型で、捲縛痕や刃部の磨耗痕が顕著に見られる。

4　打製石斧や石皿等の使用痕からみて、調査区内に住居跡等遺構の存在していた可能性が高い。

第３章　自然科学分析

１．南久保遺跡の土層とテフラ

（株）火山灰考古学研究所

１．はじめに

関東平野北西部に位置する伊勢崎市とその周辺に分布する後期更新世以降に形成された地層の中には、赤城、榛名、浅間など北関東地方とその周辺の火山、中部地方や中国地方さらには九州地方などの火山に由来するテフラ（火山砕屑物，いわゆる火山灰）が多く認められる。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている指標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知ることができるようになっている。

そこで、発掘調査の際に、層位や年代が不明な土層や遺構が検出された伊勢崎市南久保遺跡においても、地質調査を行い土層層序を記載するとともに、採取した試料を対象にテフラ検出分析と屈折率測定を行って指標テフラの層位を把握し、土層や遺構の層位や年代に関する資料を収集することになった。

調査分析の対象となった地点は、２区南壁東部、２区南壁６号溝・流路間、２区西部深掘トレンチ、３区西壁南部、３区西壁溝北、３区東部深掘地点、４区As-B下面の７地点である。

２．土層の層序

（１）２区南壁東部

２区南壁東部では、下位より黄灰色土（層厚４㎝以上，Ⅴ層）、黒灰褐色土（層厚７㎝，Ⅳ-ｂ層）、黄灰色や白色の軽石を多く含む黒灰褐色土（層厚11㎝，軽石の最大径８㎜，Ⅳ-ａ層）、黄灰色砂層（層厚19㎝，Ⅲ-ｃ層）、色調がとくに暗い暗灰褐色土（層厚６㎝，Ⅲ-ｂ層）、若干色調が暗い灰褐色土（層厚３～12㎝）、黄灰色シルト層（最大層厚９㎝，以上Ⅲ-ａ層）、黄灰色砂のブロックを少量含む砂混じり灰褐色土（層厚７㎝，Ⅱ-ａ層）、鉄分を多く含む黄色土（層厚５㎝）、灰褐色土（層厚６㎝）、若干色調が明るい灰褐色土（層厚６㎝）、黄灰色土（層厚10㎝）、鉄分を多く含む黄色土（層厚２㎝，以上Ⅰ-ｃ層）、灰色土（層厚12㎝，Ⅰ-ｂ層）、灰色作土（層厚15㎝，Ⅰ-ａ層）が認められる（図１）。

なお、１区南東部における発掘調査では、Ⅲ-ｃ層に覆われた鬼高式土器（７世紀後半頃）を共存する住居址が検出されている。

（２）２区南壁６号溝・流路間

２区南壁６号溝・流路間では、下位より黒灰褐色土（層厚15㎝以上，Ⅳ-ｂ層）、黄灰色や白色の軽石を多く含み色調がとくに暗い灰褐色土（層厚８㎝，軽石の最大径７㎜，Ⅳ-ａ層）、黄灰色砂層（層厚14㎝，Ⅲ-ｃ層：第１洪水堆積物）、砂混じり灰色土（層厚８㎝，Ⅲ-ａ層）、暗灰褐色砂質土（層厚５㎝，Ⅱ-ａ層）、砂混じり黄灰褐色土（層厚２㎝）、灰褐色土（層厚10㎝）、黄灰色土（層厚２㎝）、黄色がかった灰色土（層厚12㎝，以上Ⅰ-ｃ層）、灰色土（層厚７㎝，Ⅰ-ｂ層）、灰色作土（層厚17㎝，Ⅰ-ａ層）が認められる（図２）。

（３）２区西部深掘トレンチ

２区西部深掘トレンチでは、下位より淘汰の良い灰色砂層（層厚30㎝以上）、黄灰色砂層（層厚24㎝）、黄白色軽石混じりで不淘汰な黄灰色砂層（層厚25㎝，軽石の最大径４㎜）、暗灰色土（層厚28㎝）、黄灰色砂質

土（層厚15cm，Ⅴ層）、わずかに褐色がかった黒灰色土（層厚16cm，Ⅳ-ｂ層）、黄灰色軽石を多く含み色調がとくに暗い暗灰褐色土（層厚10cm以上，軽石の最大径８mm，Ⅳ-ａ層）が認められる（図３）。発掘調査では、これらのうち黄灰色砂質土中から縄文時代中期の土器が検出されているらしい。

（４）３区西壁南部

３区西壁南部では、下位より海汰の良い黄灰色砂層（層厚１cm）、灰色がかった暗褐色土（層厚５cm）、灰褐色土（層厚13cm）、黒灰褐色土（層厚13cm）、成層したテフラ層（層厚2.3cm，Ⅱ-ｂ層）、黒みがかった暗灰褐色砂質土（層厚２cm）、海汰の良い黄白色砂層（層厚２cm）、砂混じり暗灰褐色土（層厚10cm以上）が認められる（図４）。

これらのうち、成層したテフラ層は、下位より青灰色砂質細粒火山灰層（層厚0.3cm）と黄灰色粗粒火山灰層（層厚２cm）からなる。このテフラ層は、層相から1108（天仁元）年に浅間火山から噴出した浅間Ｂテフラ（As-B，荒牧，1968，新井，1979）に同定される。発掘調査では、その下位の黒灰褐色土から９～10世紀の土器片が検出されている。

（５）３区西壁溝北

３区西壁溝北では、下位より黒灰褐色土（層厚20cm以上，Ⅳ-ｂ層）、黄灰色軽石を多く含む黒灰褐色土（層厚６cm，軽石の最大径６mm）、黄灰色や白色の軽石を含む黒灰褐色土（層厚６cm，軽石の最大径11mm）、黄白色砂質細粒火山灰層（レンズ状，最大層厚１cm）、黒灰褐色土（層厚１cm，以上Ⅳ-ａ層）、黄色がかった灰色土（層厚14cm，Ⅲ-ｃ層）、褐色がかった暗灰色土（層厚11cm，Ⅲ-ａ層）、黄灰色粗粒火山灰層（層厚３cm，Ⅱ-ｂ層）、砂を多く含む暗灰褐色土（層厚16cm，Ⅱ-ａ層）、灰色土（層厚16cm）、黄灰色土（層厚４cm）、白色粗粒火山灰層（層厚0.2cm，以上Ⅰ-ｃ層）、灰色土（層厚22cm，Ⅰ-ｂ層）、灰色作土（層厚13cm，Ⅰ-ａ層）が認められる（図５）。

なお、本地点では、黄白色砂質細粒火山灰層とほぼ同レベルに、震動に伴う流動化により形成されたと考えられる灰色シルト層の堆積が認められる。したがって、Ⅳ-ａ層形成時あるいはその後に震動に伴う地層の流動化が発生した可能性が考えられる。

（６）３区東部深掘地点

３区東部深掘地点では、下位より青みを帯びた暗灰色砂質泥層（層厚15cm以上）、暗灰色砂質泥層（層厚33cm）、灰色砂層（層厚７cm）、若干色調が暗い灰色シルト質砂層（層厚16cm）、海汰の良い灰色砂層（層厚17cm）、黄色がかった灰色砂層（層厚12cm）、黄色がかった灰色シルト質砂層（層厚16cm）、黄色軽石混じり黄灰色砂層（層厚24cm，軽石の最大径３mm）、砂混じり暗灰色土（層厚24cm）、黄灰色砂層（層厚18cm，Ⅴ層）、黄灰色軽石や白色軽石を含む黒灰褐色土（層厚18cm，軽石の最大遺影17mm，Ⅳ-ａ層）、砂混じり暗灰褐色土（層厚21cm以上）が認められる（図６）。発掘調査では、上位より３層目の黄灰色砂層中から縄文時代中期の遺物が検出されているらしい。

（７）４区As-B下面

４区As-B下面では、下位より暗灰褐色土（層厚９cm）、黒灰褐色土（層厚15cm）、褐色がかった黒灰褐色土（層厚４cm）、成層したテフラ層（層厚5.3cm，Ⅱ-ｂ層）、灰色がかった褐色砂質土（層厚４cm，Ⅱ-ａ層）が認め

られる（図７）。これらのうち、成層したテフラ層は、下位より青灰色砂質細粒火山灰層（層厚0.3㎝）、黄灰色粗粒火山灰層（層厚４㎝）、桃色細粒火山灰層（層厚１㎝）からなる。このテフラ層は、その層相からAs-Bに同定される。

３．テフラ検出分析

（１）分析試料と分析方法

２区南壁東部、２区南壁６号溝・流路間、２区西部深掘トレンチ、３区西壁溝北の４地点において採取された試料のうち、10点についてテフラ検出分析を行い、軽石や火山ガラスなどテフラ粒子の特徴やその産出状況の把握を行った。分析の手順は次の通りである。

１）試料８gを秤量。

２）超音波洗浄により泥分を除去。

３）80゜Cで恒温乾燥。

４）実体顕微鏡下でテフラ粒子の量や特徴を観察。

（２）分析結果

テフラ検出分析の結果を表１に示す。２区南壁東部では、試料７、試料６、試料３で良く発泡した灰白色軽石（最大径6.1㎜）を検出した。この軽石は斑晶に斜方輝石や単斜輝石をもち、試料７や試料６に比較的多く含まれている。これらの試料には、この軽石の細粒物である灰白色の軽石型ガラスも含まれている。また、試料７には、ごく少量ながら細粒の白色軽石（最大径2.0㎜）やその細粒物である白色の軽石型ガラスも含まれている。ただし、その斑晶については細粒で量が非常に少ないために不明である。このような白色の細粒型ガラスは、試料７のほか試料４や試料３でも認められる。

試料１には、比較的良く発泡した淡褐色の軽石（最大径3.8㎜）や、その細粒物である淡褐色の軽石型ガラスが比較的多く含まれている。この軽石の斑晶には、斜方輝石や単斜輝石が含まれている。

２区南壁６号溝・流路間の試料２には、良く発泡した灰白色軽石（最大径2.6㎜）や、その細粒物である灰白色の軽石型ガラスが比較的多く含まれている。この軽石の斑晶には、斜方輝石や単斜輝石が認められる。また、ごく少量ながら、白色の軽石型ガラスも認められる。２区西部深掘トレンチの試料２には、白色や無色透明の軽石型ガラスがごく少量含まれている。

３区西壁溝北の試料３には、さほど発泡の良くない白色軽石（最大径2.1㎜）が少量、またその細粒物である白色軽石型ガラスが比較的多く含まれている。軽石の斑晶には、普通角閃石や斜方輝石が認められる。この試料には、ほかにごく少量の灰白色軽石型ガラスも認められる。試料２には、比較的良く発泡した淡褐色の軽石最大径（2.2㎜）や、その細粒物である淡褐色の軽石型ガラスが多く含まれている。この軽石の斑晶には、斜方輝石や単斜輝石が含まれている。さらに試料１には、良く発泡し光沢をもつ白色軽石（最大径2.8㎜）や、その細粒物である白色の軽石型ガラスが比較的多く含まれている。軽石の斑晶には、斜方輝石や単斜輝石が認められる。

４．屈折率測定

（１）測定試料と測定方法

テフラ検出分析の対象となった試料のうち、２区南壁東部の試料６、２区西部深掘トレンチの試料２、３区

西壁溝北の試料２の３点に含まれる火山ガラスについて、温度変化型屈折率測定装置（古澤地質社製MAIOT）により、火山ガラスの屈折率（n）の測定を実施した。なお、２区東部の試料６については灰白色軽石、また３区西壁溝北の試料２については淡褐色軽石を各々実体顕微鏡下で手選して測定の対象とした。

（２）測定結果

屈折率測定の結果を表２に示す。２区南壁東部の試料６に含まれる火山ガラス（32粒子）の屈折率（n）は、1.514-1.519である。また、２区西部深掘トレンチの試料２に含まれる火山ガラス（30粒子）の屈折率（n）は、1.501-1.504である。さらに、３区西壁溝北の試料２に含まれる火山ガラス（30粒子）の屈折率は、1.525-1.530である。

５．考察

屈折率測定の対象となった試料のうち、２区南壁東部の試料６（Ⅳ-ａ層）に含まれる灰白色軽石やその細粒物である火山ガラスは、岩相や火山ガラスの屈折率などから、４世紀初頭に浅間火山から噴出したと推定されている浅間Ｃ軽石（As-C，荒牧，1968，新井，1979，友廣，1988，若狭，2000）に由来すると考えられる。なお、近い層準から採取された試料７に含まれる白色軽石や白色の火山ガラスについては、詳細が不明なことから、現段階での起源についての考察は難しい。ただし、６世紀初頭に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳渋川テフラ（Hr-FA，新井，1979，坂口，1986，早田，1989，町田・新井，1992）であれば、本遺跡周辺では比較的粗粒か軽石が含まれていることから、その可能性は低いのかも知れない。

２区西部深掘トレンチの試料２に含まれる火山ガラスについては、その形態や色調さらに屈折率などから、約1.3 ～ 1.4万年前*1に浅間火山から噴出した浅間板鼻黄色軽石（As-YP，新井，1971，町田・新井，2003）や、約1.7万年前*1と約1.6万年前*1に浅間火山から噴出したと考えられている浅間大窪沢第１軽石（As-Ok1，中沢ほか，1985，町田・新井，1992，早田，1996）や、浅間大窪沢第２軽石（As-Ok2，中沢ほか，1985，町田・新井，1992，早田，1996）などの浅間大窪沢テフラ群（As-Ok Group）に由来すると思われる。

３区西壁溝北の試料２に含まれる淡褐色の軽石や火山ガラスについては、その層位や特徴などから、As-Bと考えられる。

以上のテフラ同定成果をふまえて、各地点のテフラや土層について次に考えてみたい。２区南壁東部の試料１に含まれる淡褐色の軽石や火山ガラスも、その岩相からAs-Bに由来すると考えられる。土層の層相から、ここではⅡ-a層がその降灰層準に近い土層と推定される。したがって、２区東部で２層準に認められた洪水堆積物（Ⅲ-ｃ層およびⅡ-ｂ層）の層位は、少なくともAs-Cより上位でAs-Bより下位にある。さらに、Ⅲ-ｃ層は１区における発掘調査で鬼高期の住居址を覆うらしいことから、いずれも鬼高期以降の洪水に由来すると考えられる。

２区南壁溝・流路間のⅢ-ｃ層の下位から採取された試料２に含まれる灰白色の軽石や軽石型ガラスについても、その岩相からAs-Cに由来すると考えられる。また、土層の層相から、ここではⅡ-ａ層付近にAs-Bの降灰層準があると考えられる。

２区西部深掘トレンチの試料２にAs-YPやAs-Ok Groupの火山ガラスが混在しているらしいことから、この地点で認められた成層した厚い砂層については、少なくともAs-YP降灰後に形成された可能性が高いと思われる*2。最上位の土層中に多く含まれる黄灰色軽石については、岩相からAs-Cに由来すると考えられ、一連の厚い堆積物の上位に、腐植質土層を挟んでAs-C混在層に覆われる黄灰色砂質土が存在していることになる。

３区東部深掘地点で認められた土層も、この地点の土層とほぼ共通している。なお、ここでは、As-C混じりの土層中に、比較的粗粒の白色軽石が認められることから、Hr-FAも混在していると推定される。

３区西壁南部では、As-Bの上位に淘汰の良い黄白色砂の堆積が認められるが、その成因については現在のところ不明な点が多い。一方、３区西壁溝北のⅣ-ａ層に多く含まれる黄灰色軽石も、層位や岩相などからAs-Cに由来すると考えられる。また、試料３が採取されたレンズ状の黄白色砂質細粒火山灰層（Ⅳ-ａ層上部）は、その層相や含まれるテフラ粒子の特徴から、Hr-FAに同定される。その下位の土層中に含まれる比較的粗粒の白色軽石についても、岩相からHr-FAに由来すると思われる。

その上位には、Ⅲ-ｃ層に相当すると思われる若干黄色みをおびた灰色土が認められることから、Ⅲ-ｃ層は、２区での詳細は不明であったものの、やはりHr-FAより上位にあると考えられる。なお、Ⅰ-ｂ層の基底部付近にある白色粗粒火山灰層は、層位や含まれるテフラ粒子の特徴から、1783（天明３）年に浅間火山から噴出した浅間Ａ軽石（As-A，荒牧，1968，新井，1979）に同定されよう。

６．まとめ

伊勢崎市南久保遺跡において、地質調査とテフラ検出分析さらに火山ガラスの屈折率測定を実施した。その結果、厚い成層した水成堆積物の中およびその上位の腐植質堆積物から、下位より浅間大窪沢テフラ群（As-Ok Group, 約1.6 ～ 1.7万年前*1）や浅間板鼻黄色軽石（As-YP, 約1.3 ～ 1.4万年前*1）に由来する可能性のある火山ガラス、浅間Ｃ軽石（As-C，４世紀初頭）、榛名二ツ岳渋川テフラ（Hr-FA，６世紀初頭）、浅間Ｂテフラ（As-B，1108年）、浅間Ａ軽石（As-A，1783年）などのテフラ層やテフラ粒子を検出できた。また、腐植質堆積物には、縄文時代中期の遺物を含む砂層のほか、Hr-FAとAs-Bの間に少なくとも２層の洪水堆積物が挟在されていることが明らかになった。

*1　放射性炭素（14C）年代．As-YPの暦年較正年代については、約1.5 ～ 1.65万年前と考えられている（町田・新井，2003）．

*2　本調査後に作成された別の深掘トレンチの土層観察で、成層した砂層の下位においてAs-YPの堆積が認められたらしい（群馬県埋蔵文化財調査事業団、岩崎泰一氏談）．

文献

新井房夫（1962）関東盆地北西部地域の第四紀編年．群馬大学紀要自然科学編，10，p.1-79.
新井房夫（1979）関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層．考古学ジャーナル，no.157，p.41-52.
荒牧重雄（1968）浅間火山の地質．地団研専報，no.45，65p.
町田　洋・新井房夫（1992）火山灰アトラス．東京大学出版会，276p.
町田　洋・新井房夫（2003）新編火山灰アトラス．東京大学出版会，336p.
中沢英俊・新井房夫・遠藤邦彦（1984）浅間火山，黒斑～前掛期のテフラ層序．第四紀学会講演要旨集，no.14，p.69-70.
坂口　一(1986)榛名二ツ岳起源FA・FP層下の土師器と須恵器．群馬県教育委員会編「荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡」，p.103-119.
早田　勉（1989）６世紀における榛名火山の２回の噴火とその災害．第四紀研究，27，p.297-312.
早田　勉（1996）関東地方～東北地方南部の示標テフラの諸特徴－とくに御岳第１テフラより上位のテフラについて－．名古屋大学加速器質量分析計業績報告書，７，p.256-267.
友廣哲也（1988）古式上師器出現期の様相と浅間山Ｃ軽石．群馬県埋蔵文化財調査事業団編「群馬の考古学」，p.325-336.
若狭　徹（2000）群馬の弥生土器が終わるとき．かみつけの里博物館編「人が動く・土器も動く－古墳が成立する頃の土器の交流」，p.41-43.

表１　テフラ検出分析結果

地点名	試料	軽石・スコリア			火山ガラス		
		量	色調	最大径	量	形態	色調
２区南壁東部	1	*	淡褐	3.8	**	pm	淡褐
２区南壁東部	3	*	白，灰白	2.1,2.3	**	pm	白，灰白
２区南壁東部	4				*	pm	白
２区南壁東部	6	**	灰白	4	**	pm	灰白
２区南壁東部	7	**	灰白＞白	6.1,2.0	**	pm	灰白，白
２区南壁溝・流路間	2	**	灰白	2.6	**	pm	灰白，白
２区西部深掘トレンチ	2				*	pm	白，透明
３区西壁溝北	1	**	白（光沢）	2.8	**	pm	白
３区西壁溝北	2	**	淡褐	2.2	***	pm	淡褐
３区西壁溝北	3	*	白	2.1	**	pm	白＞灰白

****：とくに多い，***：多い，**：中程度，*少ない．最大径の単位は，mm．

bw：バブル型，md：中間型，pm：軽石型．

表２　屈折率測定結果

地点名	試料	火山ガラスの屈折率（n）	測定粒子数
２区南壁東部	6	1.514-1.519	32
２区西部深掘トレンチ	2	1.501-1.504	30
３区西壁溝北	2	1.525-1.530	30

屈折率の測定は温度変化型（MAIOT）による

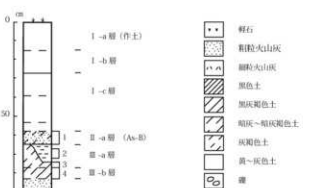


図１　２区南壁東部の土層柱状図

数字はテフラ分析の試料番号

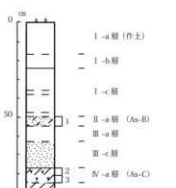


図２　２区南壁６号溝・流路間地点の土層柱状図

数字はテフラ分析の試料番号

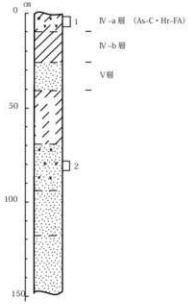


図3　2区西部深掘トレンチの土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号

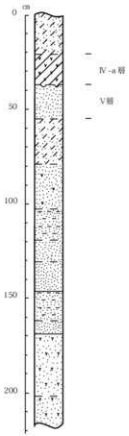


図6　3区東部深掘地点の土層柱状図

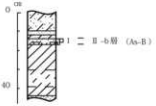


図4　3区西壁南部の土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号

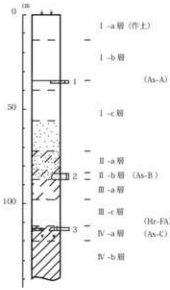


図5　3区西壁溝北地点の土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号

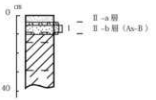


図7　4区 As-B 下面の土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号

２．南久保遺跡におけるプラント・オパール分析

（株）火山灰考古学研究所

１．はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸（SiO_2）が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。プラント・オパール分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査が可能である（杉山，2000）。

２．試料

試料は、２区南壁東部と４区As-B下面の２地点から採取された計２点である。試料採取層位を分析結果の柱状図（図１）に示す。

３．分析法

プラント・オパール分析は、ガラスビーズ法（藤原，1976）を用いて、次の手順で行った。

１）試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）

２）試料約１gに対し直径約40μmのガラスビーズを約0.02g添加（電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量）

３）電気炉灰化法（550℃・６時間）による脱有機物処理

４）超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散

５）沈底法による20μm以下の微粒子除去

６）封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成

７）検鏡・計数

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来するプラント・オパールを対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート１枚分の精査に相当する。試料１gあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズ個数の比率をかけて、試料１g中のプラント・オパール個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体１個あたりの植物体乾重、単位：10^{-5}g）をかけて、単位面積で層厚１cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる。イネの換算係数は2.94（種実重は1.03）、ヒエ属（ヒエ）は8.40、ヨシ属（ヨシ）は6.31、ススキ属（ススキ）は1.24、タケ亜科（ネザサ節）は0.48である（杉山，2000）。

４．分析結果

水田跡（稲作跡）の検討が主目的であることから、同定および定量はイネ、ムギ類（穎の表皮細胞）、ヒエ属型、ヨシ属、ススキ属型、タケ亜科の主要な６分類群に限定した。これらの分類群について定量を行い、その結果を表１および図１に示した。

５．考察

（１）水田跡の検討

水田跡（稲作跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネのプラント・オパールが試料１gあたり5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している（杉山，2000）。ただし、密度が3,000個/g程度でも水田遺構が検出される事例があることから、ここでは判断の基準を3,000個/gとして検討を行った。

１）２区南壁東部

Ⅳ-a層(試料３)について分析を行った。その結果、イネが4,700個/gと比較的高い密度で検出された。したがって、同層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

２）４区As-B下面

As-B直下層（試料１）について分析を行った。その結果、イネが4,300個/gと比較的高い密度で検出された。したがって、同層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

（２）イネ科栽培植物の検討（イネ以外）

プラント・オパール分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには、イネ以外にもムギ類やヒエ属型（ヒエが含まれる）などがあるが、これらの分類群はいずれの試料からも検出されなかった。

６．まとめ

プラント・オパール分析の結果、２区南壁東部のⅣ-a層および４区As-B下面のAs-B直下層では、イネが比較的多量に検出され、稲作が行われていた可能性が高いと判断された。

文献
杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）．考古学と植物学．同成社，p.189-213.
藤原宏志(1976)プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－．考古学と自然科学, 9, p.15-29.
藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)－プラント・オパール分析による水田址の探査－．考古学と自然科学, 17，p.73-85.

自然科学分析に対する担当所見

ここでは、テフラとプラントオパール、２つについて分析をした。テフラを少ない遺物にかわって、遺構の時期を判断する資料にしたいというのが目的で、プラントオパールは水田の可否である。テフラの堆積状態は、薄い層で点々とするAs-Bを除けば、As-Cのように撹拌・混上化されていた。分析でも混在ぶりは証明され、その原因が洪水だけなのか、それとも耕作によるものか課題を残した結果となっている。

成果といえるのは、As-YPが確かめられ、As-OKも可能性が示されたことである。台地の存在が示唆できたこと、形成の手掛かりが得られた意義は大きい。しかし、基盤までは達せず、地点を変えて検証する必要がある。また、上層にある河川による堆積物は、出土した遺物から縄文時代の前期や中期という年代観が得られそうである。これまで上武道路や北関東自動車道の調査で明らかとなっている,地形変化に関する追加となる情報である。プラントオパール分析は,4,000個/gを超す高い結果が出た。水田は重層するとみてよく、遺構でどう証明するかがこれからである。

表１　南久保遺跡におけるプラント・オパール分析結果

検出密度（単位：×100個/g）

分類群	地点・試料 学名	２区南壁東部 3	４区As-B下面 1
イネ	*Oryza sativa*	47	43
ヨシ属	*Phragmites*	20	7
ススキ属型	*Miscanthus type*	114	72
タケ亜科	Bambusoideae	370	194

推定生産量（単位：kg /㎡・cm）：試料の仮比重を1.0と仮定して算出

イネ	*Oryza sativa*	1.38	1.27
ヨシ属	*Phragmites*	1.27	0.45
ススキ属型	*Miscanthus type*	1.42	0.89
タケ亜科	Bambusoideae	1.78	0.93

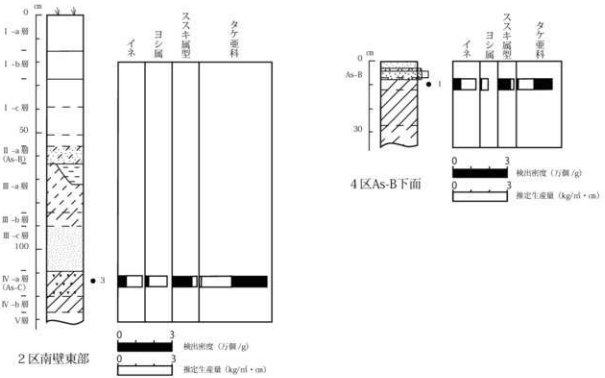


図１　南久保遺跡におけるプラントオパール分析結果

第４章　調査のまとめ

1　はじめに

検出された遺構は、試掘で確認されていた溝や土坑、水田のほかに畠、さらには古墳時代の住居跡や中世の掘立柱建物跡まで内容に富んでいる。遺物は、集落では出土することが稀な鏡、周囲との関係なのかそれとも遺跡の性格を暗示しているのであろう、少量ながら円筒埴輪、瓦が注目である。また、出土量のほとんどを占めている縄文土器も、これに付け加えられる。推定範囲の一角だけであるが、点在する調査区がトレンチの代わりとなって、川沿いにある村の様子を知ることができた。

ここでの最大の関心事は、佐位郡衙に通じる官道ではないか、という道路状遺構である。早速、三軒屋遺跡の東、大道西遺跡でも同様な道路状遺構が検出された。片や粕川沿いの低地、一方は谷地を横断している。これまでは寺院や古墳がある台地にばかりで、注意の向けられることの少なかった箇所である。意表をつかれた展開で、俄然、道への関心が高まり、今後への期待がふくらんでいる。

ここでは、検出した遺構の内容からみた遺跡の変遷、道路状遺構の２点についてのべ、まとめとしたい。

2　遺跡の変遷について

遺跡は、粕川の両岸に点々とあるうちのひとつで、蛇行する左岸400m程の広さと推定されている。調査をしたのは、川から見ると反対側、中心よりも南東に寄った一角にあたる。しかし、遺構は、試掘の予想を超えて調査区のすべてに分布している。さらに広がることは確実である。As-YPとロームが、４区で堆積していることは先述した。このように表土の下には、深くなればなるほど現在の様子とは違って、氾濫で小刻みに変化した地形が隠されている。遺跡の変遷は、この地形の変化と関係している。

生活が始まるのは、遺構外とした土器が示す、縄文時代中期か前期後半である。時間の制約から調査は断念したが、図版12に掲載した土坑らしい落ち込みも、この時期のものであろう。河川沿いの自然堤防が居住の場と推定しておいて、今後、周辺での調査で明らかにできることを期待したい。

その後は、およそ古墳時代から中世まで、繰り返し利用されている。畠、次の時代の水田が立地にかなった遺構である。ともに開墾がはじまるのはいつなのか、これが課題である。時代の空白があるとすれば、天仁元年浅間山の噴火の時である。水田は、ここでも火山灰に埋もれたままである。繰り返し利用されていると表現したが、復旧の形跡に乏しく、中世とした間には時差が感じられる。

中世には、「樹（植木）の市」に比定される一帯の中にある。検出された遺構からの手掛かりは乏しい。屋敷を確認できたのは成果としても、内部の様子となると皆無であり、年代を知る資料はない。元豊通宝、青磁、白磁、常滑の甕はその可能性である。検討を残したのが溝である。中でも１区から２区を縦断している大規模なものは、用水ならば一遺跡の範囲を超えていると思われる。次への課題である。

２章で用いた時代区分と該当する遺構は、下記のようである。

古墳時代	１区、４区の住居跡、１区・２区・３区の畠
郡衙併行期	道路状遺構
平安時代	As-B下水田、４区11号溝
中世	１期　屋敷跡　４区１号溝と４区６号・７号溝で囲われた２つが想定できる。
	２期　溝
	３期　１区・２区・４区土坑、溝、１区・２区掘立柱建物跡

３　古代の道路状遺構について

この地域で、長い間取り組んできた問題に、東山道、駅家がある。東山道には、市内北東部を通過している「東道（あづまみち）」を候補にあて、駅家は「植木」をあてるというのが大勢であった。それは物証がモノをいう中で、地名と地籍図を論拠とした机上の研究でもあった。大きく変えたのは、東山道「牛堀・矢ノ原ルート」の発見である。懸案の「東道」をどう解釈するのかという問題点は残ったにしても、物証が大きくモノをいって東山道、駅家は、この地域とは縁のないもののようになってしまった。

そこに、郡衙との関係という、全く新しい視点であらわれたのが古代の道路状遺構である。路面の幅は約４ｍと東山道駅路に比べると見劣りもするが、側溝は完備している。検出された長さは90ｍ、そこに立つと一直線、いかにも官が計画して造る道は違うということを実感することができる。自然、目は先へ、先へと伸びてしまう。東は郡衙に達するのは間違いないとしても、西はどこに向かっているのだろうか。既に調査された遺跡に相当するものはなく、陸軍参謀本部発行迅速図に痕跡もない。検証は、これからである。

意義は、まだあって場所が「東道」がある台地ではなくて、低地であったことは発見とともに二重の驚きである。だからこそ残されていたという見方もできるが、意表をつくといったのはこのことで、これをきっかけに地域を見る目が変わっていくのは確かであろう。これまでは仕切りのようになっていた、柏川を超えて地域を東西につなげて見る、そんなことが必要となってきた。

最後にあらためて、道路状遺構の特徴をあげると次のようである。

検出できたのは長さ90ｍ、両側に側溝があり心々での幅が約６ｍ、路面の幅が4.20 ～ 4.30ｍである。走向はN88°Eである。路面の構成は、削り出した地山の上に細砂を混入した暗褐色土を互層にしている。最上面に「硬化面」がある。これが最終面である。時期判定は、側溝である16号溝の覆土に弘仁九年（818）の地震噴砂があり、地震で被災する時には溝が埋没していること。16号溝の覆土中位から８世紀代の杯（第33図参照）が出土していることの２点を理由とした。次の図は、平成21年６月６日に行われた調査遺跡発表会の資料である。三軒屋遺跡、大道西遺跡との関係を知ることができる。

写真図版

１区で検出された古代の道路を西上空から望む
水田地帯を横断、正面の住宅地に佐位郡衙正倉、三軒家遺跡がある。その先にある↓が地域のシンボル権現山で、手前に大道西遺跡がある。

図版 2

1　1区1号住居跡全景　北西から

2　1区1号住居跡遺物出土状況　北から

3　4区1号住居跡全景　南西から

4　4区1号住居跡カマド全景　南西から

5　4区 As-B 下水田全景　南から

6　4区 As-B 下水田畝痕全景　東から

7　4区畠全景　南東から

8　4区畠全景　南東から

1　1区1号溝断面　南から

2　1区1号溝全景　南から

3　1区2号・3号溝全景　南から

4　1区2号・3号溝A断面　北から

5　1区4号溝全景　北から

6　1区5号溝全景　北から

7　1区4号溝A断面　北から

図版 4

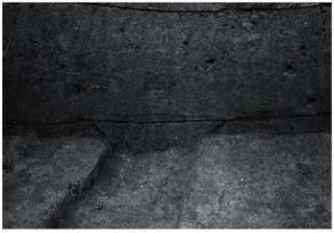
1　1区6号溝全景　東から

2　1区6号溝A断面　東から

3　1区7号溝全景　南から

4　1区7号溝A断面　南から

5　1区8号溝全景　北から



6　1区8号溝A断面　北から

7　1区9号溝全景　東から

8　1区9号溝F断面　東から

1　1区13号・14号溝全景　南から

2　1区13号・14号溝B断面　南から

3　2区1号溝全景　北から

4　2区2号溝全景　北東から

5　2区4号溝全景　東から

6　2区6号溝全景　南から

7　2区6号溝B断面　南から

8　2区7号溝全景　北から

図版 6

1　2区7号溝A断面　北から

2　2区8号・9号溝全景　南から

3　2区8号・9号溝C断面　南から

4　2区6号・9号溝北断面　南から

5　2区10号溝全景　北西から

6　2区11号溝全景　南から

7　2区12号溝全景　北西から

8　2区12号溝F断面　北西から

1　2区13号溝全景　北東から

2　2区13号溝断面　北東から

3　3区1号溝全景　西から

4　3区2号溝全景　西から

5　4区1号溝全景　南から

6　4区1号溝A断面　西から

7　4区2号・3号溝全景　南から

8　4区2号溝B断面　北から

図版 8

1　4区3号溝B断面　北から

2　4区3号溝鉄鏃出土状況　東から

3　4区4号溝全景　南東から

4　4区4号溝A断面　南東から

5　4区5号溝全景　東から

6　4区5号溝C断面　東から

7　4区6号溝全景　西から

8　4区6号溝A断面　東から

1　4区7号溝全景　南から

2　4区8号溝全景　西から

3　4区9号・10号溝全景　南から

4　4区11号溝全景　南東から

5　4区12号・13号溝全景　南西から

6　4区14号・15号溝全景　西から

7　4区17号溝全景　南から

8　4区18号溝全景　南から

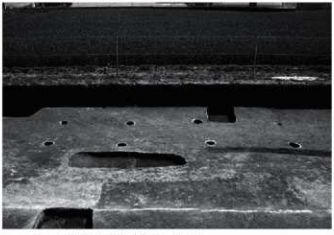
図版10

1　4区19号溝全景　南から

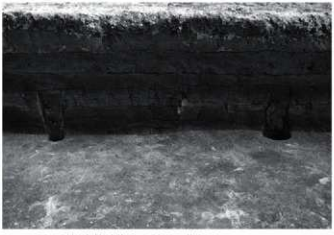
2　4区20号・21号溝全景　南西から

3　4区22号溝全景　南から

4　4区24号溝全景　北西から



5　1区1号掘立柱建物跡全景　北から



6　1区1号掘立柱建物跡A断面　北から

7　2区1号掘立柱建物跡全景　北から

8　2区1号掘立柱建物跡ピット4全景　北から

1　1区道路状遺構全景　東から

2　1区道路状遺構全景　西から

3　1区道路状遺構A断面　東から

4　1区道路状遺構A断面拡大　東から

5　1区道路状遺構C断面　西から

6　1区道路状遺構C断面　西から

7　1区道路状遺構砂造成面拡大　南西から

8　1区道路状遺構砂造成面検出状況　南西から

図版12

1　1区1面遺構検出状況　東から

2　2区1面遺構検出状況　東から

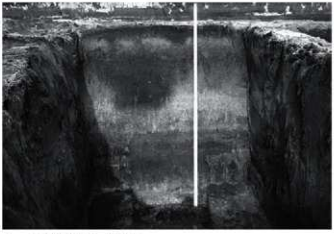
3　2区5号溝長頸壺出土状況

4　2区6号溝作業風景　南東から

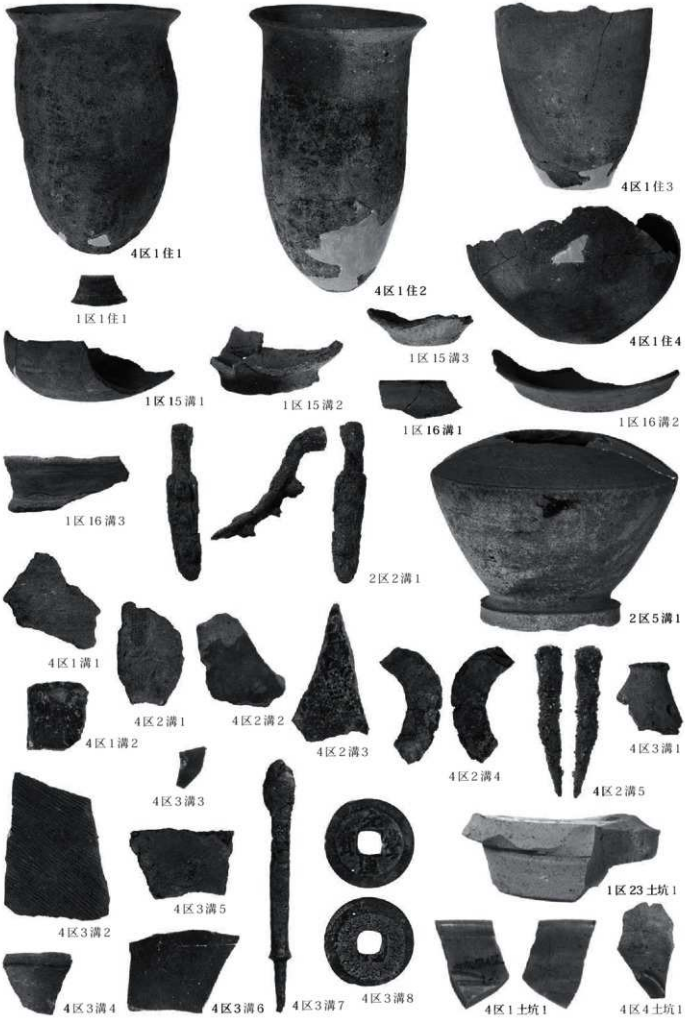
5　2区2面畠全景　東から

6　3区噴砂　北から

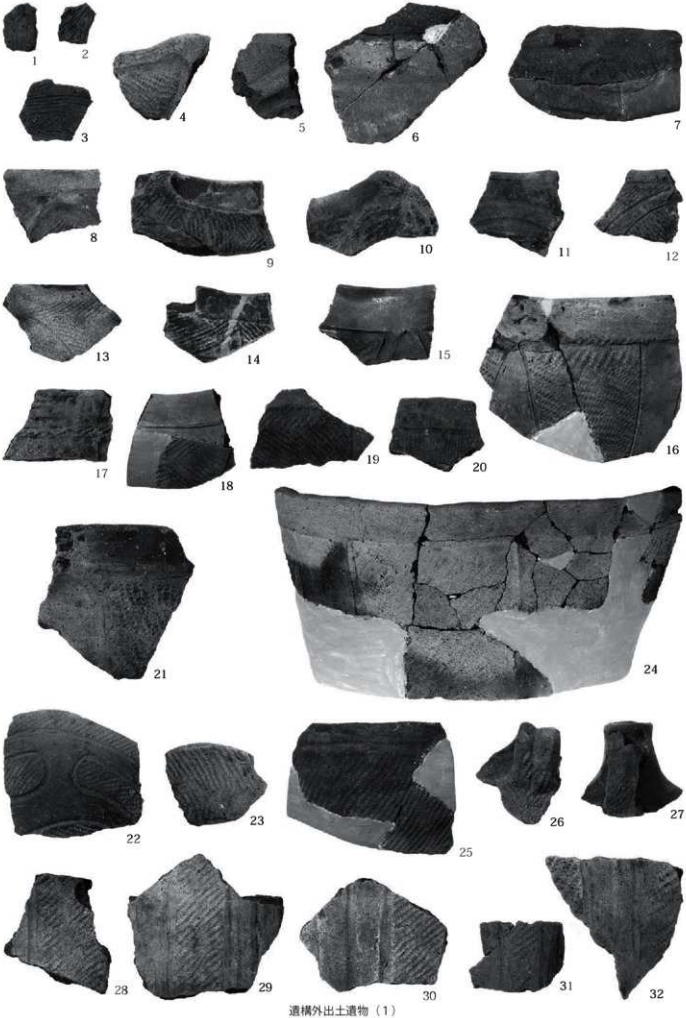
7　3区1面全景　北から



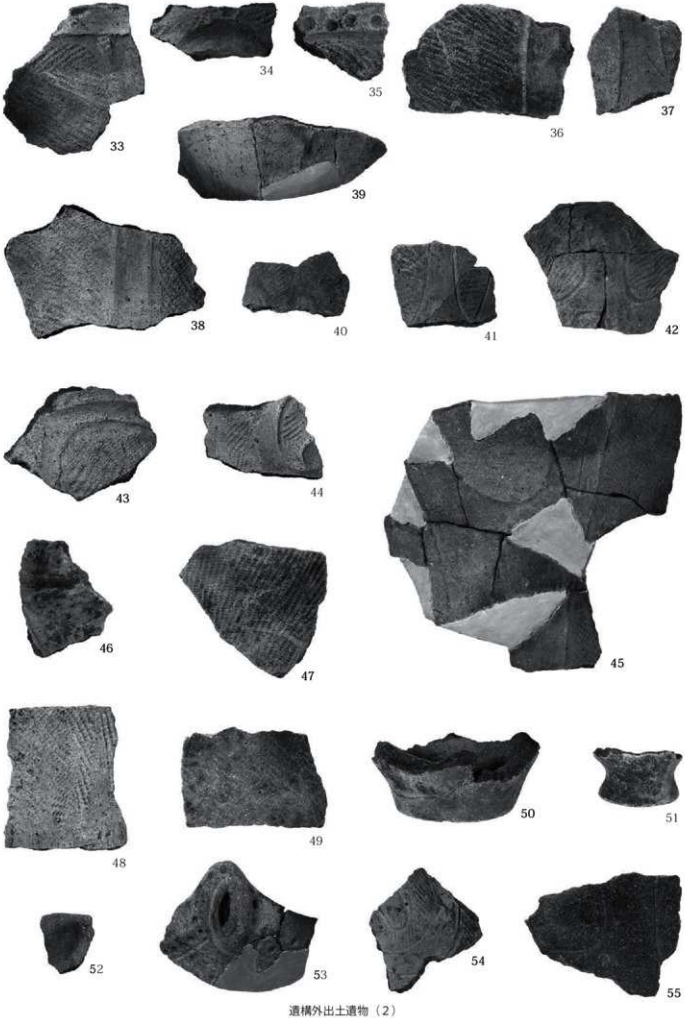
8　4区深掘断面　南から


4区1住1
4区1住2
4区1住3
4区1住4
1区1住1
1区15溝3
1区15溝1
1区15溝2
1区16溝1
1区16溝2
1区16溝3
2区2溝1
2区5溝1
4区1溝1
4区1溝2
4区2溝1
4区2溝2
4区2溝3
4区2溝4
4区2溝5
4区3溝1
4区3溝3
4区3溝2
4区3溝5
4区3溝4
4区3溝6
4区3溝7
4区3溝8
1区23土坑1
4区1土坑1
4区4土坑1

図版14

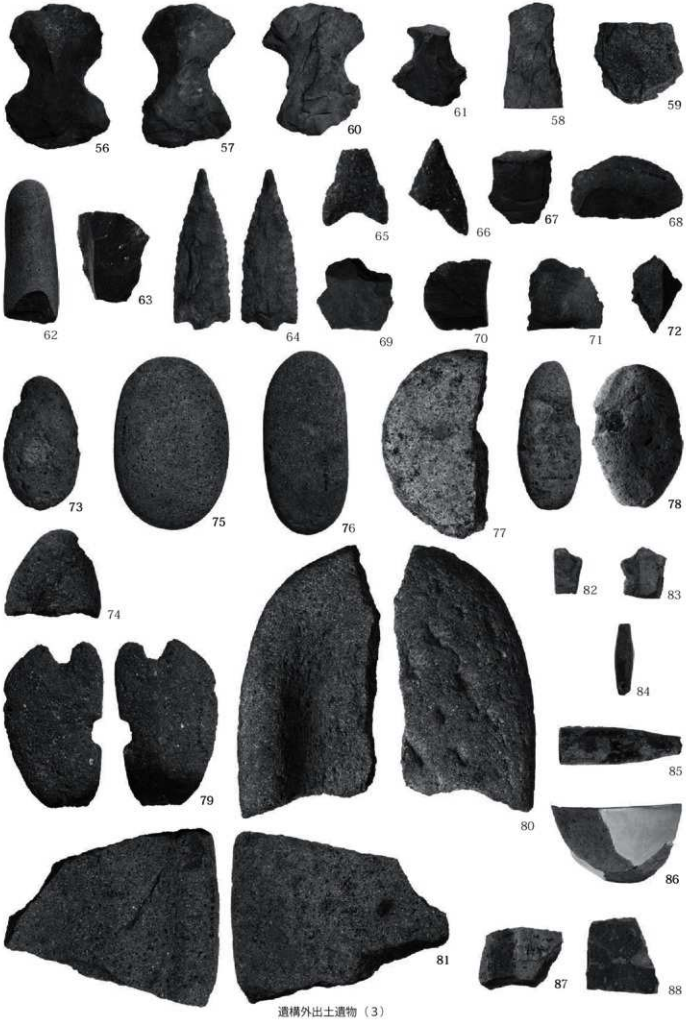


遺構外出土遺物（1）



遺構外出土遺物（2）

図版16



遺構外出土遺物（3）

報告書抄録

書名ふりがな	みなみくぼいせき
書　名	南久保遺跡
副書名	伊勢崎警察署庁舎移転新築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査
巻　次	
シリーズ名	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	475
編著者名	女屋和志雄 / 関晴彦 / 橋本淳 / 岩崎泰一 / 齊田智彦
編集機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20090911
作成法人 ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住　所	群馬県渋川市北橘町下箱田 784 番地 2
遺跡名ふりがな	みなみくぼいせき
遺 跡 名	南久保遺跡
所在地ふりがな	いせささきしかしままち
遺跡所在地	伊勢崎市鹿島町
市町村コード	10204
遺跡番号	ＩＳ 029
北緯（日本測地系）	362000
東経（日本測地系）	1391227
北緯（世界測地系）	362010
東経（世界測地系）	1391215
調査期間	20080401-20080531
調査面積	4200
調査原因	警察署庁舎移転新築
種　別	集落 / 生産 / その他
主な時代	古墳 / 奈良 / 平安 / 中世
遺跡概要	集落 - 古墳 - 竪穴住居２＋土師器 / 生産 - 古代 - 畠＋水田＋道＋土師器 / 中世−溝 58 ＋土坑 41 ＋ピット 23 ＋掘立柱建物跡２＋集石１＋土師器＋須恵器＋石器＋金属製品＋陶磁器
特記事項	佐位郡衙に通じていると考えられる 8 世紀代の道跡が検出された。
要　　約	粕川の左岸水田地帯、佐位郡衙である三軒屋遺跡の西 600 m に位置する。郡衙から伸びる道が東西に通過している。前身の古墳時代の住居跡２軒、畠と平安時代の水田、２～３時期の変遷がある中世の溝,掘立柱建物跡などを調査した。下層には縄文時代の遺構が存在している。テフラ分析、プラントオパール分析の結果を掲載。

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書　第 475 集

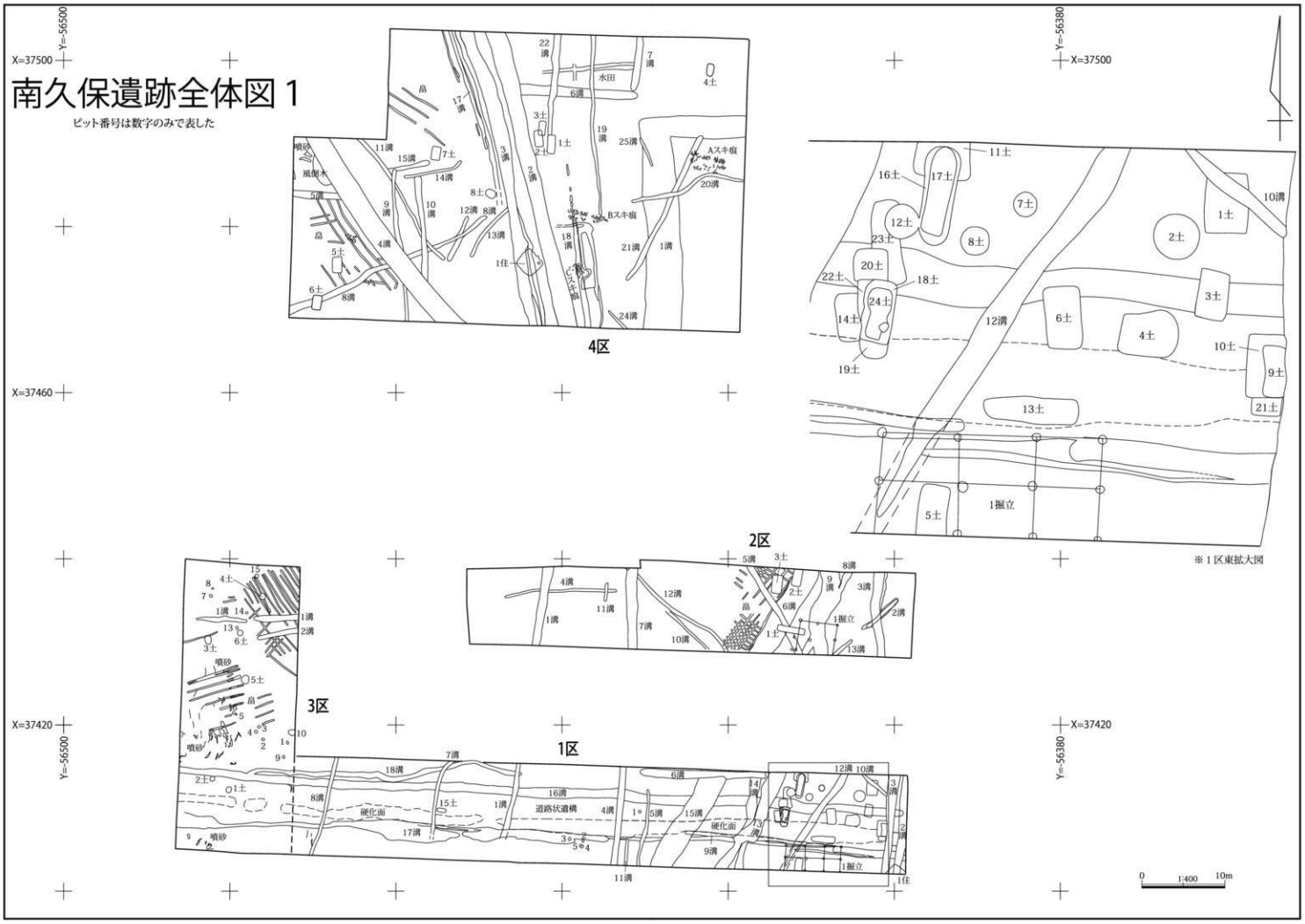
南　久　保　遺　跡

－伊勢崎警察署庁舎移転新築事業
に伴う埋蔵文化財発掘調査－

平成 21 年（2009）9 月 4 日　印刷
平成 21 年（2009）9 月 11 日　発行
編集・発行 / 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
〒 377-8555　群馬県渋川市北橘町下箱田 784 番地 2
電話（0279）52-2511（代表）
ホームページアドレス　http://www.gunmaibun.org/
印刷 / 杉浦印刷株式会社

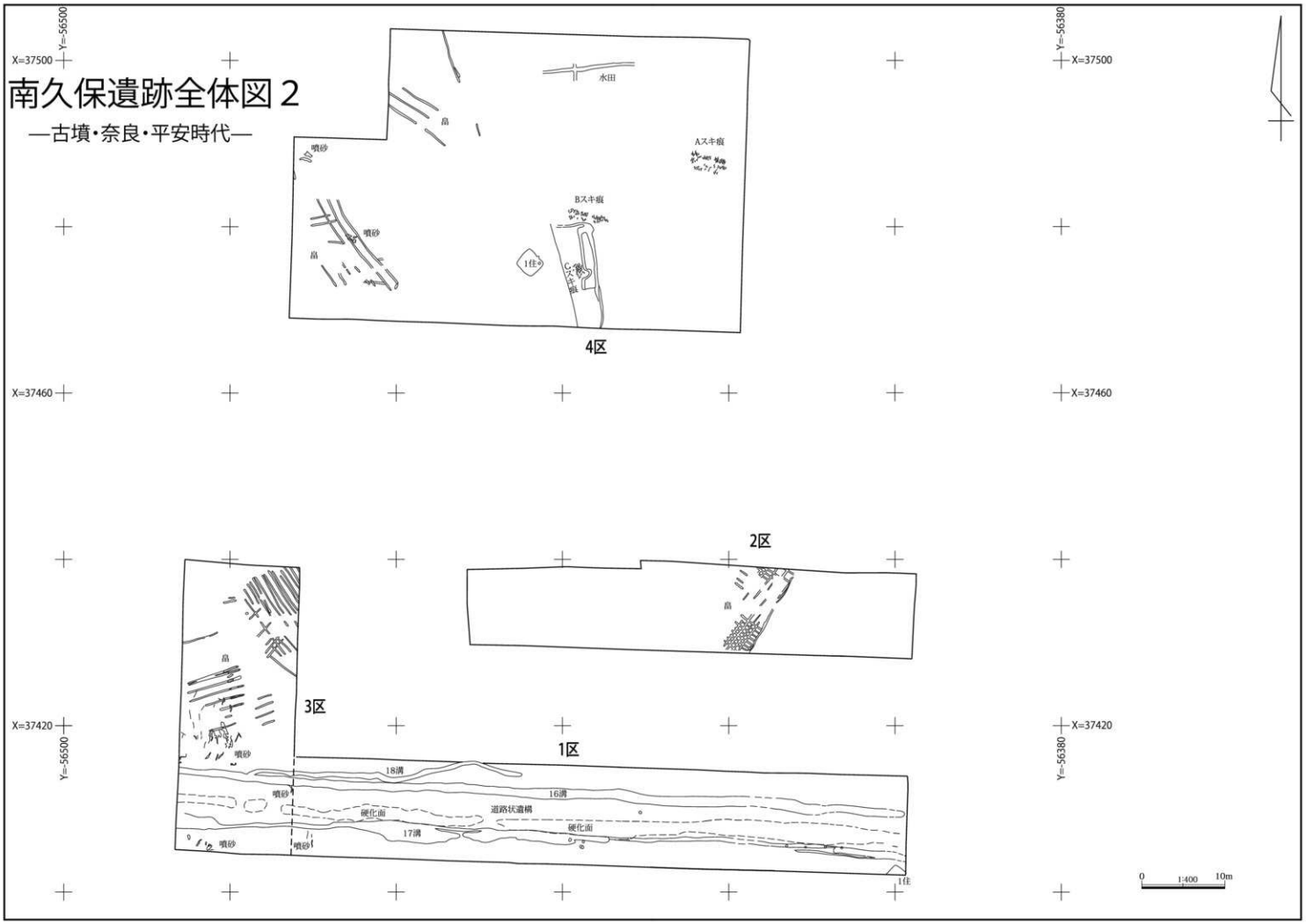
南久保遺跡全体図１

ピット番号は数字のみで表した

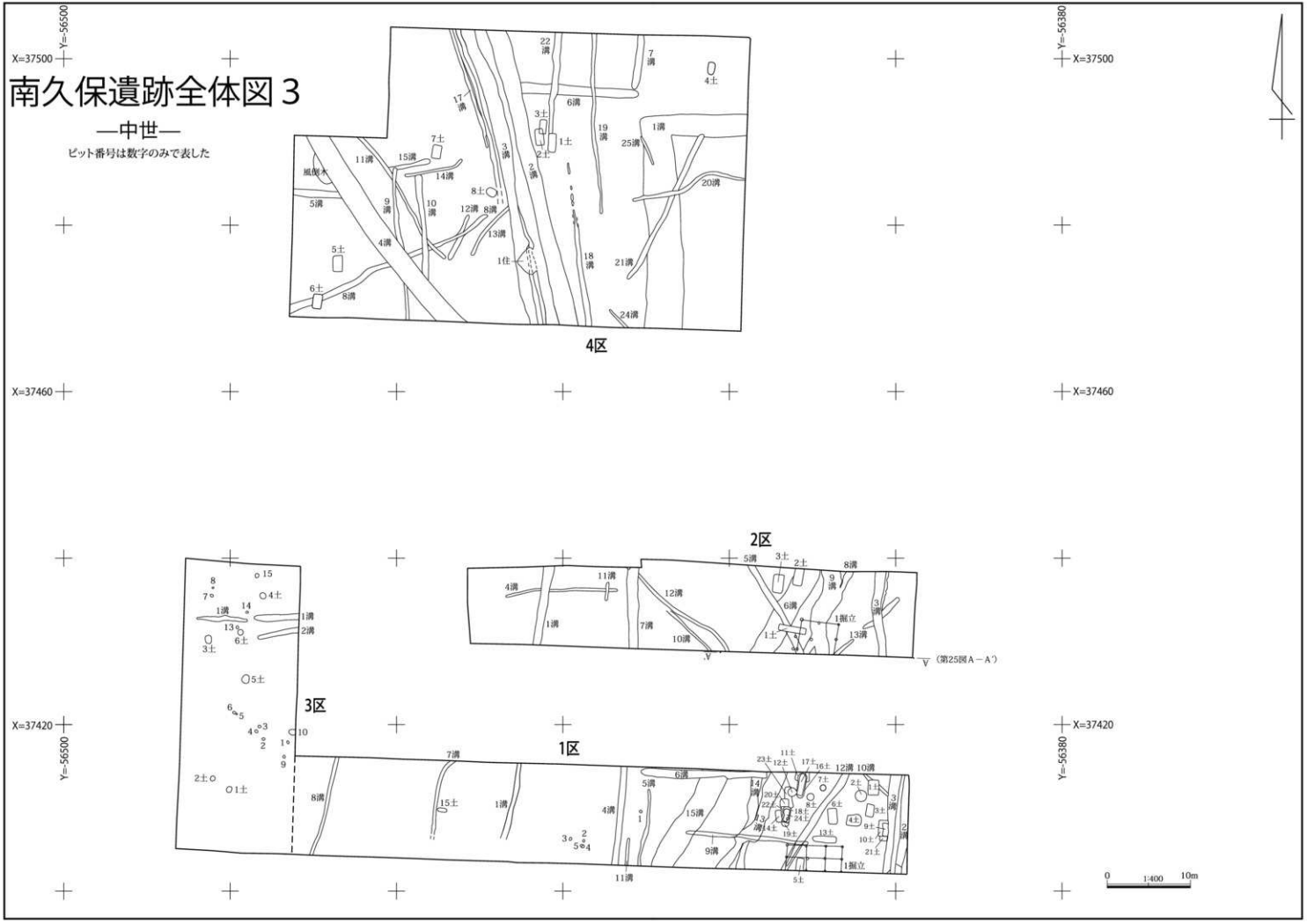


南久保遺跡全体図２

—古墳・奈良・平安時代—



南久保遺跡全体図３

—中世—

ピット番号は数字のみで表した